

79-474

征塵錄

小山劍南著

高田早苗序
三宅雄次郎序
福本誠序

明治
37 12 7
内交

東京

中野書店藏版

征塵録序

劍南一去杳として消息なきもの三五年。一日突如として華門を叩く者あり。兒輩狂呼して曰く。南京さんの劍南さんが……何、劍南さんがドレ何處に。莞々として堂に上る者。滿衣滿冠の劍南なり。相見て一笑。お土産はと問へば。是れなりと示す。茫々たる大陸の山川都邑。收めて尺幅の裏に在り。是れ秦雲楚雨。胡寒吳熱の間より得來りし所。長安の酒屋に三杯を傾け。洛陽の茶店に鼻歌を嘯き。咸陽の宮墟に不善を思ひ。驪山の温泉に輪廓を夢みたる光景。歴々として目に睹るが如し。惟ふに此卷永く天地の間に留まらば。マルコ・ポーロ必らずしも名を西歐に專にせじ。事業既に不朽なり。而も遊子の遊興未だ盡きず。云ふ明朝將に再び征途

に上らんとすと。嗟乎此次嚮ふ所は藏歟、蒙歟。天を仰げば、五彩の雲あり。地に俯せば、千仞の壑あり。其れ何の駕を税する所ぞ。我つらく、劍南を觀るに、劍南自ら劍南の相あり。注意し給へ。

牛門逸民 福本日南識

征塵錄序

わが國民の支那に關する智識は、この戰役の以前に於て極めて必要なりき。皇軍連戰連勝の源因、多くあつて存すべしと雖も、わが國民、殊に戰局の當事者が、支那の事情を研究し、大小遠近共に措かざりしに非んば、何ぞ克くこれを致さんや。而して今後參軍帷幄の畫策、外交官の懸引は、我をして最後の勝利を得せしむるや必せりと雖、然かも其基く所は、支那に關する智識の深くして博く、支那に關する研究の周到にして緻密なるに因らずんば非ず。更に思を平和克復の後に馳せ、戰後經營てふ至重至大の問題が、如何にして解釋せらる可きやを考ふるに至つて、所謂支那研究の精神、普く我社會の上下に彌蔓するの切要を感ぜざる能は

四
ず。戦は戦の爲の戦に非ず、戦後に於ける經營の爲の戦なり。其經營の適否、我國民をして歐米列強の走狗たらしめざると否とは一に支那に關する智識の厚薄多少に因るものと爲さば、渺たる此一小冊子豈に時世に貢獻する所無しといふを得んや。且それ此書實地踏査の上に成る、讀者をして坐なからに名所を知るの便あらしむるは、余の信じて疑はざる所なり。

明治三十七年十月沙河大捷の報を聞きて

半峯居士 高田 早苗 識

征塵錄序

劍南一たび去り杳として消息なし。頃日、辨髮胡服して來り訪ふ者あり。見れば則ち劍南。曰く數年遍歴せし所を記述し、題して征塵錄といふ。敢て一言を求む。稿本は書肆より回送すべく、吾は明日再び滿洲に向ひ出發す。小山田與清は樓頭萬卷中に在りて南面百城の樂と爲し、者劍南其の曾孫として南船北馬唯だ風雲に乗せんことを之れ冀ふ。江戸子は粹を以て極とし、天下國家といふを野暮と名づくる者。劍南江戸に生まれて動もすれば悲憤慷慨劍を抜て歌ふ、豈に奇ならずや。而も其の記する所を讀めば、亦た幾許か曾祖の文事を認め、幾許か江戸子の意氣を認むべきに似たり。近來戰役の關なるに拘らず世の青年往々一家の快

六
樂といふに専心なるに、身を挺して艱險を冒かす劍南の如き寧
ろ多とすべきに非ずや。

明治三十七年十一月

雪嶺迂人

征塵錄

目次

初て大陸に遊ぶ	一
戦後の燕京	四
古琴台を弔ふ	一〇
西征記	二三
支那内地の行路難	六〇
道路、車馬、氣候、城市の事	六六
驪山宮と漢代の名區	六九
咸陽遊紀	七三
古長安	七五
平安府城の兵備	七六

龍門遊紀……………七七

南征記……………八五

 襄河水師……………一三三

 西安漢口間道理……………一四四

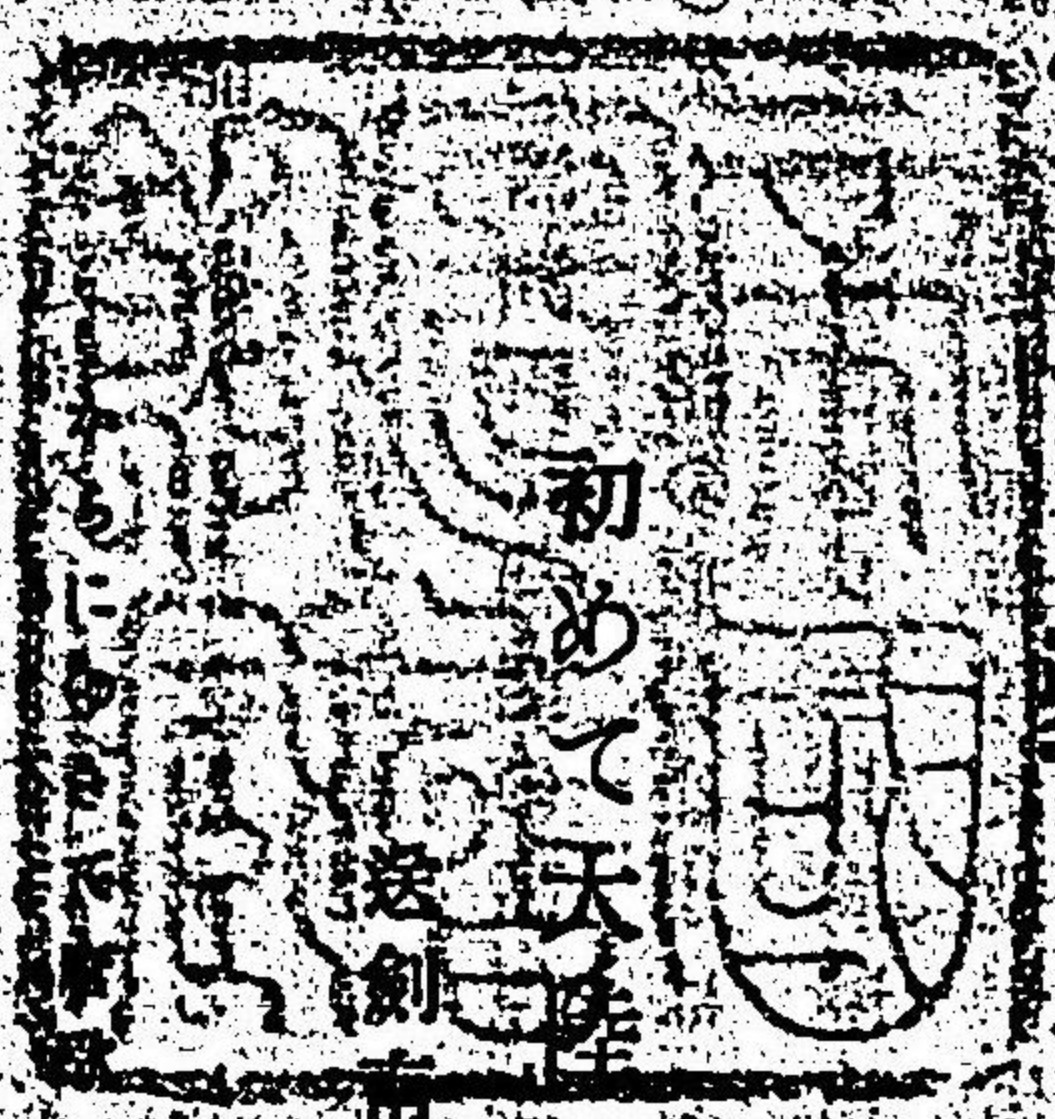
 一道の釐金局……………一七

 殉難六烈士……………一八

 支那勞働者の境遇……………三一

 わが見たる支那風俗……………三五

正 塵 録



劍南小山田淑助著

明治庚子の年五月の月底と云ふに悉花の都を後にして新橋を打出てぬ木強子の如きものと雖も此時多少の感概なくやば。涼車の裡にて東海道に一夜を山陽道に一夜を明かし三日目には關門海峡を度り

正塵録

龍門遊紀……………七七

南征記……………八五

襄河水師……………一三三

西安漢口間道理……………一四四

道の釐金局……………一七七

殉難六烈士……………一八八

支那勞働者の境遇……………二三一

わが見たる支那風俗……………二三五

征塵録

初めて大陸に遊ぶ

送劍南之支那

劍南 小山田淑助著



於牛門吉照樓上懸鐘 日 南

唐の野に風吹き起こり雲飛はん
あきなひするが馬躍らすか

其雲に乗れ其風に乘れ

彼取りて代はるへしてふ人を得て

友とせされはゆかぬともよし

明治庚子の年五月の月底と云ふに愈花の都を後にして新橋を打出てぬ木強予の如きものと雖も此時多少の感慨なくてやは

涼車の裡にて東海道に一夜を山陽道に一夜を明かし三日目には關門海峡を度り

征塵録

て九州に入り翌日蜻蜒洲の大尾崎陽に着。

長崎人は由來海外的觀念に富み外客旅人を愛重す。是れ蓋し自然の勢にして一帆影の出入も全市の消長に關するを以てマドロスと雖も苟くも待遇せざるなり。而して五大洲の一波一動も先づ鶴鳴灣の岸を洗ふが故に自らにして世界の面影に接觸すること多く且つ早く東京の風習流行に感染するよりも先づ上海のそれに感染す。魚を賣買するにも數を以てせずして斤を論するなり。試みに晴天朗日出島の埠頭に立つて東北の天を望まば蓋し思や半ばに過ぎむ。丸山の美人は朝に窮北の客を送り夕に極南の船を迎ふるに非らずや。稻佐一郭は老媽了環の輩に至るまで能く露人の語を解するに非らずや。年頃は未だ二八の春淺き清宮が鼓聲、ホーン、君見ずやソリヤ亞細亞の空は曇り勝ち―雨か霞かチーハタ雪か屍曝すはチー朝鮮か滿洲西比利亞の高原かサノサと唱ひ去り唱ひ來るを聽けば心なき身にも何となく東洋の形勢は思はるゝを、況して宿昔の志有るの士に於てをや。

長崎に滯ること二日、同港出帆の西京丸に便乗し船中一晝二夜を暮らして、上海に着く。客店東和洋行に投ず。借り受けたる一室は先年韓國の亡命客金玉均が兇手に斃ほれたる處にて今も猶ほ腥氣を留めつ。上海は小西洋と稱せらるゝに違はず、一

向支那に在るの心地せず。門を出づれば二頭馬車、自轉車、人力車、縦横に肩摩殺撃し電信電話の線蛛網の如く、銀行や會社や役所や製造所や其屋表巍然として空に掛り、街衢の寛濶なる道路の清潔なる壯大言ふばかりなし。綠陰滴るばかりなる張園、愚園にそゞろ歩きなどしては未だ見ぬ巴里倫敦の公園もかくばかりかと思はる。而して予はかく上海の繁華盛昌に驚く丈けそれだけ清國の衰亡を悲まざるばあらざるなり。誰か言ひけん如く近き將來に於て江南一帶の地或は第二の印度たらざる無きを得んや。

滬上に居る兩朝夕、詳しき事情を察し親しき朋友を訪ふ暇も無くて長江を溯りぬ。

鎮江

琵琶聲竭一千年、江上月明依舊圓、風葉秋花今不是、逆橋影動水中天。

小孤山

孤峯倒立大江心、驚濤噬雲々吼吟、高處梵宮看不見、天颺吹落木魚音。

赤壁

江勢如飛箭、危岩欲落舟、一天明月夜、吟破畫圖秋。

把酒酬阿瞞、叩舷發醉歌、波心秋月出、烏鵲掠天過。

船はいつのまにか漢口に着く。留ること僅かに數月、未だ大小の觀察を遂げざるに踏雲慘毒北平の天黒うして望めども辨ぜず、拳匪の亂日々益々熾んなり、故有りて此地を引揚げ歸國し、崎陽半島の一角に閑臥して再舉の機を俟つこととなりぬ。爾の後使館の包攻となり、聯軍の進撃となり、俄佛兵の暴行となり、警報連りに臻る。幾阿もなくして又た唐才常の變同志數名弄市せられたりと聞く。嗚呼昨は六義士を傷み今又た此事有り。

けさ吹きし風には漏れて此夕降る春雨に散る櫻かな

かくて清廷の事日に非にして復た收拾す可らざらんとす。

一葉落ち二葉散りにし紅葉の亂れてけさは木枯の音

戦後の燕京

客途端なく崎陽に滞ること垂んと兩星霜、痴狂詩酒に耽溺し、薄伴花月に羞めらるゝこと屢ば、而かも自ら勵まして曰く此の如きも猶ほ無錢にして故郷に在り泣き面下げて友朋を見るに優ると、或は秋風萬里高躋を思ふては杉樓に壯士と劍舞し、或は春雨一燈遠夢を勞しては寶亭に嬌娘と燕語す。或は健兒と壁を把り、危言綱常

を扶け、秃筆豺狼を斬らんと期す。一夜月明夢覺むるの時、醉醒めの水一杯、清冽心肝に徹し、復た寝る可らず。獨り思へらく丈夫須らく壯遊四方を窮むべし、奇功天荒を破るべし、眇乎たる井天地老死すべき處ならんやと、再び大陸に登るの意俄かに決す。

壬寅四月の中央、知己朋友及び市長知事など數十名予が爲めにとて小島郷なる福屋に集り、一夕の宴を張る。城野威臣氏贈るに來國光の短刀一口を以てす。寄贈定めて深意の繋る有るべし。鈴木天眼が颯爽たる瘦鶴の病軀を推して卓に立ち壯なる送辭を述べたる相貌は今猶ほ目前に髣髴たり。辨來頭髮綠千莖、中繁和心兼漢情。戦後山河花尙好、春風三月入燕京。こは足立敬亭翁の佳什、何ぞ其の送意の深きや。又た巾幗の豪傑有り、笠原田鶴子となむ云へる。自ら女學を興し、鶴鳴校と云ふ。崎陽女子の風教頼て以て崇實なり。

花も實もつみもて歸へれ諸越のみ山の草木わけつくしつゝ

こは其の手を送るとて物せるもの。

歌舞筵罷冷玉壺、美人掩袖發嗟吁。關河自此三千里、附與春風迎送吾。十三日の夕稻佐山の夕照港頭の波に映射する頃、數千人に送られて乗船一夢掃、醒むれば身は既に

朝鮮の群島を過ぎて渤海洋上に在り。七絶一首を得たり。壯心歴海氣衝天。笑對春風醉後眠。千里不知行旅苦。夢中參破美人禪。十六日山東角を天邊煙波の間に見る。其夜芝罘に着。上陸市街を見物し。開平炭鑛會社の倉庫の規模の大なるを見て。轉た英人の事業の盛んなるを羨む。十八日は白河を溯り塘沽に入る。白河の濁水に壽命を繋ぐこと數日の後。鐵道にて漢口(一)楊村(二)落垓(三)廊房(五)安定(六)黃村(七)豐臺(八)の停車場を経て北京に着。此の鐵道の日本と事變はりて珍らしきはその貨錢の高きが爲めにも非らず。その廣軌式にて馬鹿に粗末なるが爲めにも非らず。三等客座に天井なく。乗客が殆んど石炭荷物と同様に取扱はるゝが爲めにも非らず。但だ乗合の人種多様なることこそ我國などにてはなか／＼に見られぬ奇觀なれ。戦後の皇都は目も當てられぬ様なり。城郭の彈痕。市街の燒跡。民氓の流亡。山河の寂寞。外兵の暴狂。道義の死滅。さては弱肉強食。見るもの聞くもの。何かは征士の心を傷めざる「天步難」を作る。

天步難 今天步難。經綸無人天步難。佳人此夕睡不著。悄抱琵琶倚欄干。時事感來淚滿把。天子蒙塵猶未還。京城萬戶化焦土。生民何計安其堵。朝廷南遷奈偏安。江山半壁忽失主。峩冠大帶如傀儡。無一士支社稷頽。坐見人間鼎輕重。已矣宗業一炬灰。彈琵琶兮

聊寄恨。聽者誰分。彈者恨。擱撥悵然對月明。風冷露白。猿腹亂。想去想來更一彈。一彈一哭。淚雨濺。乍如寒蛩咽。艸根乍如奇巖激。奔湍太行道險。鑿蹄蹶千乘。過關鳴佩環。綬絃催來行宮雨。急絃交送冤鬼語。又如流亡叫饑餓。又如胡兵拔劍舞。聽來吾立牆之東。泣下不覺青衫紅。萬壽山頭月欲落。餘聲散作荻花風。

客居數月。日本人の商買を見るに駄目なり。日本人の工業を見るに駄目なり。銀行も駄目なり。役人も駄目なり。外交わけて駄目なり。同胞の肩身は日々に狭きを覺ゆ。手と此感を同ふするものは其れ熊城の人木村竹十郎なる哉。訂交日猶淺きも百年渝らざるの契こそ結びたれ。時有りては醉後月を踏んで白雲觀に遊び。時有りては雨中驢に騎して陶然亭に上り。閑天寂地に只だ二人同酌對語。文を論じ詩を談ず。かくて情交は愈深くなりぬ。竹南詩を善くす。

似小劍南

竹南

啣盃也吐不平語。今日相逢呼爾汝。抵掌之交事已奇。解嘲有賦君唯許。燕山城郭雲迷時。宣武關門鬼哭處。吾把我詩拋彼蒼。紅箋一片乘風舉。

偶吟

露華風葉伶仃影。人世四時真斷魂。烏雀何心叫墳墓。獨蹠有眼睨乾坤。誰哉淚血憐長

吉我輩文章吊屈原天地之間悉傷目磊々醉酒倒青尊

北京の宣武門外のわたりはさなきだに殺風景なるを采市口てふ罪人死刑場に程遠からぬ保安寺街なる老樹下の破れ會館に賓として暮らしたる數ヶ月の物憂さ加減は實に御話しにならず一夜嚴寒霜氣滿天月影苦瘦鎌より細く空院人見えず樹聲策々忽ちにして心を千里の外に馳せ忽ちにして今は亡き人などを忍び念地寂然獨り膝小僧を擁して思想に沈む會ま友人横川省三氏の近ごろ滿洲蒙古の旅行を終へて歸りたるが來り訪ふ報を齎らして曰ふ同志鹽谷君黑龍江にて地形探查の際誤つて俄兵に捕はれ獄に投ぜられ今は救急の道もなしと且つ語り且つ泣く嗚呼君はわが邦にては雪の窮北の人なり沈着寡黙苟くも笑語せずその將來に囑望するもの尠からず

心して今より飼へよ西比利亞の野邊に騎るべき黒の若駒

此の歌の心を見ても君の志の小ならぬを知るに足らん歟予報を得て偏に志士の薄倅を悲み歌を作つて世の輕裘肥馬の人に寄す

咄矣錦衣魚食人咄矣休夢太平春一輩才度是大陸戎馬關山黑煙塵奪畧無飽豺狼類剛強必王仁弱臣俠國男兒發義憤畫策備嘗幾酸辛我友鹽谷亦殉節欲獲虎子入

虎穴七首探誤觸爪牙神算鬼籌乍挫折副車有恨逸祖龍橋頭馬駭寬難雪屈辱何又異愚嬰誰代管仲解縲繼當時同遊約弟兄今夜傷心睡難成遙想鏡窓人困臥枕頭有聲夢忽破老虎吼月々欲裂落水千山北風鳴

雨雪漫々殺氣橫春風不得度長城三千里外刑場夜夢振大刀斬俄兵

横川君が旅行談を聞くに斷腸の事のみ多かり東三省は清朝發祥の地而して今何の狀ぞ奉天將軍は全く俄皇の忠僕なりさるにても心に關はるは四百餘州の前途なる哉朝に夕を測られざる四百万の蒼生こそ不憫の至りなれ一夜天寒同感の士王鳳文と同酌時世を語り感發激越更の深きを知らず予長古を賦す梧生之に次す

原韻

劍南

乍聽驚濤度林樾北風肅殺天欲雪宣武門外月如霜西山壯氣襲髮與君煖酒酌且談談及時事何激越笑吾十年違家計被鄉童與狂痴名詩酒且學狂杜牧但談風月不談兵一朝醉醒慨然起大陸山河戰塵生自曰此才或可用半夜雞鳴非惡聲蹴枕把劍斫地舞度海三來古燕京弔遍山河破裂跡慷慨如山淚縱橫嘆息弱肉是強食曰王曰帝皆盜賊勝者不問敗者理仁義不敵兵馬力皇宮變作胡馬厩祖宗陵汚不可拭相語至此忽嗚咽泣誓盡策拯時局斷々不忘丈夫分以盡天任斯人職夜深酒冷火半灰偶

看雪中梅花毅然開。更酬一杯大呼曰。回春誰爲天下魁。

次韻

王 梧 生

大蔭我欲手植樹。養成誓將國恥雪。苦愁綿薄力不勝。千鈞挽之在一髮。十年小挫與大辱。幾々萬國皆吳越。歐風美雨商戰成。人居只實我居名。強秦烈禍在眉睫。無端肺腑滿敵兵。同文古國有俠氣。對此不覺憂憤生。團結盟會曰東亞。欲與我曹求同聲。不以小嫌敗大計。雲天高義著燕京。從前大東固唇齒。六國行義空縱橫。我皇年來日肝食。欲去國蠹及民賊。奈何積習固且頑。毒霧陰霾皆阻力。哀哉愛國六君子。血濺帝衣不可拭。大誰□將鐵鑄成。從來一善關一局。桑榆之收尙未晚。此日此義此天職。嗟我同胞志著灰。晦極方開嶺上梅。黃人終是神明胄。世界前途此大魁。梧生名は風文陝西の進士。惆悵不羈。官を求めず。貧洗ふが如きも患えず。順天時報の主筆として其名中外に重きを作せり。

古琴臺を弔ふ

古琴臺は清國湖北省なる漢陽府古集賢村の南に在り。漢口よりして此勝跡を訪はんと欲せば舟筏を備ふて江を度らざる可らず。晴川閣を右に黃鶴樓を左に烟波蒼

茫の間に見て欸乃斷續花師を催すこと一點鐘許りにして武昌なる一河關の下に到る。關は頽然として自ら支へざらんとす。『北門鎖鑰』の四大字を掲ぐ。風雨幾年をか經たる。扉字半は、抛つ之を過ぎて荒驛野亭をゆく。數丁、籬落疎々たる一村に到る。牛羊淺沙に臥し、雞犬窮巷に聞ゆ。驢に騎りたる牧童、轎子に坐りたる詩人、宛然一幅の畫なり。輕槳を浮べて月湖の清波を碎き、采蓮の歌をそここいに聞きつ。遂に斷橋の下に出て歩を移すと數十歩、古色蒼然たる石垣環繞の古臺を見る。父老に問へばこれなむ伯牙斷琴の處なりと云ふ。客低徊去る能はず。去つて之を弔ふ。頽然たる門頭に『古琴臺』の三字を大書す。門を通じて石階を上り、欄を廻り廊を歩みて遂に蕭洒たる小園の側に出づ。幽花主なくして池畔に發き、黠鼠時を得て石上に跳り、亭樹風雨に荒れたり。方丈の讀書堂は水に臨んで立ち、古樸蕭疎清風窓に満てども絶えて啞喑の聲を聞かず。獨り鳥雀の梁檐に噪ぐのみ。見る影もなき有様なり。微吟小歩端なく前房の欄角に來りて石壁に刻まれたる高山流水の詩を見る。傳へ云ふ。篋葉を以て筆に代へ書きたるなりと。何ぞ其の古賢を思ふの切なるや。一唱巍々、再唱洋洋。宛かも秋夜の月明に古賢の琴聲を聴くが如く然り。嗚呼。伯牙や子期や。今猶ほ生けり。何ぞ死せりと謂はん。客嘗て伯牙子期の古事を聞くに兩心相照し同情相憐み

義風の凝結する處萬古に亘つて溜びざるもの有り平生深く其の品流の高を欽ふ
今一たび其遺跡を尋ぬるに漢陽の水は洋々として流れ大別の山は巍々として聳
ゆ而して其人を見ず悵然として佇立するもの之を久ふす獨り湖風に對つて悲吟
一唱すれば白鷺一雙飛んで蘆葦に入つて影を見ず去つて歌「破れ琴」を作り聊か欽
古の情を抒ぶと云ふ

其二

大別山の秋の徑

散るは涙か袖の露

背負ふ妻木を打棄て、

何とはなしに打見れば

月影白し蘆の花

渚に下る雁が音か

それかあらぬか琴の音の

そゝる身にしむ調哉

時雨に暗き磯山の

梢をわたる夕風に

菊の花咲く岩か根に

慰む一人のうなる有り

河邊に戦ぐ風清く

黄金を碎く波の音

草間にすなく虫の音か

主は誰とわかぬ共

ハラ／＼と板屋打つ

松や嵐に騒ぐらむ

散り積りたる紅葉を

鹿や尾上に鳴くならむ

流れを渡る兵士の

千里にかきなむ糸毎に

高き調べに思はずも

一聲絹をツン裂いて

河洲に立てる水鳥の

其二

世は蒹葭と亂れつゝ

功名するは此機と

楚の山奥の水後にして

二十餘りの春秋を

今日時を得て故郷に

君の使を爲しはて、

乗手あまた有る中に

征塵録

サラ／＼とよみ分けて

千里の駒に鞭あて、

劍や鐙に觸るらむ

こもる情や深からむ

我を忘れて聴く程に

琴の手頓に断えにけり

空を掠すめて飛ぶ比に

中原の空雲さわぐ

劍三尺に身を托し

笑つて家を出てしより

道途の上に過ごしけり

錦を飾るひまもなく

またも漕出すかへり船

やかたに近き一人こそ

乗の主人と知られたれ

年は四十路を越ぬらむ

風に吹かせて坐りたり

流れしづけき秋の夕

煙にさゆる黄鶴樓

釣りし磯は彼方なり

獵りせし嶺はごなたなり

立てるはもとの我家なり

今の主は誰れならむ

かなしく袖に露ちりて

破れて浪の音高き

其の三

幸がたの小簾を捲上げて

墨を濡し大空に

峰にたゞる鳥影が内に

あたり眩く装束て

箱を雜ぜたる鬘の毛を

帆足も緩き漢水の

鷓鴣洲に日は落ちて

里の童を語ひて

三人五人打連れて

向の岸の森蔭に

窓の燈火影暗し

昔を忍ぶ旅衣

結び兼ねたる假の夢

枕の剣ひとり鳴る

夕ながむる程こそあれ

翱翔るは龍か黒雲の

千軍萬馬雨の音

嵐に吼ゆる荒浪の

耳もさけなむ許りなり

くだりくいでいつのまか

崖の下に付きにけり

名残りを示す月影は

曇なき身のながめには

さらてもつらき旅の身の

物うき夢を結ぶより

さなりくとうなづきて

手なれの小琴とり出し

調べ半ばに怪しくも

琴の緒断れて一聲は

其四

われからわれと謂ひけらく

聞くものなくて徒らに

岩にくだけて瀧となる

船は木の葉の水車

危き浦を遁れ出て

しばしが程に雨收みて

流石に狂きますらをが

これやこよなき伴侶ならむ

思はぬ事に煩ひぬ

寝ねて明かさん此夜は

つきそふ一人の童して

得意の一曲かなてたり

奇しき音して一條の

蘆の葉風となりにけり

『とも此の琴と云ふものば

糸もと断れむ謂れなし

住む人多き街ならば
立ち聞くことも有ぬべし
さる人としてはよも住まじ
さては日ごろに怨もつ
我に仇する奸計なり
くまなく搜がせ皆起ちて
折りしも岸のかなたより
言ひつゝ下る者は誰れ
すげの小笠を地にすてゝ
我を忘れて閑居たり
ゆるし給へと詔びたれど
琴はさだめて聞分けむ
琴の緒されし故如何に
膝すりよせて問ひかゝる
神農伏羲のその初

二六
たちまち人のわが琴を
かゝる寂びしき山里に
げに怪かしき夕哉
よからぬ物か盗人の
柳の木影蘆の中
我につゞけと下知をする
「さな驚きそやよ君」と
見ればをさなき童なり
「大人が調べのたへなるに
曲物にては候はじ
「なれもし正しき物ならば
わが今弾きし譜は如何に
とく／＼語れ語れよ」と
童はさわぐけしきなく
琴の出来たる由來より

世に傳はれるもと末を
疑今ははれたれど
猶も童をためしけり
調べ出てなむ其聲を
残らずあてゝ語れよと
「あな高き哉あなあはれ
水の心を調べれば
君が思は深し」と云ふ
指頭の爪もすてやらて
「わが名は伯牙姓愈にて
稚き折に由縁有りて
その後君に仕へしが
こたびは君の使にて
なが家は何處名は如何」と
大別山の下に住む

征塵録

いとも詳に説ぬれば
かりにも心許さねば
「今汝が爲めに一曲を
さしてわが思ふ節々を
山の心を調べれば
君が思は高し」と云ふ
「あな深き哉あなあはれ
その人驚きたゞならず
粗忽の罪をいたくわひ
もと此國のものなるを
晋てふ國に移り住む
宰相の官を下されぬ
この故郷にまかり來ぬ
問はれて彼は「さればとよ
かすにもあらぬ樵夫の

鐘子期とこそ申すなれ」

年にもましてめてたきは

そだちけるとも思はれず

抑も丈夫は昔より

今わが琴はかりそめに

聴くものゝみぞ多かるを

聴き酌む耳は絶えてなし

知音に酬えむ記には

睦びてゆかむ今からは

玉の器量をもちながら

朽ちはてんこそくやしけれ

功名するは易からむ

かの晋國へ伴ひて

名を揚げ家を興せかし

静かに言葉打ち消して

「世にも稀れなる童かな

都はなれし山里に

さはさりながら聞けよかし

知己の爲めには死ぬと云ふ

彈くものならぬを荷りそめに

琴ひく人の心まで

君なむ得かたき知音なる

兄ちとうとの義を定め

此の義はいかにいかに君

み山の奥の埋れ木と

汝の才もて今の世に

遠き旅路を厭はずは

わが大君に勤めなむ

心如何に」と問ひければ

「聞き給へかし事縁を

家世々楚國の宮仕へ

恵の露に榮え來て

よからぬものゝ讒に逢ひ

かしこき詔かしこみて

定めなき世は春の夢

連れて逝きけり母の君

老いゆく父とあと二人

さびれはてたるむらはづれ

小川のふちの草の庵

露の命をつなぐ身の

君の仰せに従はむ

病みたる父を如何にせむ

こたびは思ひ止りなむ

涙ながらに語りけり

「さらば是非なしやよ弟

君の覺えも淺からぬ

父の代までは續きしを

父にはかに追放の

昨日に變はる今日のさま

夜半の嵐にちる花と

憂き事かさみ年々に

此の世の外のわび住ひ

杏樹の木かけ竹の下

折りたく柴の夕煙

杖るべきものはわれ一人

一人の父を如何にせむ

身に餘りたる幸なれど

わるくな思召されそ」と

伯牙は袖をしぼりつゝ

なれの父ならわれの父

われに代はりて父君に
又た逢ふ時を樂しみに
又た來ん年の此の月の
その時引かむ琴の音を
今は別れんイザさらば
柳の葉風音もなく

其五

「尾花が末の露の月
子期と語らん此の一夜
調べ出てたる玉の琴
今かくと待つ人の
まづ虫の音もたえく
伯牙にはかに心せき
村の破れ橋うち渡り
木蔭にやすむ翁有り

孝養ゆめな怠りそ
今は別れんイザさらば
此夜此の地に又た逢はむ
便りて來ませわが宿に
河邊に人の影絶えて
月影まろし水の面

去年に變はらぬ影なれや
イア戀ふ人を呼はむか
音に應ふるものもなく
袖つめたき松の風
山の端白く夜は明けぬ
われから子期を尋ねんと
行けば花籠膝にあき
「やよ言問はん物申す

集賢村の道如何に
家居知らずや告げてよ
「そはわが子にて候ふを
聞かせ給へ」と云ひければ
翁は涙袖にうけ
うたてかりけりこそもへば
散るとは云へど年々に
げにはかなきは人の世や
こぎゆく舟の白波と
思へば去年のゆふべなり
晋の大夫の賜ひしと
子細つぶらに語りつゝ
藥し買ふたる餘りもて
朝まだきより夕べまで
學の道にはげみしを

鐘子期と云ふ木樵夫の
聞けば翁は怪しげに
尋ねる由縁そも如何に
事の次第をしかと告ぐ
かなしかりけりこそもへば
月にむら雲花に風
又た咲き返へる習なり
何に譬へん朝ぼらけ
昔の人も云ひけるよ
子期は山より歸り來て
あまたの黄金とり出て
病みていねたるわか爲めに
古き書など求めけり
柴かる業の暇には
その甲斐もなくいたづらに

榎木の林そよくと
木の葉と共に散りにけり
大人に逢ひしは奇縁よと
伯牙も共になき伏しぬ

其 六

立つ秋風に誘はれて
今墓にゆく途すがら
言葉も出でず泣き伏しぬ
しばしが程は息絶えて

伯牙は翁に案内され
墓場に繁げし草の露
名残の一曲聞すべし
生きたる人に云ふごとく
膝におきたる玉の琴
棧雲峽雨蜀の空
旅路になやむほととぎす
袂にたまる血の涙
琴を大地になげすて

たどる月湖の風寒く
「やよ弟よ今はしも
心し有らば聞けよかし」
もろひさづきて且つ泣きぬ
一聲高くしらべけり
長江千里秋の月
血に啼く聲を誰かきく
拭ひもあえずそのまゝに
木の葉の如くくだけけり

鐘子期往きて知音なし
琴賣るものにも劣るべし

知音なき世に琴彈かば
又たとは彈かじ玉の琴

西征記

送劍南子三遊清國

權 藤 成 郷

咫尺滄溟幾往還、尊鱸秋思入鄉關。朱絃撥絕梨花落、長鈇呵成天步難。轉見風雲遮客路、勿驚雷雨蕩人間。觀光論策應傳世、遊跡何妨窮八蠻。
予曾爲子作梨花行。客年燕都之遊。有斷絃破鏡之嘆。天步難。

明治三十五年七八月の交大和の俠傑土倉鶴松氏の勸めに従ひ清國陝西省三原縣なる宏道大學堂の招聘に應じ任に教習の職に當ることとなり、昨年十月一日をもて馬關を出帆す。第三回目の渡清なり。一縷の煙を龜山の華表のわたりに残しつゝ、身の蘇漫たる層濤積波の間に入るころは早や故國の山影を認め得ずなりぬ。長劍何時屠海鯨、酒中有友且談兵。斜雨落花春如夢、新樹啼鴈月滿城。一片黃埃美人骨、千秋青史男兒名家山墳墓蒼苔厚。愧我風塵了半生、十年不訪舊林泉。回憶關河路八千、棧雲峽樹馬嘶天。吳水楚山鴈注血、窮途臥病無相識。異地興愁只獨憐、畢竟此生何處向。長風

一 劍又乗船。前遊など思ひつゞけては轉た身世の定まらぬに驚きつゝかくは嘸ひ出でつ限なき感慨は限有る文字の得言ひ盡くす所ならずかくて程にあること六日にして北京に着。此處に爲すことも無くて滞ること數ヶ月に彌り明くれば明治三十六年の一月九日と云ふに前門外なる支那旅館玉昇店を未明に打ち出でツン裂くばかりなる北山嵐に鬆鬆たる亂れ髪を吹かせつゝ西行の列車に乗る。長辛店(一)良郷店(二)琉璃河(三)涿州(四)高碑店(五)定興縣(六)固城(七)安肅縣(八)漕河(九)各停車場は目たゞく間に通る保定府を経て正定府に到り下車。茂德棧てふ支那旅店に投宿したるは夜の八時下る頃なり。洋務局近來到る處の市城概ね之を設け以て外人の護送接待交渉等に關する事件を處辨すの陳保國と云ふが來て刺を通じ明朝道路の護衛の爲め兵卒を附すべしと云ふ。例の何の役にも立たぬ只管酒錢をのみ狙ふ(一日大概五六十錢)厄介物を押し付けられたりとは思ひながらも折角の好意なればとて承諾す。難有迷惑の限りにこそ。

▲十日(晴)前九時四十分騎馬出發。食後行李の搭車を終え用意の馬に跨り兵卒七騎を郷導として出陣。城外に沿ふて行けば流水斷橋の少村に出づ。それより極目天と平かなる荒原を飛鳥の如くに疾走し。正午十二時獲鹿縣なる陵趙碑に到り暫時

休息。御粗末なる饅頭湯麵などをもて緩かに空腹を醫す。わが馬疲れたれば今度は官給の馬に轉乘して行く。大安舍舖兵村東關舖等を過ぎて午後四時獲鹿縣城に着。日は將さに文昌閣頭に落ちんとす。蕭々たる馬嘶聲裡に入城。縣官來候晚餐を送る。酒有り肴有り。不知何處是他郷。途中は霜雪に荒らされたる無草の曠土にして所謂浮土尺餘深く馬蹄の陷む所車輪の走る所塵を揚ぐる。こと煙の如く黒羅紗の洋服は忽ちにして灰色に變ず。大に恐縮したれば以來。樺色の乘馬服を着用することゝしたり。土質は第四期層に屬し天津北京間の一帯の平地と異ならず。縣城に近づく頃始めて三十米突高の山丘を寒雲斷霧の間に認む。

一路の生業を察するに農を以て大本と爲す。民富賤卑。風俗未開。人文固陋と見るも差支なし。棉花。石炭。鐵製。砂交り。鍋。土瓶を或は車馬にて或は天秤棒にて運搬するもの絡繹織るが如し。

自正定府 至趙陵碑 三〇里
自趙陵碑 至獲鹿縣 三〇里

(註) 正定府。京師の西南六十里。禹貢の冀州。春秋には晉に屬す。戰國には趙に屬す。秦の鉅鹿郡。漢の常山郡。正定國を分置す。隋の恒山郡。唐の恆州。鎮州と改む。後唐に

至り今の名に改む。獲鹿縣、正定府に屬す。府の西南六十里。行唐、平山、正定、山西の五臺に界接す。古の中山國石邑。後に趙に屬す。漢の石邑縣。隋の鹿泉。唐に至り今の名に改む。金の鎮寧州。元の西寧州。

▲十一日晴。前八時十五分騎馬出發。淮陰侯祠の下を過ぎ。四大天門の一なる東天門を通りぬけ。西關鋪、上安、西鋪等數十家の山郭を経て。十二時三十分微水鎮と云ふ小驛に着。途中わが筑豊炭にも遜色なき極良質なる煤炭を駄載せる馬、驢、騾の東行するもの引きも切らず。

一時四十五分人吃し馬喰ひたれば行くに小流一條水瘦せ石露はれ茅屋兩三家枯木苦竹の岸に立ちたり。見渡せば左方のかなたの山丘は逶迤として半ば寒雲に罩めらる。一二里の程はわが芳野川一帶の風光その儘なるもうれし。郝西河村、河東村を過ぎて井陘縣に着きたるは午後四時五十分なり。道路は山間の事にし有れば鏝の齒の如き石徑のみにて馬車の動搖劇しく荷物の破損したるもの少からず。洋燈の帽兒二個粉微塵となりたるはまたしも、石油六函悉く洩れて一滴も餘す所なきには少々眉を蹙めたり。

井陘は蘇の名將韓信が例の「陷之死地而後生」の兵法に依り背水の陣を張つて趙兵

二十萬を屠殺したる古戰場にして、成安君陳餘が千秋の恨を遺こして空しく敵に首を授けたる處なりと云ふ。泚水も此より程遠からぬわたりに在りて波聲嗚咽今も猶ほ當年の餘怒に激す。一帶の地形を按ずるに甚だ阻險にて誠に廣武君が當時「井陘之道車不能方軌騎不得成列、行數百里其勢必糧食在後」と説破したるに異はず。假令趙王にして此明眼兒の獻策を聽きたらんには勝敗或は其處を異にし吾人は今日却つて韓信其人を吊哭せざる可らざりしやも知るべからざるなり。一時を作つて所感を抒ぶ。骸骨殘花白、山河落日黃。吾來空吊古、興敗兩茫茫。

井陘附近には石炭の産出頗る多く其價從つて低廉に一斤二文左右なり。此より六十清里西すれば脚下悉く石炭ならぬはなしとぞ。話し半分としても大した物ならずや。多く正定保定に向け搬び出さる。

自獲鹿縣 至微水鎮 四〇里

自微水鎮 至井陘縣 三〇里

(註)井陘縣、正定府に屬す。府西一百三十里。獲鹿、贊皇、平山、元氏、山西の平定、樂平、孟縣に界接す。漢今の名を置く。隋の井州。唐の井州。金の威州。

▲十二日晴。前九時出發。此より道路粗惡馬車を通す可らず。行人皆馬騾に由らずん

ば則ち架窠子カサコと云ふ物に坐る。予も試に坐りて見るに或は上に或は下に乍ち右し乍ち左し、搖き去り搖き來り譬へば小船センボネにて荒れたる海原ウミハラをゆくが如く、忽ちにして目眩み忽ちにして頭暈み忽ちにして嘔吐を催ほす加之内部極めて陋隘にて身動きもならず窮屈クワクサ加減云ふばかりなし。午後四時甘桃驛カンタウに着馬匹を換え了りて今度は早速馬に騎り移り、走行一時三十五分固關を度る。即ち身の既に直隸の西界を出て、山西に入りたるを知る。托身三尺劍、踏破北平山。鐵馬蕭々夕、一鞭過固關。仰ぎ見れば嶙峋たる峻嶺北より蛇走す。此なむ音に聞えたる太行山とは知られたる。三米突高の城壁其上を纏ひ宛として紐の懸るが如し。

太行山は中國最大と稱せられ數千清里に連互し直隸、河南、山西、數省の地に跨り、其支脈の分るゝ所峯巖洞谷の多縣に近うて人迹の到るべきは地に困りて其名を立つること一様ならぬも總じて之を太行山とは謂ふ。澤州府タク山西の南九十清里の處に隘小城てふが有り、是を其絶頂と爲す。磴道盤且峻峻巖凌穹蒼、馬足蹶側石、車輪摧高岡。足二度び此天險を踏むものにして誰れか太伯と同感ならざるものや。絶頂を作りて山谷の雲に與ふ層巒連重嶺、磴道自空懸、我馬如秋鷗、飛翮欲上天。固關は巖然たる石造の關門にて高さ四米突厚さ六米突程なり、其例の岩壁に據つ

て古刹を構ふ。馬上ながらに願盼するに壯宏森嚴のさま我が榛名神祠の下を過ぐるの感有り。

午後二時槐樹舖カイツツに到り午餐を整へ了りて又た西走西天門を過ぎ石疊みの急坂を快鞭直下クハイツツデヨシソンの幸福谷フツフツにも勢驕たる山合に出づ。ラセラス王子ならぬ予は容易に此をぬけ出て五時四十五分柏井驛ハクに着、例に依つて公館に投ず。公館の寢室は土窟にて床下に炕を具ふ。此夜は此上にて聊か暖を取る。端なく時事など思ひつとけて太行の嶺又た嶺のつら折りあり重ねても世を思ふ哉。

此地方には到る處山田を見れども米を産せず。産するは小麦コメ包穀コメ唐もろこしを以て主とす。樹木は楊柳槐樹の諸所に疎生するを見る。山は皆禿げたり。

途中百姓の生業は皆石炭採掘運搬若くは牧羊畜豕にして生活の程度極めて卑く、住居の如きは家屋と稱するに足るべきものは一もなく皆巖壁に背據して窟を鑿ち之に一間の幅の出入口を造り其中に寢食す。其内部を窺ふに不潔甚しく宛然たる馬棚ウマ兒コか豕小屋なり。多くは南面せり。料るに北風の肅冽を防ぐが爲めなるべし。石造にて稍や人の住家らしき物は百が一に過ぎず。吾人は一日にても否一時たりとも此内に得住まざるべし。其衛生を害すること少からざればなり。而かも土

民は所謂瘴癘の氣に犯さるゝも一向平氣にて身體は相當に強壯なるは畢竟習慣の然らしむる所ならずんば非らず、彼等は垢面四首聲音詭舌とても二十世紀の民族とは思はれず、支那の北部の山地には到る處此の窟居の人民有り、こは海岸河岸に舟船を以て其家とし繁華の都市に車の箱轡の下を以て其家とするもの(乞食ならでも)多きに同じ、要するに下民の生活の困難なるより生ずる愁むべく傷むべき事實たるなり。

自井陘縣 至槐樹鋪 五〇里

至槐樹鋪 至柏井驛 三〇里

▲十三日(晴)前五時十五分騎馬出發、殘月猶ほ山の最高處に在り、肅々たる鞭聲に合はせり。人跡板橋の霜、雞鳴茅店の月など高らかに唱ゆつゝ行く、駈ること十丁許りなれば崎嶇たる岩石の山馳せて南北より通り一個の巍然たる石關を扼す、其の勢わが箱根の關所跡の蘆の湖を望むわたりよりも更らに壯觀を呈す、やがて鷄が鳴く、東の空の白ひ頃南天門を過ぐ、此附近は石炭を出す最も多し、胡家庄村より盤屈せる磴道を急轉直下三丁許りにて又た羊腸たる石逕を上下して忽ち山間の平地に出でたり、此平地は四方約八里も有るべく圓りの山の名はと驢逐ひ童子に尋ね

たれば石門山と教ゆ、平地のトツツキの小屯を、石渠溝と云ふ、予が從騎と共に此處に來りて路傍の茶店に立ち寄り早飯を喫したるは前八時三十分なり、最後の村落を鳳渠溝を云ふ、此よりは逕稍や平かなるを西走すれば朝暉閣と云ふ城門の下に出づ、過ぎて南走する六丁にして西に折れ、店舖の櫛比せる市街を行くこと五丁西城の關を過ぎ、平定州城の公館に投ず。

此處にては荷車未だ到らず之を俟つこと多少の時間を餘したれば、城市の形勢を觀んとて出づ、城壁は丘上に踞踞す、其南門たる文昌閣をくゞり丘下の街に沿ふて行くこと一丁、北に折れて石敷きの坂を斜めに上り大雲閣の下を過ぎて壯嚴なる武廟に拜跪し、踵を轉じて東し州の衙門を訪ひ、出て、檢關門を穿け、其北方の出口たる門の上の樓に上り、千里の目を放つに高山重嶺起伏出沒波濤の潮を衝いて起るに似たり、脚下には城の内外の屋瓦基石を配す、實に一大市府たるを失はず、是れ偏に此地より産する石炭の御蔭ならずんば非らず、他日柳太鐵道完成を告げ石炭の販路數千里に擴張せらるゝの曉には此附近否山西全省を擧げて一生面を打開くこと必せり。

山西省は石炭を産生すること夥多し、無煙炭も出づ、天門山左右俱に出だすも近來

平定州獅頭山を以て省中第一と推す。土人採掘の方法は皆舊式にして器械を用ゆることなく坑夫は井口より煤坑に入り、梘の類を以て煤壁を碎き落し之を桶の類に裝るゝときは井口の人夫網にて引上ぐることに猶ほわが井桶にて水を汲むの程に異ならず、勞力を費やすこと此の如く大に時間を要すること此の如く大に生産費を投ずること此の如く大なるにも拘はらず其價の廉なる煤井に近き處にては一斤一文位に過ぎず。然るに交通の便未だ開けざるに依り煤井を去ること遠き地方に於ては生産費の一部否九割は牲口の運搬賃に支拂はざるべからず、需要の範圍従つて狹隘ならざるを得ず。左れば今日に於ては未だ省の大富源たること難し。然れども一旦鐵路開通し新器械の盛んに使用せらるゝに至らんか之れが爲めに生ずる所の利益たるや實にその幾何なるやを測り知るべからざるなり。但し將來此の利益を專占するものは恐く支那人に非らざるべし。金には恰愒々外人は一チ早くも此の天賦の富源に向つて資本の放下を企て、既に其の權利を掌握したり。回首すれば先年英國は山西商務局に一千萬兩の借款を爲して沁州、平陽、潞安、澤州の石炭、鐵、石油等の採掘を謀れり。請ふ左の約款を見よ。

一 孟縣、潞安、澤州、平陽の石炭、鐵、石油、其他諸礦の採掘を許す。但し六十年を以て

期限とす。

二 外債を借ること一千萬兩を越ゆることを得ず。此額を以てすれども尙ほ用に敷かざれば専ら福公司より續借すべし。

三 一切の調度、理財、用人、鑛務、採掘、工程は福公司の總畫に由り商務局の總辦と會同して處理す。

六 毎年鑛産出井の値百分の五を落地税となして中國々家に報効す。又毎年結帳の盈餘中官に付する利六厘別に一分を提げて歳々本に還し済まるを待ちて即ち停む。而して其の期する所の純利は二割五分を國家に納め残りを公司に歸す。損失有るも國家は毫も相關せず。

此に所謂福公司とは英伊ンデキートの變形にして實權は英人の掌中に存す。故にウイクトリア女皇の孫女婿たるロンドン侯爵之が總裁たり。是れ實に三府一州を將て洋人に典せるもの惜まざる可けんや。

吾人が特に注意すべきは西人が常にパツペツト政界を以て支那人を胡麻化すこと。是なり。例へば或る未開の地方の利益を壟斷せんとするに當つては先づ其土地に於ける一切の機務を舉げて本部より派遣する所の若くは本部と聯絡を繋げる

所の支那人手の所謂パツペツトをして代理署辨せしめ、自己は北京天津若くは上海の如き商業上の要所に在りて其大體を提ぐるのみ、かくして巧みに上下の物論と嫌惡とを避け以て結局の實利を收む。根礎漸く固きに至れば機に乗じ時を見て風發電擊竟に全く自ら取つて代はるに至る。獨逸人が張家口以北に於ける獸毛獸皮の買占の如きは即ちこの筆法に非らざるか、英人が山西に於て右の如き重大なる關係を有するにも拘はらず、自ら其局に當ることなく山西商務局を籠蓋して願使役するは即ちこの筆法に非らざるか、而してこれを知るや知らずや支那人の吞氣なる鴉片一睡の夢に鶴に乗じて揚州に到るの様を見ては栗然として肌骨の寒さを覺えざるを得ず、さても征士の心に關するは老大帝國の前途なるかな、先見先憂の士は竟に誰ぞ。

落花生も平定州の産物として數へらる。こは半ば食料に半ば製油料に充つ。午後一時晝餐を吃し了りて官給の馬に跨り出發州城の北關を右方に望みつゝ、數村を過ぎタリコ河(土民の云ふまゝを記す)の石原を馳せて午後四時四十分此日の目的地たる測石に達す。又たく土窟の裡にて一夜を明かす。

自柏井驛 至平定州 五〇里

自平定州 至測石驛 五〇里

(註)平定州、太原府の東南二百七十里、京師を距る八百七十里、領縣二、西は壽陽縣、西北は盂縣是なり。州南は遼州に、北は代州に、東は直隸の正定府に、西は太原府の忻州に界す。并州の域にして古の晉の地、後に趙に屬す。漢の上艾縣、後魏の石艾、唐の廣陽、宋の平定軍、金今の名に改む。

▲十四日(前六時十分)騎馬出發、日天に中する比壽陽縣城に着、城内にては外國雜貨品を陳列せる店舗を見受く。又英人の所管に係る福音堂を見たり、教使は目下歸國中なりとぞ。山海の珍味に腹鼓を撃ちつゝ、荷物の積み換を了り、同行はこれより架窠子を廢して大八車様の馬車に轉乘し、予は相變らず騎馬にて午後二時縣城の東門を通り城内に入り壽陽學堂、未だ外國教習を聘せず、又た新學科の設けなしと云ふ。縣衙門を左に見過ぎて西門を出づれば巖石の峽道となる。數個の村落、窩舖を鞍上に雲烟過眼視して八時五分泰安驛に達す。驛は極めて小さき村落にて、ムドスミスの詩「荒廢したる村」を思ひ出す。總べての供給意の如くならず、食時一碗の米飯だに得ること不能。此わたりに住民は皆粗末なる農作を以て生業とす。縣城の裡を除きては絶えて商賈らしきものを見ず。麥藁より製り出でたる我が馬糞紙

様の紙を夥多しく産す。これ多くは捻紙と云ふを作るに用ゐらる。捻紙は又煤紙とも云ひ北清地方にてはマツチに代用せられ彼の水煙を吸ふときは必ず之を使用す。

途中寒氣肅殺刀もて肌骨をツキ刺すが如くなるに得耐えず遂に二豎に襲はる用意の藥籠よりピリン一包を取り出て服みて寝ぬ。こたび陝西學院提督沈淇泉の草差として予を迎接したる李小循と云ふ男は福建の人にて可なりに風流の才を具えたるが此夜詩數枝成りたればとて示す。皆唱哦すべし。廻廊曲折繞欄干。深院無人曉露團。輕啓玉扉驚夢覺。問郎今日可禁寒。二段朝雲戀巫山。恩深未忍暫時還。枕邊細訴平生恨。萬緒紛々淚自潸。見面歡娛背面思。相逢忽致兩無辭。果將倚翠偎紅日。竟作偷香竊玉時。倦鳥雖還未便休。三更月下意悠悠。相思欲寄無由寄。到底揮金只買愁。何んと艶氣津々ならずや。征途の病悶を遣るは此なる哉。坐ろに當年弄花嘲月の狂態を追想して措かざらしむ呵々。

自測石驛 至壽陽縣 五〇里
自壽陽縣 至泰安驛 五〇里

(駐壽陽縣平定州に屬す州の西一百里。晉の馬首邑。漢の榆次の東境。晉今の名を置く。

隋の受陽、陽曲、和順、孟縣、榆次に界接す。

孟縣、平定州に屬す。州の西北一百里。陽曲、五臺、定襄、直隸の井陘、平山に界接す。春秋の仇猶國。後に晉趙に屬す。漢の上文の地。後魏の石文。隋の原仇今の名に改む。唐の受州、金の孟州。

▲十五日(晴前七時)騎馬出發病を推して出馬す。鞍上の心地頗る悪くゾクゾクと寒氣を覺え鞭を揚ぐるにだに力なし。午後二時榆次縣なる王湖鎮に着これより道路の都合に依り大八車を廢して小馬車を用意させ荷物の拾綴濟みて復た西走。安寧村、口家鋪等數村を過ぎて徐溝縣城に着きたるは夜十二時なり。病益々篤く發熱四十度に上る。よと壁上を見るに筆の主は誰と分かねど庚子紀事有感と題して西至聯軍震上都。中原無計禦匈奴。三軍烏合原兒戲。一劃溝渠盡鬼區。耶術未聞能破敵。庸臣只是可捐軀。不堪回憶京師地。南內凄凉草木枯。と大書したり。筆勢淋漓讀去讀來傷心多時。取敢えず其傍に半途車摧馬又疲。崎嶇一步殆難支。病臥亂山荒驛夜。泣憶蒙塵西上時。の二十八字を題す。

王湖鎮より徐溝縣に至る途中は茫々たる平畝なり五六月の交に至ればこれが一面の青甍と變ずるなり。植ゆるはすべて小麥及び高粱なり。毛皮を積みたる車馬に

逢ふ皆陝西の地より輸し來るものなりと云ふ。

自泰安驛 至王湖鎮 七〇里

自王湖鎮 至徐溝 七〇里

(註)榆次縣、太原府に屬す。府の東南六十里。壽陽、太原、太谷、陽曲、榆社、徐溝に界接す。晉魏の榆邑、戰國に趙に屬す。漢今の名を置く。北齊の中都。

徐溝縣亦太原府に屬す。府の南八十里。榆次、太谷、太原、祁縣に界接す。漢の榆次の地。唐宋の清源、徐溝鎮、金今の名を置く。

▲十六日晴前九時騎馬出發。平地の數村を過ぎて午後三時三十分祁縣に着打尖。五時十五分又九平地の道を一鞭快馳。八時三十分平遙縣に達す。途中野末に狐火を見る。北風蕭索夕、踏破短長亭。馬駭奔馳急、何來鬼火青。見るかまゝなり。

自徐溝縣 至祁縣 五〇里

自祁縣 至平遙縣 五〇里

(註)祁縣、太原府に屬す。府の南西一百四十里。太谷、文水、平遙、武鄉、徐溝に界接す。晉の祁邑。漢今の名を置く。

平遙縣、汾州府に屬す。府の西南八十里。祁縣、汾陽、沁源、文水、武鄉、介休、徐溝に界接す。

漢の京陵縣の地。後魏の從平、陶縣此に於て今の名に改む。隋の析置。

汾州府太原を距る西南二百二十里。京師を距る一千三百八十里。州一縣七を領す。

汾陽はその附郭なり。南に孝義、東南に介休、平遙、西南に石樓、西北に臨縣、永寧州西に寧鄉是なり。府の東南は沁州、澤州に界し、西南は隰州に界し、東北は太原府に界し、西は陝西の綏德州に界す。冀州、並州の域。唐國後に晉、趙、秦に屬す。漢の太原郡、魏の晉西、河北、齊南、朔州、後周の介州、唐の涪州、汾州、明今の名に改む。

▲十七日晴前八時四十分騎馬出發。鞭を揚げて西南を指す。昨日と同じく平畝の道を縫ひて行く。平遙縣管下なる張蘭亭に着きたるは前十一時三十分なり。暫時休憩。渴を慰し、餓を癒し得て走行。四時二十分介休縣に着宿。縣城を東北に距る方里の處の路傍に漢の郭有道先生を祭るの祠有りて建つ。馬より下りて拜跪す。清妙堂に先生の像を安ず。明進士出身山西等處提刑按察司淇南孫繼魯の贊有り。詞に曰く。

嗟哉先生逢時讒。鳳伏鸞翔。颺回霧縈。煉石無補。杞國徒憂。辟舉託疾。肥遯自修。巖穴栖之。經神比之。繁求汗庭。董子其人。或出或處。易地同神。

自平遙縣 至張蘭亭 三五里

自張蘭亭 至介休縣 四五里

(註)介休縣汾州府に屬す。府の東南七十里平遙、靈石、孝義、文水、泌源に界接す。漢の界休縣、晋今の名に改む。東魏の平昌、唐の介州。

▲十八日、晴前一時騎馬出發、鞍の上にて眠ぶたき、膝を擦りつゝ、西南に行くこと十二里許りにして初めて一脈の連山を見る。王湖鎮より此處までの道路は廣濶なる冬枯の麥畝の中を蛇走したるを此處に至つて平地漸く盡きなんとす、やがて中條山、靈嶺を左右にし月を負ふて行くに短嶺長亭路迢遞、前九時十分靈石縣に着、前十一時十分韓信嶺を上りて韓信廟に詣る。廟は嶺の絶頂、汾河の水面より二千米突も有るべしに在りて東より來れば路の右傍に在り、石階を上ること數段にして「國士無双」と大書せる堂の上に至れば、獻頌題詩數百を以て數ふ。皆石に刻み附けたり。中に就て尤も人の感賞措かざるは吳桐山なるもの、作に係る次の一律なりとす。高鳥元來是項秦、淮陰助業古無倫、十年成敗一知己、七尺存亡兩婦人、孤塚何如鍾室閉、靈祠應比將壇新、簡城遙指長橋在、國士千秋結比隣、廟の後邊なる丘に上りて四方を眺臨するに層巒疊嶂、縱横に馳走す、壯極る立板の如き急坂の高處四米突もあるべき土壁に狹まれたるを下りて午後七時過ぐる頃靈州に達す。途中無煙炭、麥麵粉、麥紙を搭載したる車馬前後絡繹たり。麥麵粉は平陽府より産す。

自介休縣 至靈石縣 八〇里

自靈石縣 至霍州 一〇〇里

(註)靈石縣、霍州に屬す。州の北一百里泌源、隰州、介休、汾西、孝義に界接す。漢の介休縣の地、隋今の名を析置す。

霍州太原府の西南四百二十里、京師に至る一千五百五十里、領縣二、南に趙城、北靈石是なり。泌源、汾西、岳陽、浮山、蒲縣に界接す。周の霍國、漢の舜縣、東漢の永安、隋の汾洲、呂洲、金今の名を置く。

▲十九日、晴前九時騎馬出發、汾河を右にし一帯の高山を左して西南に走く。正十二時趙城に着、趙城は春秋戰國の代には趙簡子の食邑なり。かの挺身秦廷に使用して「臣頭今與壁俱碎於柱」と怒喝したる藺相如は即ち此地の人なり。汾河は西城郭の下に沿ふて流る。水色玲瓏、淺きは緑の如く、深きは藍の如く、波聲潺々として耳を洗ふ。河源は靜樂縣より出て大原、汾州、平陽三府を経て西に折れて絳州を過ぎ、黄河に匯る。午後三時晝餐を吃し了りて、又汾河を右にし一帯の平地を西南に行く。五時十分洪洞縣に着、途中相變らず麵粉を積みたる車馬に逢ふ。中には回鼠を積みたり。此夜御馳走の中に乾葡萄を交えたるを食ふに風味頗る人に佳なり。

公館の壁上に題詩有り曰く、
 紀落下南坡、蒼瘦萬頃多、青山紅樹外、菜圃暎晴波、二十字善く一帶の光景を描出す、秋色は定めてかく有るべし、汾河を帶るに依つて水田多く、農家も稍豊かなるが如し、城の北東十五里の處に上紀落坡と稱する數十家の小村落を東西に横切つて流るゝ一條の溪水に十米突長の石橋を架したるが其兩端の石礎の門に「國士橋、豫讓遺跡、道光二十年孟秋之吉、知趙城縣事、董」（註）と額書したり、即ち知る當年知伯を刺さんとて面に漆し炭を呑みたる晉の豫讓の落匿したる古跡なることを憑つて一時を作り聊が吊意を表す、知らず毅然として未だ死せざる毅魄果して享くるや否やと、天寒日晚亂鴉歸、國士橋頭多落暉、道義不言同我嘔、恩讎欲報與心違、雄風獨壓高山聳、冤恨不隨流水飛、韓信嶺南來下馬、又揮涕淚洒苔磯、因に云ふ河南德府を北に距る五清里なる龐家居にも豫讓橋有り、こは同治二年十二月知縣知府の修立したるものなるが何れか眞なりやと云ふに之を史跡に考へ之を地勢に徴するに後者を以て然りとせざるを得ず、敢て識者の辨を俟つ、此夕杯杓數行にして李君一律を作り示す、（註）典衣沽酒洗征塵、當路誰憐范叔貧、國士橋邊傷義客、韓信嶺上弔忠臣、雲山北向渾如睡、鴻雁南還又到春、願得桑麻田舍樂、葦關長侍慰慈親、仍ち步韻を得たり、垢顏四首又談

文、天下好奇吾與君、零落十年餘意氣、征行萬里少功勳、橋頭劍舞汾河月、馬背筑歌條嶺雲、何日笑揮衣袂土、故山春色買芳醪、

自霍州 至趙城縣 五〇里
 自趙城縣 至洪洞縣 三二里

（註）趙城縣、霍州に屬す、州の南五十里、岳陽、蒲縣、洪洞、浮山、隰州、沁源、汾西に界接す、周の趙城造父の封邑、漢の疵縣、後漢の永安、隋の霍邑、今の名を析置す、宋の慶祚軍、洪洞縣、平陽府に屬す、府の北東五十五里、岳陽、蒲縣、臨汾、趙城、浮山、襄陵、沁源に界接す、周の楊侯國、春秋の晉の楊氏の邑、漢の楊縣、隋今の名に改む、

▲二十日、晴、前八時五分騎馬出發、姑射山の滴翠を征衣に掬しうゝ、走く、左壁村、楊曲鎮、臨汾縣城、高河鎮、左孝村、下坂村、郭家庄等を過ぎて遂に平陽府に達したるは正十二時下る頃なり、此處に來る程は寒氣大に減じたり、こは一は稍や春季に近きたると一は南方に進みたるに由れり、

平陽府は古堯帝が建都したる所、四方十丁も有るべく北城郭の關なる鎮朝門を入りて東西に横はる一條の大街に出づ、時恰かも舊の年末の事とて爆竹を販ぐもの、紅紙を商ふもの、年糕元宵菓物を賣るもの、反物雜貨を陳列するもの、鋪に店に大繁

昌なり間々日本製マツチを見たるは増れし一體北清地方に於ては日本製マツチの販路頗る廣く此邊に於ては一個の價六文を要す此中より生産費勿論運脚釐金税等を含むを控除してマツチ一萬個に付き三四十兩の潤益を見る割合なり綿花棘子梨子乾柿子麵粉は當地方の産物として算へらる平陽城を北より入ること數十歩なれば四米突高の蚊樓の幾星霜を経て壞れなればかりなるを見る額面に聲和擊壤と大書す。

文山正氣の歌に在晋董狐が筆と稱せられ孔子に古を良史なりと云はれたる周の董狐及び漢の二大將軍衛青霍去病は皆此地の人なり。

三時五分腹を作りたれば再行府の東南十五里の處に帝堯の廟に詣づ最初の門額に「古帝堯廟」と金字にて大書す次ぎは峻徳と額書せる牌樓高八米突次ぎは午門(高六米突)次ぎは堯夫閣(高十米突)本堂を文思殿と云ふ殿の高十五米突柱壁棟梁皆朱塗りにて九柱はカシ渡し二尺五寸位屋根は瓦葺にてその前面に「民無能名」と黒書す殿内の中央に木像七基を安置す中心の正位を占むるものは即ち堯帝とす高三米突威有つて猛けからず人をして自ら度々の念を作らしむ堯天閣より文思殿に至る間なる井亭と云ふ建物は六角形を成し高三米突瓦屋根にて梁棟皆粗雜な

る彫刻を施こし丹青もて無趣味に彩色すその中なる古井は即ち史に「日出而作日入而息鑿井而飲耕田而食帝力何有於我哉」と記せるものなりと傳ふ

文思殿の左方に重華殿(古帝舜を祠るもの)右に文命殿(禹王を祠るもの)を建つ高各十米突木像は文思殿のに比して少きこと二臺高各々前者に異ならず重華殿の左方の殿宇の内に世祖仁皇帝の位を安置す木像なきも規模前者に異ならず要するに各廟現朝の修立する所に係る擊地總べて七十米突四方も有るべく共に同一郭壁の中に在り堯廟最も廣く五十畝なり園上には柏樹茂合し自ら神徳の崇を仰ぐ此附近の土地膏腴鼓腹擊壤の昔も思はる野老歌よて曰く春回禹甸山河外人在堯雨露中と

午後八時史村鎮に達す途中の道路はまひろき田圃間をゆき左右に山丘を望めども遠く晚煙の中に没して分明ならず史村鎮を距る二十清里襄陵縣梁坡村に来る頃は日落ちて既に遠く冥々として前路を辨ぜず只だ星光を便りに不知案内の田舎道覺束かなくも或は蛇行し或は蟹走する程は何となく日暮路遠の感なき能はずやがて一條の大路を馳せて目的地を隔つる八清里程の處に来れば小徑の左り一帶の寒水凍つて流れずその右方に透迤たる數立の岡丘を模糊に認む半は破

れたる土橋を渡る。我ながら書中の人には非ずやと思はる。

自洪洞縣 至平陽府 六〇里

自平陽府 至史村鎮 六〇里

(註)平陽府省治の西南五百六十里。京師を距る一千八百清里。領州一、領縣十。臨汾は其附郭たり。南に曲沃、東南に浮山、翼城、西南に襄陵、太平、東北に洪洞、岳陽、北に汾西、西に鄉寧、吉州、是なり。府の南は澤州府の絳州に、北は霍州に、西北は隰州に、西は陝西の延安府に、東は潞安府に、東北は沁州に界す。堯都冀州の域、晉に屬し、魏に屬す。秦漢の河東郡、三國魏の平陽郡、劉淵此に都す。後漢の東雍州、唐州、晉州、隋の臨汾郡、五代梁の定昌軍、建寧、唐の建雄軍、宋今の名に改む。元の晉寧路。襄陵縣、平陽府に屬す。府の西南三十里。浮山、鄉寧、太平、臨汾、曲沃、稷山に界接す。魏の襄陵邑、漢今の名を置く。北魏の禽昌。臨汾縣、平陽府の附郭たり。浮山、蒲縣、襄陵、曲沃、洪洞、翼城、鄉寧、岳陽、汾西に界接す。晉の平陽邑、漢の平陽縣、隋今の名に改む。

▲二十一日、晴、前五時三十分騎馬出發、從者に打ち起こされて用意を済ませ、西南にゆく。曲沃縣なる侯馬鎮に着く。は其上晉の悼公會戎の處なりと云。左傳に晉厲祁

宮を作る。衛の靈公、晉に之く、晉の平公、虜祁に置酒す。師濟をして、靡靡の樂を奏せしむ。師曠曰く、此は必ず之を濮上に得、乃ち亡國の聲なり、聽く可らずと配せる。其の虜祁宮の古址は何處ならむ。今は只だ曲沃縣に在りと記臆するのみ。往いて、用ふに山なきや遺墟なる。三時三十分又同じき方角に向ふて進む。六丁許りにて市端れとなり。此處に長さ三十六米突長の石造なる滄水橋を渡る。魏の惠王、韓を破りたる古戰場なり。橋下の波聲、今に至つて猶ほ酸絶。馬を欄干に繋ぎ、低徊夕陽に立つこと之を久ふす。心有りげに衣の袖にそぐは、石山松の露か、征士の涙かあらぬか。やがて山徑を上り、徑傍に荒廢して見る影もなき明光祠を弔ひ、それより壯驥に策あて、或は並木の下を過ぎ、或は隴岡の間を走り、水を涉り、林を出て、聞喜縣城に着きたるは午後八時三十分なり。

自史村鎮 至侯馬鎮 七〇里

自侯馬鎮 至聞喜縣 八〇里

(註)曲沃縣、平陽府に屬す。府の南一百二十里。翼城、絳州、絳縣、襄陵、臨汾、垣曲、聞喜、浮山、太平に界接す。晉國、新田、新絳、漢の絳縣、絳邑、後魏今の名に改む。縣の西南に桐鄉城有り。世に傳ふ、伊尹、太甲を郎桐に放つと是なり。

聞喜縣、絳州に屬す。州の南七十里、絳縣、夏縣、萬泉、垣曲、曲沃、稷山に界接す。晉の曲沃の邑、秦の左邑、漢今の名を置く。隋の桐鄉。

絳州は太原府の西南七百里、京師を距る一千八百里、領縣五、西南は聞喜、東南は絳縣、垣曲、西は稷山、河津是也。州の南は解州に界し、北は平陽府に界し、西は陝西の同州府に界し、東は澤州府に界し、西南は蒲州府に界し、東南は河南河南府に界す。冀州の域、晉及び韓に屬したり。秦の河東郡、漢の臨汾縣、後魏の東雍州、南太平、征平、後周今の名に改む。隋の正平、絳都、金の絳陽、毫城は垣曲縣西北十五里の處に在り、湯嘗て衆に此に誓ふ。

▲二十二日(晴)前八時三十分出發騎馬、郭居鎮、水頭鎮等を経て行くに極目一面の春田、苗芽未だに發せず、遠くは寒青山を罩む。午後三時十五分安邑縣なる北相鎮に達す。四方百里環らすに陸田を以てし、數十家の廢村、荒亭所々介在し、楊柳、杏、桃、松柏の其間に點綴する様實にわが富士山の南麓一帯をば沼津在より大諏訪小諏訪を過ぎて原吉原に行く間の光景に髣髴たり。

自聞喜縣 至北相鎮 九〇里

(註)安邑縣、解州に屬す。州の東北五十五里、夏縣、平陸、萬泉、芮城、聞喜、猗氏に界接す。漢今

の名を置く。後魏南安邑を分つ。隋の虞州、唐の虞邑、蚩尤城は縣南十八清里の處に在り、黃帝蚩尤を殺して其身首を異にしたる處。

解州、太原府の西南九百五十里、京師に至る一千七百七十五里、領縣一、東北の河曲是なり。州の南は太原府に、西は陝西の榆林に、東北は寧武府に界す。漢の猗氏、解縣の地。五代漢今の名を置く。金の解梁郡、寶昌軍。

▲二十三日(晴)前六時騎馬出發、黃埃散漫、風蕭索、霜蹄短長、亭を行破し、日午を下ぐる。比臨晉縣に着、打飯了りて、又鐵鞭西南の天を指す。道中所見。

百里荒原不見山、寒煙斷鶴、落暉間、樹似島嶼、天似水、馬船南到何處灣。

七時二十分蒲州府に着。此日人馬共に疲る。府城を東に距る五清里の處に例の西廂記中の主人公張生が美人鶯々を見染めたる艶跡を普求寺に訪はんとして果さず。寺は今荒廢して修めずと云ふ。蒲州古來多く傑士偉材を出だす。果して山水の靈氣を鐘ひるか。周の百里奚、介子推、趙衰、張儀、范雎、漢の司馬遷、唐の王勃、柳宗元、宋の司馬溫公皆此地の人なり。此地又有名なる鐵牛七頭有りて、黃河東西兩岸に在り。こは唐の開元中の鑄造に係る。名産は柿糖餅とて、乾柿より製取したる糖塊なるが味の最も住なるは飴の如く、其價一斤四五十文を要す。多く柿樹を植付けたり。

雷首山は府の東南に在り、高一千米突上下なり。尾は太行山に接し、芮城、平陸、解州、安邑、臨晉、夏縣、聞喜に跨る。俗に堯山と稱す。又の名は蒲山、歷山、薄山、襄山、甘棗山、猪山、獨頭山、雷山、吳山、首陽山、殷周之際、孤竹君の二子伯夷、叔齊が採薇餓死の處、上に夷齊の墓有り。

媯汭二水の源は首陽山の下に出て、流れて黄河に入る。堯二女を媯汭に蓋降す、即ち是れなり。

自北相鎮 至臨晉縣 八〇里

自臨晉縣 至蒲州府 八〇里

(註)臨晉縣、蒲州府に屬す。府の東北七十里。猗氏、虞鄉、榮河、河津、解州、安邑、永濟、萬泉、陝西の郃陽に界接す。郃國、晉の解梁邑。漢の解縣。後魏の北解。隋の桑泉。唐の蒲州。今の名に改む。

蒲州府、太原府の西南一千一百里。京師を距る二千二百里。領縣六。永濟は其附郭なり。東北に臨晉、猗氏、萬泉、榮河、東に虞鄉是なり。府の南は河南の陝州に、東は解州に、東北は絳州に、西は陝西の同州府に界す。冀州の域、晉の國、後に魏に屬す。秦の河東郡、府、秦、雍州、姚秦、并冀二州、後周の蒲州、隋の河東、唐の河中、中都、清朝、今名に改む。

じ

▲二十四日、晴、正午十二時、騎馬出發、首陽山の下を過ぎ、媯汭の石碛、土橋を度り、水氣多き平夷の道を縫ひて、河站に至りしは、午後三時四十分なり。黄河を渡る比は、夕陽ははや西に傾きて、潼關は夕霧、模糊の裡に包まれたり。かの蜿蜒として、蜈蚣の如きもの翠微を攀るは何ぞと、舟夫に問へば、城壁なりと云ふ。舷を叩いて、手製の上ヶ潮を聲高らかに唄ひ出づ。黄河の河上サ夕霧こめてサ、鳳凰山にコラサノサ、日が残るセツ／＼、黄河の此わたりは水の流れたる部分は六十米突前後に過ぎず、深さ僅かに一米突に過ぎざれども、河床は幅二千米突も有るべく、一天霖雨すれば、狂浪怒濤十二米突高の潼關の北城壁の頂上を洗滌すと云ふ。若し未れその上流に放目するときは、渺漫涯なく、實に「君不見黄河之水天上来」の感をよこさしむ。潼關の城市は三面に山を負ひ、北は黄河を控え、廣袤三千七八百米突、四方、城壁は華山の石をもて築かる。北河勢を壓し、山に據りたるは、蜿蜒として蛇走す。

潼關道の第一大街及び第二大街は各東西五里に亘りて、横はる東門を迎恩門と云ひ之を過ぐれば、路河南に通ず。遙かに函谷關を指すべし。四層の鼓樓門頭に跨がる門礎より樓頂に至る高サ十三米突、位南門を鳳凰門と云ふ。蓋し鳳凰山の下に在る

を以てかくは名けたるならむ。高サ東門に等し。鳳凰門を西に距る六十米突の處なり。城壁上に又た四層の観樓の硯臺山(高四十米突)の雲を凌ぐ有り。鳳凰山より流れ出て北に向ひ去る一條の瀑溪に跨がる。蝸子山は其西門を壓す。西門と鎮水門南門を鎮河門と云ふ。構造の規模畧ぼ東門に同じ。關西學堂、鳳山學堂共に中學の程度に擬するものなるが實は小學堂とも値せず。學生各二十餘名。教師は支那人のみに未だ西學の課程を設けず。前者は道臺の後者は知府の所管なり。

潼關は同州府の西一百十里。華陰縣河南の閿鄉縣山西の蒲州府に界接す。漢の華陰縣の地。後漢始めて潼關を置く。明千戶所を置く。現朝に至り撫民同治を置く。函谷潼關の要害たるや蜀の劍關と併せて中國無双と稱せらる。古來此より以西に都するの國が北來の胡を抵禦するや何時も極力此地を争はざるはなかりき。然れ共人其和を失へば天時地利遂に何の用ぞ。秦の強を以てしてすら之を保つに由なかりき。況んや文弱なる唐朝に於てをや。

士卒何艸々。築城潼關道。大城鎮不如。小城萬丈餘。借問潼關吏。修關還備胡。要我下馬行。爲我指山隅。連雲連戰格。飛鳥不能踰。胡來但自守。豈後憂西都。大人視要處。窄狹容單車。艱難奮長戰。千古用一夫。哀哉桃林戰。百萬化爲魚。請囑防關將。慎勿學哥舒。

東北より來つて關西に攻め入らんとするものは必ず山西路の險惡なるに由らずして河南路の平夷なるに就くべく。然らば先づ函谷關を打破せざる可らず。函谷關は一發の爆裂彈を以て僅かに粉碎すべしとするも其溝道を無事に通過するはなかくに困難たるを免れず。北清事變の際天子蒙塵せられたる時大に修工を加へたれど尙ほ兩側は丈許の土坡にして道幅の窄狹なる才かに單車を容るべし。幸にして之を首尾よく通過するも更らに潼關その物を乗取らざる可らず。要するに敵も味方も同一の武器と兵種とを具有せんには到底睡手可取の業に非らざるなり。

自蒲州 至潼關道 七〇里

▲二十五日朝來風大土を揚ぐ。前九時騎馬出發。黃河に沿ふて土坡の下を西に向ふて行くこと三十五里にして華嶽廟に詣る。廟は漢朝の創建に係れども當時の建築物は片影だに止めず現に存するものは悉く清朝の修築したる所に係れり。『茲寧四十二年發帑金十二萬命巡撫畢沅重修西嶽廟』と記録に見ゆる是なり。然れども規模壯宏雄大と稱するも敢て過言に非らず。最初の門には『勅建西嶽廟』と題額せり。それより靈星門、金城門を過ぎて灑靈殿(高二十七米突、長三十米突、奥行十八米突、位萬壽閣(高二十七米突、長三十米突、奥行十米突)、聖祖仁皇帝祠(高二十七米突、長十五米突、

奥行九米突)を経て明太祖御製「夢游西嶽文」を刻みたる碑を据ゑたる堂まで凡そ七百歩、萬壽閣の石段は七十歩、瀛靈殿の前なる放生池の傍にある清漪亭は頗る雅致に富む。下馬碑の傍なる清牛樹と云ふは老子牛を繋ぎたるものなりとぞ。華山は廟の南に當つて聳立す。

夢游西嶽文

明太祖

猗西嶽之高也。俄吾夢而往去山近將百里。忽視穿雲抵漢巖。巖燦爛而互光。正遙望間不知其所以。俄而已升峯頂。略少俛視。見群巒疊嶂。拱護周廻。蒼松森森。遮巖映谷。朱岩突兀。而凌空其勢。狼野鳥黃。猿狡兔畧不見。其蹤峭然。潔淨蕩々。乎巒峯。吾將週遊。嶽頂忽白鶴之來。雙鸞異香之縹。繞管絃絲竹之聲。雜然而來。天上試仰觀。見河漢之輝々。星辰已布。吾之左右。少時一神。跪言曰。慎哉。上帝咫尺。既聽斯言。方知西嶽之高。柱天之勢。于是誠惶誠恐。稽首頓首。再拜瞻天。愈覺神殊氣爽。體健身輕。俄聞風生萬壑。雷吼諸峯。吾感天之造化。必民獲年。豐遂舉手。加額豁然。而覺於巖。朝乃作思。夜必多夢。吾夢華山樂遊神境。豈不異哉。華嶽は古來神靈の宿る處として。堯舜以來。歷代の帝王皆社祭を致たし。萬民崇敬措かず。年凶兵亂るも必ず祭告祈願する所有り。華山は甚だ礦物に富めるもの、如し。今其主なるものを支那の諸誌に據りて擧ぐ

べし。固より信憑すべきに足らぬも多少参考とすべきものも無きにしも非らず。金石 金石とは即ち黄金礮石の屬。

球 大玉、天球。

玉 石季龍人をして華山に上り藥を採らしめ玉版を得たり。

琥珀 嶽頂の西南の峯上に五粒の松有り。其下時に琥珀を生ず。夜即ち光有りて荷花の如し。字を書く可し。晝は牛目の如し。之を服まば遐擧す。

松脂 淪りて地中に入り千年にして化して茯苓となり。又千年にして化して琥珀となる。

洗石 華の首を饒菘の山と云ふ。其下に洗石多く體を礫き垢圻を去る可し。

白石英 味甘辛。大サ指の如く長さ二寸。面刺すが如く白澈にして光有り。

握石 礮石此石或は山に在り或は水に在り。色白くして粗糲。冬月に至り脂液有りて其上に出づ。且にしては則ち日を見て伏す。日未だ出でざる時に當りて銅刀を以て刮いて器内に置く。

陵石 其形薄澤

水晶石 仙掌拇下に穴有りて石を産す。水晶の如し。五色有り。然れども脆くして用

予も亦た釐の石を取りて分析し見たるに硫化銀、石英、アンチモニーを多量に含有し居たり。

十二時三十分華陰縣に着、晝餐を了へて二時再び出發、華山を左肩に擔いて一直線に北行、午後六時華州に至る。途中華陽里、東至潼關三十五里、警水鎮、北至華州四里の間にて雪に逢ふ、見るが内に身は白皚々の銀乾坤に包まれ、唯だ黒きは時を急ぐ數點の蹄鳥のみ、馬上角力甚句を作る。

ア、雪が積ふが嵐が吹こが主が止よがマ、止まりやせぬ

潼關道を西に去る十里程なる路の左傍に漢の太尉揚震の墓を弔ふ。

自潼關道 至華陰縣 四〇里

自華陰縣 至華州 七〇里

(註)華陰縣、同州府に屬す。府の南一百六十里、潼關、華州、雒南、朝邑、渭河に界接す。禹貢の華陰の地、魏の陰晉の邑、秦の寧泰、漢今の名に改む。魏の驛西、唐の仙掌、太陰、

華州、同州府に屬す。府の西南一百八十里、渭南、雒南、蒲城、朝邑、同官、河南の閩郷に界接す。周の鄭國、後に晉に屬す。分つて秦に屬す。魏の秦鄭縣、後魏の華山郡、西魏今の

名に改む。唐の太州華陰。

同州府、省治の東北二百四十里、京師に至る二千三百四十五里、應一州一縣八を領す。大荔縣は其附郭なり。南に華州、東南に華陰、潼關、北に澄城、東北に命陽、韓城、西北に白水、東に朝邑、蒲城是なり。府の南は商州に北は延安府に東は山西の蒲州府、河南の陝州に東北は山西の絳州に西は鄭州、西安府に界す。雍州の城、芮國、魏の臨晉邑、秦の臨晉縣、漢の左馬翊、後魏の馮翊、晉の大荔、後魏の華山郡、西魏の同州、現朝今の名に改む。

▲二十六日(雪)前三時十五分騎馬出發、西行五時間にして渭南に着、此處にては非常に鄭重なる待遇を受け、迎送共に爆竹を放ち、音樂を奏して敬意を表す。知縣張世英なる人殊に斡旋の勞を取り、借すに自家用の立派なる馬車を以てし、態々人を附し送つて、高陵に到らしむ。

十一時十分渭南を辭し、南行五十清里にして渭水を渡り、それより馬蹄は一帶雪もて包まれたる平たき地を蹴立て、南走す。午後六時高陵縣に着、該縣には外國の宣教師の居住するもの少からず、省中に於て教會堂の多きこと固城縣と並び稱せらる。教民は目下一千名に近かしと云ふ。その何故たるを知らず、此處にて車馬を換ゆ

るに三時間許りを費やし又南行す。

▲二十七日、雪午前一時終に此旅行の目的地なる三原縣に着、學院衙門に到り一睡の夢に二日晝夜兼行の疲困を慰し、醒むれば眼班的が大人見面と云ふにフロッコトを着用に及びこゝに初めて學臺沈洪泉に會し學堂の件に着き種々協議を遂げ晝餐に盛饗を享け、午後四時頃學堂に案内され愈々此に居住を定むることゝなりぬ。

自華州 至渭南縣 五〇里

自渭南縣 至高陵縣 九〇里

自高陵縣 至三原縣 四〇里

(註)渭南縣、西安府に屬す。府の東一百四十里、華州、臨潼、商州、蒲城、雒南、藍田、富平に界接す。漢の新豐の地、秦今の名を置く。

高陵縣、西安府に屬す。府の東北七十里、臨潼、涇陽、咸寧三原に界接す。秦今の名を置く。漢の左輔、後漢の左馮翊、三國魏の高陵。

三原縣、府の北九十里、臨潼、涇陽、富平、高陵、涇陽、咸寧三原に界接す。漢の池陽の地、後魏今の名を置く。唐の華池。此地秦の故都咸陽を距る僅かに八十清里にして漢唐の陵

墓少からず、富豪頗る多く其尤も大なるを劉、胡、吳、李四家と爲す。共に富數百万を擁し各花園を有し四時に客を招きて盛宴を張る。

地形は概して平坦なれども南北に横はりて一大溝有り。高サ六米突乃至九米突に及ぶ。其底に河有り流る。清河と名く。源は縣の北なる嵯峨山より出づ。城民は皆此水を購ふて飲料に供す。予の住居は河を距る僅かに四五丁に過ぎざれども水一桶の價八文を要す。若し夫れ田舎收穫の時に際すれば人夫に不足を告げ爲めに二十文を要す。

此地は陝甘往來の交會にして、商買は大概はこれを通過するに依り釐金局の設け有り。局長を成安と云ふ。滿州人なり。由來滿州人は官卑きも實際は收入利得多きの地位を撰むの例なり。釐金局の如き其一なり。一年徵稅額三千兩の中僅かに三兩を割いて國庫に納むとは御利益も亦た甚しからずや。且つ富商家と結托して互に利する所少からず。故に土地の有志家にて客を招待すること有れば彼は必ず上席を占むるの奇觀を呈し居るなり。蓋し其隱微の勢力たるや遙かに知縣若くは學臺の上に在るを以てなり。

内地の行旅難

六〇

支那の内地旅行には支那官衙より給與する所の護照を携帯すること最も便利とす。若し之なきときは幾多の不都合と多少の危険とに遭遇することを覺悟せざる可らず。夫れ長江一帯の如く久しく外務の下に開發せられたる地方若しくは天津北京間の如く一度びとても外國の銃砲丸の音を聞かせられたる地方は暫く措き遠く人文未開の西北部に入るに當つては必ずや之なかる可らず。何となれば洋鬼子と見れば物を賣ること三四倍の價を要し道を問ふも教ゆること丁寧ならず。時に不良の徒萬一の兇行に出づること無きに限らず。日本人は元來服裝を易え辯子を附くるときは言語さへ充分に操り得なば以て支那人に扮すべきもこれ又畢竟何等の效能無きなり。支那の服裝には社會階級の上下に依つて幾様の區別有り。弊裘破帽を着せんか則ち素町民なり。素町民には地方の大小官吏は勿論取合はぬが故に宿ること恰好の旅舎なきに苦むべく、下民の侮辱を受け或は危害を加へらるゝも防ぐに術なく。若し又た言語充分に通解せざるか或は人の怪我を買ふべく、之が爲めに不測の不幸に陥るなきを保し難し。而して最も不便とする所は日用品の携帯の方法を欠くこと是なり。支那の旅館は部屋賃の制度にて一室一夜三四十文

にて貸すときは其餘の事は一切構はざるの例なり。されば炭、茶、湯、飯等より食器、腰具に至るまで皆客持ちなり。一たび鈴を振ればハライの一聲に山海の珍味も立ちろに聚るとは大に其趣を異にせり。依つて此等の道具は道中携帯せざるを得ず。又通貨の携帯に至つては更らに不便なるもの有り。例の銀塊は其容積大にして重量の多さと秤衡の一定せざるに依り重量を胡魔化されざること難きに苦むべく、内地に日常の需用に充つる例の銅錢は銀との比價法律上一定せるに非らず。銀銅の價格の如何に依りて絶えず騰昂低落の變動を免れず。兩換屋(銀鋪)の狡猾なる事情不通の者と見るか旅の者と見るときは此に付け込み非常に損害を被らしむ。さりとて出發地より一旅行中豫定の所要額を交換して準備し行かんか其積莫大となり到底不可能事に屬す。要するに平民旅行には少くも馬一頭、馬車一臺を備はざる可らず。然るに此等は一日一吊文左右が支那人間相當の實錢なれども事情を知らぬ者が俄かに之を備はんとすれば格別の要求を受くべく、加之官の保護なくて多額の銀錢を携帯するは到底危険の事に屬す。即ち平民旅行に於ては外人として行くときは物の非常に高きに苦むべく、支那人として行くときは危険多きに苦むべし。止むなくんば則ち乞食旅行に依らざる可らず。

若し又た大衣大帽を着し堂々たる高官貴人に扮せんか、則ちそれ相當の證明なかるべからず。左なくては未だ一里ならぬに化けの皮を剥がるべし。而して護照なくして此地方を大盡旅行するは姿色有る婦女が一人盗國を夜行くに異ならず。而して護照も我が外務省の與ふる旅行券の如きは糞の役にも立たず。西洋人の如きは一朝不幸に遭遇するときは其所屬國の政府嚴重の處置を以て相當なる相當以上の要求を清廷に逼るが故に支那官吏に對する其政府の護照は非常の恐怖を以て迎へらる。故に萬一の事有る決して犬死などに終らしめざるが故に稍、死甲斐有りとも雖も、日本人に至つては殺されば殺され損なり。我が今の外務省は吾人も頼みにせざると同様支那人も餘りに否毫も重きを措かず其旅行券を視ること反古紙同様なり。最も効力を保てるは支那の中央政府より與へらるゝものとす。之を以て到る處の地方官に示すときは州吏縣官はあらゆる尊敬と厚遇とを以て送迎す。實に支那の官吏が同一の護照を持てるよりも數倍の効力を有す。そは中央政府に關繋有る外人と云ふ點より地方官の畏敬すること大なるに因る。

予が這回携帶したるは順天府の給附する所に係れり。之が爲め、到る處にて車馬食事及び護兵の供給を受け、些の不都合を感ぜず先蹤附きにて恰かも王侯の如き旅行をなしたり。着發毎に必ず縣官縣吏の送迎を受け、渭南縣に於けるか如きは殊に鄭重なる待遇を受たるは獨り予の爲めに謝するのみならず、日本國の爲めに謝する所なりとす。唯だ蒲州に於ては一笑話を止めたり。そは此地の知府甚だ尊大にして一外人の通行の爲めに馬車を供し人夫を出だすの理由なしとて食事さへ送り來らず。然るに予に北京より隨行し來りたる五名の跟班的は各縣各驛の官衙より給する所の馬四車輛の錢を胡魔化して所得とし居たるを此日に限りこの恩典に與かるを得ず。加之御馳走の殘物にも與ることを得ざるを以て不平に不堪。予に逼りて知府に嚴談すべしと云ふ。予も亦た少し知府を威かし呉れんとて名刺の裏に故さらに英露佛三様の文章を極く皮肉に綴り之に左の如き漢譯を附して送る。

逕啓者大守閣下未拜芝眉爲恨々閣下護送行人待外客懇切不措僕感激不知所謝此頌此即請

貴府大守早安

一 征 士 寄

翌早朝一行の將さに發せんとするに當り、纓帽の一官丁來り知府の意を傳へ前夜の粗忽を謝し且つ送るに盛饗を以てし、出發に當り五名の騎兵をして道路を警護せしむ。

此に公館の事に就て一言せんには各驛站毎に其地方の官設に係り支那の高官若くは外人の中央政府の護照有るもの、旅舎に充てらるゝものにて勿論宿泊料を要せず但し食事其他は地方官より好意的供給を受くるに非らずんば自辨の事たり即ち此の如き待遇を受くるは督撫以下學政以上に限る公館には聽事的と云ひてわが旅屋の下女若くは番頭の役を務むるもの多きは四五名少きは二名有り客有る毎に送迎灑掃茶菓食事の持擺びの使用に任ず宿泊者は出發の際此の費に酒錢として三百文を施すの慣習なり予は外人と云ふ所より一二吊文を支拂ひたりこれわが茶代の如きものにて自ら幾多の弊害なきを得ず大官の通行するや地方官の恐慌一方ならずそは爲めに蒙る所の失費莫大なるに由る價格の通行の際の如き地方官はその小使の費に迄も數十金を賂贈せざる可らず左なくば此費は百方服酬を請じ爲めに地方官の地位を危くすること少からず聞く某地の知縣某嘗て此費に賂すること少かりしや此費は地方官より大人に供する所の飯菜の中に汚物を投じ置き之を地方官の粗忽に歸したる爲め地方官は其責に依り忽ち免職となりたりと弊たる甚しからずや又た小役人が官用を帯びて旅行するとき途中の各驛毎に車馬徴發の護照を携ふ而してこの費は概ね皆商人若しくは

普通民人の同地方に旅行するものも特約を帯び所要額以上の車馬を徴發し以て其間に不當の金儲けを爲すこと常例たり予の這回の旅行に於ても隨行の某此と同様の悪事を働き居たることを發見したれども予は態ざと知らぬ顔に見濟ましたり

這回の旅行は未だ知らぬ内地を充分に觀察せんとして行程は可成緩くりする積りなりしを同行の支那人に沈學臺の用丁有り此男非常に前途を急ぎたり其緣故は後にて氣付きたりそは支那官人社會の例にして毎年三大節(五月五日、八月十五日、一月元日)に到れば下官其他の出入者より高官の家の子郎等に若干金を賄賂すれば集り高の金額を總勢の間に分配す而してその得分は勢力の大小に隨つて異同有り即ちこの男は是非共一月元日前迄に三原に着せざるときはこの御福分けに漏るゝの虞れ有るを以て予が少しにても道草を取れば口を極めて催急したり榆次縣に至りしときはこれより僅かに二十清里なる奈原府に友人岡田真一郎三戸章三兩氏を訪はんとして同じく此奴の爲めに沮止せられたるは頗る遺憾とする所なり

序にて途中の護衛兵に就て一言せんには予は道中始終六七名の歩騎兵もし然か名

け得へくばに護衛(?)せられたるが潼關までは山西省太原鎮所屬のもの以後は即ち陝西省のものたり何れも皆舊式の銹鐵砲を肩にして瘦馬に乗りたり中には六十歳のヨボく老爺も交れり潼關に至る道は多少兵卒らしき所も有れども一たび此關を過ぐるや苦力と何の擇ふ所なく銃なく劍なし聞く彼等の月給は馬隊八兩歩兵二兩入錢(それ)も満足に渡るは少なしにして馬料より衣食に至るまで悉く此中より支辨せざる可らずと此の如き薄給にして良好の戰士を得んこと難からざるを得ず此の地方に袁世凱の卒たるが如き軍隊を見るは果して何時の事なるべき吾人は現時内外の形勢に顧み轉た寒心に堪へざるなり。

道路、車馬、氣候、城市

道路は北清一圓の地と異ならず粗惡甚だし其平地の間に在るものは浮土深く車馬其上を走るときは風なきも塵を揚げて煙の如く車中に在る人は呼吸も出來ず、東京小石川造兵廠の前の道路などの及ぶ所に非ず、冬期を以て殊に然りとす、それは一帶の畝皆赤土となりて無毛の乾土となるを以てなり、依つて鼻毛の長さことも最も必要あり、然らずんば此の塵土を呼吸と共に多量に飲み込むが故に咽喉若くは

肺を害すること尠からず、衣服に至つては鼠色狐色樺色鶯色等を探むべし、白色の如き最も不經濟なりとす。

天若し大雨霖雨するときは泥濘尺餘行路一段の困難を覺ふ、咸陽より馬瑰坡に至る間の如きは連雨月餘に彌れば大道忽ち變じて一條の濁流と變ずるが故に行人は迂回して大道の兩傍に數丁を距りて平行せる二條の路の中何れかに由ると云ふ。

道路の山間に在るものは車軌に挽き磨消され轍深尺餘行路に一段の困難を添ふ、支那の馬車の双輪の間一定し居りて秦の始皇帝が此制を定めてより今日に至るまで不斷同一轍を走り且つ車輪は彈機なく鐵にて直徑尺大の物なれば如何に堅牢なる岩石も年一年と挽き凹まざるゝなり、況んや平畝の如きは人工を俟たずして自らに道路を現出するなり、即ち車輪の過ぐる所即ち道路なり、道路の兩側概して數尺も高く土坡狀を作すは畢竟之が爲めに外ならず。

行旅に最も困難を感ずるは道路の狹隘なることなり、甚しきところは僅かに一輛の車を通ずる位なるを以て往車來車一所に出會ふては退くことも進むことも出來ず、拉車的の喧嘩となり口論となり車輛の破壊となるは珍づらしからぬ例なり。

然し大抵は近くて數丁毎に遠くて十數丁毎に自然の若くは人工の讓避所有り車馬の右の如き狹道に到るときは互にオー／＼と高く呼はりて信號するが故に此讓避所に近きもの先づ避けて來車の通過を俟つなり。

氣候は時會々舊の十二月に際したるを以て北風刺すが如く河川の小さきは皆氷結したり穿かち居たる長靴の皮凍つて脚全く暖氣を失ひ痲痺して感覺を失へること度々なりし夜中は毛布五枚綿入布圍一枚を使用したれども獨ほ寒氣を覺ゆ夜半にして夢醒むること少からざりき手巾の如き熱湯の中より捻り出だすも一分時ならずして全く凍結して棒となる。馬上鼻毛の凍結したるには少々閉口したり頭部豹の毛皮にて製りたる風帽をもて包みたるに依り僅かに耳朵の腐爛頰部の龜裂等を免かれたり。寒暖計は平均二十七八度を示したり。元來支那西北部の氣候は冬季此の如く亟寒凍冽に反し夏季は炎熱燒くが如く盛暑大抵九十度に昇る此を以て熱病盛んに行はれ加之白蟻、臭虫等の害少からず。而して夏冬の期は春秋の佳期に比して長く一年三分の二を占む。雨量甚だ少く予が昨年四月より十二月迄北京に滞りたる間に於て雨を見たるは只だの兩三回に過ぎざりき。それをもシ・ボ／＼雨に過ぎざりき。

途中の各府州縣治の所在地は四方圍むに概して四米突高の城壁を以てし其東西南北に關門有り。夜間は固く閉鎖して内外の通行を禁ず。官符を有するもの若くは番人に賄するものは此限りに非らず。これ皆戰國時代の遺物にして昔人民の膏血より成りたるものなり。然れども武器の改良せられたる今日に於ては其無用なること蟻垤も擇ばず。但し市都の茫々たる一望千里の平原の眞中^ソ中に在るものは此を以て多少北風砂塵の襲撃を禦ぐに足る。猶ほ防波堤の港灣に於けるが如し。

驪山宮と漢代の名區

癸卯の季二月十一日日天に中する比なりしが古長安の客寓を騎馬にて出て東走二十里咸寧縣なる澧水を渡る。橋頭に朝川勝地と大書せるを見てフト忠簡公の一絶を想起す。管茅作屋細家居。雲碓風帘路不迂。坡側杏花溪畔柳。分明摩詰朝川圖。水は東南に流れて涓水に朝す。坡田に牛羊を散じたる。沙岸に鷺鷥の翔けたる。細く徐かなる煙井屋を罩めたる。遠くは霽色林麓を分ち嵯峨北より來つて空際に横はれる。宛然一幅の好活畫なり。手綱緩めて且つ行き且つ眺め東すること八里にして例の臨潼八景の一に數へらる。瀾橋を渡る。橋は瀾水の上に在り。漢の時行を送るもの

多く此に至つて柳を折りて贈別す。開元唐遺事に云ふ。新を迎え故を送り此に至りて黯然たりと。故に又銷魂と呼ぶ。王莽の時橋災したるを隋に至り更造す。元石をもて修めたり。即ち今に存するものなり。只だ見る堤上の楊柳春未だ淺く、塙外の村落煙猶ほ寒く、臨潼山の殘雪は晴波と映發す。而して遙かに東方の天を望めば孤懷惻然たり。馬を欄干に繋ぎて低徊するもの多時。賦して一律を得たり。三年不一入家門。區々錦衣誰復論。草澤同盟徒雄志。李園知己易衰顏。望遠閣頭頻望遠。銷魂橋畔欲銷魂。天接太行風雲暗。飛鴻亂叫迷川原。灞橋の東二十里。斜口鎮と云ふ小驛あり。夕陽を負ふて更に東すること十里。薄暮臨潼縣城に着。其南門枕驪門を出て城外の公館に投ず。公館は即ち古の華清宮にして驪山の東北麓に在り。かの白樂天が春寒賜浴華清池。溫泉水滑洗凝脂と歌ひたる勝地にて庭園には珍艸奇石多く亭榭口は古書名書を掛けたり。琪樹日寒くして鳥枝に驚き、晴池水温かにして魚藻を出づ。溫泉の裡に魚の住むは予の初めて見る所なり。小橋を渡つて池心の小亭に出て去つて長廊を廻ぐり小丘の上に来れば朱樓三棟有り立つ。知縣之を予の寢室に定む。庚子の變皇上西巡の折太后を伴ふて駕を此地に枉げられたるとき御寢室に充てられたるは即ちこれなりと予、嗚呼萬乗の貴き身を以て千里の旅に心を傷め枕頭の山松風を

七〇

聽きては羯鼓の聲かと驚き、昔の碑文を讀むにも世の興亡を弔ひ人も惜しわが身も悲し行無與兮歸無家。國破孤城飛雀鴉とぞ歎かせ給ふなる御心の程を思ひやり奉りて一枝の國風を壁に書き付けたり。人やいづこ何處や夢の跡ならむ。過ぎし名殘は松風の音。此夜縣令黃氏より盛んなる靈應を受け了つて月明に乘じ驪山の最高處に上りて朝元閣の無き跡など尋ね。又た東のかた千里の目を放つに渭水は霞みて見ぬず。下つて始皇陵に詣づ。詩を作つて手向けつ。強盜別開仁義門。焚書恨不殲魯論。由來誤國多餘孽。憑吊秦人未死魂。紹興酒の醉氣醒る頃。楊貴妃が入浴したりと傳へらる。浴室にて長途の征塵を洗ひ得て寢に就く。神清骨冷夢を見ず。

驪山は縣城の東南二里の處に在り。其西は終南山に接す。高さ約四千米。突昔驪戎の居りし所なるにより此く名く。又會昌山と名け應昌山とも云ふ。

公館の壁上題詩頗る多し其尤も唱哦すべきを擧ぐれば

驪山有感

蒼苔逕滑明珠殿。落葉林荒羯鼓樓。渭水都來細如綫。若爲流得許多愁。

風流子

三郎季少客。風流夢繡嶺。墨瑤環看。浴酒發春。海棠睡暖笑波采。媚荔子。葵寒。况此際。曲

江人不見偃月事無端。羯鼓數聲打開蜀道。霓裳一曲破潼關。馬塊西去路。愁來無會處。但淚滿關山。賴有紫莢來進錦鞞傳看嘆。玉笛聲沈。樓頭月下。金釵信音杳。天上人間幾度秋。渭水落葉長安。

無題

山原繚繞水繁迂。繡嶺屏風立座隅。

更上朝元最高處。鏡君都看渭川圖。

溫泉箴

東山少連曰。玄寡氏之曰。壬夫安祝融氏之女曰。丁莘俱學水仙。是為溫泉之神焉。帝命之救。萬靈盪滯。結腑臆。達膚腠。泄下人多。賴上帝是崇。有飛廉氏之佚女。妬之常欲大恩。其功故入溫泉。必齊以酒。戒以防患。如心利物。含生之疾。我願除。祇二神嘉之。吹湯激邪。珠連漚累。滿汨揚葉。此其効也。若入溫泉。僻心穢行。惡事淫形。居食失節。動出躁輕。二神醜之。不匡人命。飛廉佚女。以裾嬖人。是走疾芒。風瘍眩。劇之病。夫有意之醫。照合神無。恒之醫身。為愆使。莫之傷之者。至矣。是以君子慎其微也。

十二日朝華清宮。より新豊に遊ぶ。新豊は臨涪を東に距る二十清里。楚の亞父が玉斗を撞いて豎子を罵りたる鴻門の古跡なり。其西門に「古鴻門坂」と額書す。過ぎて東す

る。と數丁路の北側の隴岡の上なる石碑の面に「漢代名區南原鴻門楚霸王宴漢高帝處」と銘す。わたり地形一圓すべて蕪田にして南の方に山丘逶迤たるを見る。客低徊茫然たり。

咸陽

癸卯六月二十四日三原より咸陽に遊ぶ。咸陽は三原の西南八十清里。西安府の西北五十清里。途中は山丘の遮害物なきが故に道路畧ぼ平坦に且つ大なる迂廻屈曲なく。但だ四十清里にして涇水を渡るや數米突高の土坡を見る。坂に由つて其上に上れば即ち四方數十里のプラットオとなる。西南に行くこと三十清里にして又坂に由つて之を下らんとするとき驟雨に遇ふ。天驟かに曇り眼下の煙雨遠く渭水を罩む。其流細ふして縷の如く帯の如し。其北岸に城郭を望む。即ち咸陽なり。途中及び咸陽城の周圍盛んに罌粟を種植。恰かも花謝し實結ぶの時なり。麥穗又た秀々。間々土饅頭の艸荊を長ずるもの甚だ多く。人に問へば秦漢王家の陵墓なりと云ふ。最も大なるは直徑三百米突位有り。遠く之を望めば山丘の如し。プラットオの上最も多し。涇陽縣は三原を西南に距る三十清里。其途中に唐代の遺物たる石造の獅子高三米突。

麒麟高三米突各一對有り味經書院は従前陝甘兩省の子弟を養成する所なりしを光緒二十六年宏道大學堂の興設せらるゝと共に閉院して以來巍然たる堂構徒らに荆棘裡に埋没せり。

咸陽には渭陽學堂と云ふ寺子屋有りて例の郷先生一名が「子の賜はく」を講議するのみ此他に學堂の設けなし。

咸陽の西二十五清里の處に唐王馬跑泉と云ふ古蹟を訪ふ路傍に泉有り滾々として地底七丈の處より湧く水色澄清掬して之を飲むに冷肺肝に徹す更らに西すること五十五清里にして例の馬塊の坡となる坡上の古廟に「揚貴妃之墓」有り立つ。

幾とせもつさせぬ恨忍ばれて墓場さびしくけしの花落つ

榮華は幾時美人國家と共に亡ぶ婉轉たる娥眉馬蹄の塵に委ねてより金銀の信音杳絶聞くなく天上人間經秋幾度ぞ馬を坡下に駐めて惆悵すれば悲風颯として征袖を拂ふ其影婆娑霓裳一曲の舞に髣髴たり。

咸陽縣の東二十五里渭水の陽南なる上林苑中に秦始皇嘗て阿房宮を建つ今や秦代の故都も共に跡形もなし楚人の一炬三月火紅の跡唯だ見る雲雀數聲麥叢に落つるを頭を回らして咸陽を望むに渭水洋洋として城下を流れ去つて東に向ふ感

慨措かざるもの之を久ふす。

古長安

唐代の名都長安大道連狹斜と歌稱されたる繁華殷昌の面影今は茫として尋ぬ可くも非ず往時の宮殿樓臺其礎だに留めず唯だ西安府城南門外なる雁塔のみ巍然として今も尙ほ雲に聳えたり故老郭外の荒原蕪田を指して曰く是れ南苑の廢地なりと曰く是れ北闕の舊址なりと農夫往々地を鋤いて古瓦を出たしては曰く是れ漢時の物なりと古劍を挖しては曰く是れ唐王の佩ぶ所なりと然かも眞の物は甚だ少なし實に過去の歴史は讀むべくして見るべからず而して人若し支那史中に於て最も旺盛を極めたる漢魏以下唐宋興廢の跡を知らんと欲せば請ふ去つて孔子廟なる碑林に到り數知れぬ苔石の面を摩擦一番して讀一讀せよ蓋し思や半ばに過ぎんとす又た去つて八仙庵に貧道士を訪ひ臥龍寺に老和尚を訪ひ其客に茶を勧めつゝ往事を説くを聽きては誰か桑榆の感に打たれざらん我西安府に遊ぶこと數次其所謂古長安の跡なるものを問ふに遂に憑據を得ず一夕巡撫升允氏を其衙門に訪ふ氏遠來の客を勞するにシャンパン酒を以てす杯を重ねること十

數次醉忽ちにして發す。歸途殆んど馬に乗るに堪はず。覺せず大呼して曰く白也。今何處にか在ると高唱して曰く長安市上酒家眠。天子呼來不上船。

西安府城の兵備

吾一日雁塔の最高層に上り府城を瞰下して曰く。護衛たる哉吾に假すに五百の日本兵を以てせんか。之を抜くこと立食の間のみと。去つて其兵備を探る。
歩隊三十營
馬隊十七營

大砲十門。光緒二十七年(明治三十四年)購入する所。一門四千兩。湖北鑄製局の造作に係る。

一營三百人なるを以て歩馬兩隊を通じて一万四千一百人なるべき筈なれども、實數は其半にだも過ぎず。銃はモーゼン式なれども五十人に一挺位の割なり。且つ手入れ悪しき爲め用に堪はずるもの多し。

服装はベレンフォード卿の所謂前後にフタ付きたる支那固有のものなり。

龍門遊紀

龍門又た禹門と云ふ。黃河を隔て、陝西の界韓城縣に在るを西禹門と云ひ、山西の界河津縣に在るを東禹門と云ふ。傳へ云ふ禹王割開治水の跡なりと。従前邦人の此地に遊びたるもの無し。人盛んに山水の勝絶を稱す。予常に神馳魂飛一たび往いて其奇を探らんと欲す。茲に三十六年七月二十七日龍門の遊を作す。前九時三原の學堂を出づ。將さに南門に來らんとするや馬物に駭いて奔跑足鎧を離れて丟下頭を傷く。又走行漢の武三思の陵傍を過ぐるとき雨驟かに來る。快走涇陽に至る。雨夜に至つて猶ほ息まず。

▲二十八日朝來雨少しく息む。前七時騎馬出發行くこと幾もなくして又雨に逢ふ。随つて快走すれも随つて大雨。涇河の水漲溢して過ぎ難し。俟つこと二時間ばかりにして渡舟漸く辨ず。前十一時咸陽に着。大公館に投ず。

▲二十九日雨益大。渭水汎濫渡る可らず。

▲三十日雨息まず。前日と同じく爲すことなくて暮らしぬ。

▲三十一日雨息みたれども河水未だ減ぜず。とて縣の令孫雲官氏來り告ぐ。

八月一日河水未だ減ぜず。舟を渡たす可らず。滯留數日頗る無事に苦む。恰かも好し

孫氏來訪今夕聊か粗酒薄肴を供えて珍客の光臨を候つ席を同くするの榮を得ば至幸なりと予が前回の遊孫氏優遇至らざるなし今又た此の如し予多謝して曰く感激措かずと晩に孫氏を衙門に訪ふ既に美酒佳肴を供へて俟つ辭し歸るに臨んで孫氏予に約するに其愛する所の蒙古犬を贈るべきを以てす

▲二日晴れたれとも水未だ減ぜず少住孫氏菓子を送り來る

▲三日晴 前八時過ぎ渭河の渡を過ぎ河南街を過ぎ五里豊橋を渡る橋の長さ二百三十歩豊水の上に在り其水北流す豊橋より嫌漸店に至る七里一路の兩側悉く古き柳樹青く茂りたり途中數ヶ所雨水未だ減ぜず屢々道を没し深きは馬腹に及ぶそれより未央宮の跡を吊ひ鎮塔寺を尋ね西安府城に着きたるは午後一時頃なり官店に投ず此日走行三十里

▲四月晴 前八時騎馬出發東門を出て走行四十里新街にて打尖ウチツバ薪水を右にして行くこと更に三十里河を隔て高原を望む白鹿原なり又二十里藍田に着日既に没す縣衙門に宿す縣令周某來り訪ふ予命するに明朝秦嶺に上るべきを以て馬匹の用意をせられたき旨を以てし併せて學政使沈氏の給する所の護照を以てす某忽ち色を變へ力阻して止まず曰く大雨の後道路甚不好人馬の走行に便らずと予

曰く多少の不便予の患ふる所に非ずと固く執つて聽かず某語塞がる終に此地に駐在する宣教使アンデルソン(瑞典人)にして漢口教會の派遣する所なる者と呼び來り予との談判の衝に當らしむ予は談判の際アンデルソンが短銃を袖にし居たるに氣付き頗る其臆病者たるを知り竊かに惘然に思ひたり兎に角熟考の上にて回答すべしとて彼を引取らしめ一方に於て知縣には秦嶺行は思ひ止まりたる旨通知したり予は此時強いて我意を張りて面倒臭き問題にもならば結局己の不利益とならんことを慮りて遺憾ながら節を屈したり知縣のかくまで縁遠き事に干渉したるは實は學政使より予が隨行を命ぜられたる男勞を愛み險仄なる山徑溪路を蹈むを好まず去りとして予を直接に引止むるを憚り止むなく私かに知縣に頼み込みたる結果なりけり此夜知縣の冷遇甚しく予が寢所として極めて不潔なる一室を撰び呉れたる其心事の淺陋寧ろ可笑

▲五日晴前九時衙門の隸丁飯を送り來る且つ酒瓶有り酌みて一杯を嘗むるに是れ酒に非らずして是れ水なり侮辱も亦た甚しからずや去れどかゝる處にて活劇を演ずるも面白からずとて疍瘵玉を壓へ何知らぬ顔して馬に跨り出發走行九十里新街斜口鎮等を経て臨潼城に着す暮れたれば華清宮に投宿す縣の令李嘉績氏

酒席を送り来る。

八〇

▲六日晴少住温泉に浴すること數次連日の疲困全く去る。

▲七日晴騎馬行く。八十里渭南に至る。途中前遊する所の鴻門坂を過ぐ。

▲八日少陰微雨

▲九日晴華陰華山に上る。玉泉院に遊ぶ。泉有り流る。清冽愛すべし。道士と語る無學蒙昧本尊たる老子の事すら知らず。支那の道士は皆此の如し。和尚に至つては更らに甚し。

▲十日晴前十時騎馬出發。三河口にて渭水を渡る。才かに下れば水は黄河に會す。それより黄河を右にして少西北要すること二十五里。洛水を渡り又三十五里朝邑に着す。べき六十里道は高原の間を通ず。

三河口にては石炭船の停泊するもの甚だ多し。是れ山西の石炭を積んで咸陽まで至り各地に頒賣するものなり。

▲十一日半晴半雨朝邑の西門を出て折れて北行すれば天邊杳かに山西の姑山を認む。十五里にして坂坡を上げれば高原となる。二十里蒲小鎮黄河の流れを右に見る。やゝ有りて土峽となり之を通過し去れば仁義里十里。吉廓五里。白家鋪五里。梁牛街

街又土峽を上る。それより更らに高原となる。枕山寺王家圪塔等の小村を経て行き盡くせば渠西窟の急坂となる。坂の長五百步。峻險甚だし。人皆馬を下つて歩む。下り盡くせば小流有り。金水と云ふ。南流す。馬に飲ましむ。之を渡つて又た上ぼり坂となる。七百五十步にして上り盡くす。中道に關門有り。金水の長城華原の保障と坊書せり。このわたり一帶の高原を華原とは云ふなり。行くこと數町。伊尹耕莘の古地の碑有り。古りて殆んど傾頽せんとす。更に鞭つこと十里郃陽城となる。南門より入り治陽學堂に宿す。知縣李氏優遇頗る力む。此日走行共に一百里。途中枕山寺に來れば西方の地平線に更らに一連の山を認め。山西の姑山は乘馬の人の肩と平行線内に入れり。一帶の阜岡は皆耕墾したれども甚だ疲せたり。土毛は唯だ粟の二三寸を長じたる。と間々豆類の未だ花ならぬとを見る。之を臨潼より華陰に至る一帶道傍綠樹青圃甚だ豊かなるに比すべくもあらず。

▲十二日 晴 郃陽の東南門を出て折れて北に向ひ。又た上つて高原となる。屢次岡阜の中を上下して行くこと二十里。一千一百歩の急坂を下り冷水を渡る。河の幅三米突又餘橋なければども乘馬のまゝ涉るべし。水は梁山より出づ。十里鳳家村。又十里北梁街打尖。又十里又急坂を上下す。坂合に小流有り。帶子河と名く。幾もなく郃陽

韓城兩縣交界の牌有り、元帝塔有り、高十五米突許り、十里馬陵古里、又十里又急坂となる。門有り坊に司馬坂漢太史古里と書す。路の西側に馬王廟芝陽洞有り、廟廊に上つて下瞰すれば黄河は悠々として南流す。芝水之に朝す、北の方には太史峯を望む。遠く樹色を分たず、只だ白雲の行くを見る。下の中段の高處に漢司馬太史墓祠有り、建つ人をして仰看先哲の高風を景慕せしむ。下つて芝水を渡れば芝水鎮となる。城郭甚だ大内に數丁の市街有り、十里白公舖、その北に高神殿有り、殿宇莊古、眺望勝絶なり。その何の年代に修蓋せられたるやを知らず、又十里毓秀橋を渡る。濠水の上に在り、濠水の源梁山より出て、南東に流れて黄河に入る。水清うして砂石皆敷ふべし。韓城縣に着、城の南門より入りて書院に宿す。院は縣衙門と隔壁す。縣の令王氏來談す。酒席を設く。肴に濠水の鮮鮎を交へたるは嬉れし。途中太史坡を下りより一帯の平地となり、四方圍むに阜岡山巒を以てし、濠水の外數條の細流有り、爲めに土地頗る膏瘦にて青田綠圃十里滿舖す。此地藍を製するもの多し。

▲十三日 晴 道案内者乘馬食品等に至るまで王氏の供給を受け、龍門に向け出發。北東に向つて行く十五里孫家村、孫家河を渡る。又十五里藩庄、十里李村、河十三里下峪口、十五里禹門に至る。一路すべて黄河の西岸に依り梁山を左望しつゝ、阜岡立

波の上を行く、險山重嶺の前を遮るなしと雖も而かも亦た馬蹄凸凹過ぎ易からず。禹門は實に天下の奇勝なり、危峯險壑三面に屏立す。黄河奔逸其間を兩斷して來る。水勢澎湃急轉直下向ふ所前なし、奇岩を搏噬し狂浪を叱驅し轟々隱々地底に雷鳴を聽くが如く然り。一小礮嶼の屹然として急湍の中に立つは宛がら孤忠殘壘を固守して降らず、百万乘勝の強兵に抵禦するよりも壯且つ烈なり。驚濤倒波龍吟虎嘯腹背并に打つ。

礮頭廟有り、治水王禹を祠るの處なり。四顧居人の家なし。對岸を山西の河津縣となす。山腹岩背に廟樓有り、流に臨んで立つ。東禹門なり。河の下方流勢稍緩き處より才かに舟過すべし。

此夜廟内に留り茶を吃して道士と語る。夜深うして念地寂然心外一物なく、恍然として人仙ならんと欲す。

觀音洞龍門山の絶頂に在り、玉鏡巖龍門山の正東に在り。

梯子崖囊駝嶺の西を遙つて而して北す。羊腸たる鳥道桑園坡老虎嘴に邁つて又た北すること里許、攢灘を過ぎ崖を攀ぢて上れば石礮層折す。之を梯子崖とは謂ふ。龍門より禹閣に登り金門に達し以て相工坪後石城に至るは串ねこの道に由る。

金門龍門より上ること六七里、又た金門の右山半に相工坪有り、廣二丈餘、長四丈餘、片石河に臨ひ、登瀛愛す可し。

● 鴿子堂、金門の西岸半山の間に在り、俗に它裏と呼ぶ。

● 黄河は其流れ急なるが故に船舶の航行全然不可能なり、而して龍門の黄河は急流中の最も急流なるものなり、此點に於て楊子江と異なり、且つ兩岸の粘土を流すこと楊子江よりも更らに甚だし、龍門禹王廟下の水色は深碧を呈するに反し、才がに下ること數丁、其水濁濁波勢沿々岸坡の墜落するもの、日夜間斷なし、況んや大雨洪水有るときは沿岸數百里の土地を淘汰して之を遠く黃海に運搬し去るなり、古人桑滄の歎有り、誠に由有る哉。

▲ 十四日 晴 韓城に歸る。書院に宿す。燈後大守王氏來候、茶談數刻。

▲ 十五日 晴 韓城を辭し歸原の途に就く。日暮哈陽に着泊す。

▲ 十六日 晴 哈陽の南門を出て行くこと二十五里、小流を渉る。大谷河と云ふ。又十五里、澄城に着打光。又た行くこと四十五里、洛水を渡る。渡舟有り。又二十里孫家園、又二十五里蒲城に着、考院に宿す。頗る縣大守の款待を享く。

▲ 十七日 晴 堯山を右にして少南西行九十里富平に着打尖。此行此處に至る。

ですべて騎馬なりしが、此處に至つて隨行者の一人熱病に掛りたる爲め大守に命じて馬車を整へしむ。西南に走ること六十里、三原に着きたるは午後十二時下ぐる。比なりき、萃陰より韓城、韓城より澄城、蒲城を経て三原に至る一帯の地勢は皆阜岡丘原にして土地甚だ隆低多く、低處より隆處を上げば山の如く隆處より低處を臨めば谷の如く、従つて道路に急坂多く、一つの阜岡と一つの阜岡との間に大抵小流を狭む。地味概して北乏南肥なりとす。

南 征 記

はしがき

明治三十六年仲冬、予事を以て清國陝西省三原なる宏道大學堂教習の任を辭し歸朝の途に就く。素志本と隣邦の改善を補助するに在れば予の再舉重來を畫すべきは更にも言はず、但し將來の根據地たる何處の邊に定むべきかは須く時宜に隨ふべき問題なれば當下猶ほ未決に屬す。左れば馬を燕趙の野に馳すべきか、將た粟を吳越の船に横ふべきかは只だ四百餘州の雲行如何と待つのみ。

道の次道を蜀に取り楚に出づる豫定なりしを會々學台(全省學務總監)沈氏三年の任滿ちて乞假省墓道を襄河に取りて南下漢を過ぎ瀘に回へるに因り同行しては如何との相談を受く熱ら思ふに何れの道に由るも全く新らしき見聞と閱歷とを得ることなれば自ら益するに於て少差なしと即ち棧雲峽雨に玄宗の往跡を弔ひ隆中の勝地に臥龍の高風を尋ねるは他日に譲りぬ

▲十二月二十八日 晴 學台沈洪泉夫子の離宴に招かれ往く主人役は沈氏及び新任學台朱益藩氏は江西の人字は文郷年四十三庚寅の翰林官は四品侍讀學士たり客分は皆學堂の教習にて總勢七人此宴半ば舊學台の告別を意味し半ば新學台の着任披露を意味す

▲三十一日 晴 教習毛昌傑字は俊臣予が爲めに特に餞別の宴を自邸に開く俊臣爲人直情徑行毫も邊副を修飾せず而して學問該博嶄然として郷黨の重望を繫ぐ此日卓上山海の珍味を列ねたるに非ざるも主人友好の深且つ厚なる客をして數杯の燒酒に十分の歡を盡さしめぬ酔後歸館感慨集終夜寢らず去年は前年と同じく今年も去年と同じく風塵掠倒蒼茫として客土に送り過ごしぬ來る年の今夜は果して何處にか在らんかくて三十六年と永久の別を告ぐ明くれば

▲三十七年一月一日 晴 古銅瓶の老梅一枝微かに笑み初めたり故國にては杜蘇に酔ひ雜糞に飽いて打ち興せぬ者としては無からんと客中の歲始は僅かに豚汁の肴にて高粱酒を酌み東方の天を肅拜し聊か天子の萬歳をことぶく詩一絶を得たり羈旅人如遠謫人零丁偏與瘦驢親今朝一盞高粱酒強醉還迎異地春

▲二日 晴 數日前より行李の拾綴に忙しかりしが此日將至り全く整ひ早や驛背に搭載するばかりになりたれば晚に客とかたらひ紅酒を沽うて小酌簪を弄して古人の詩を唱ふ云く一年又過一年春百歲曾無百歲人能向花中幾回醉十錢沽酒莫憂貧客聽いて悽然たり

▲三日 晴 一友の親しきに別るとて詩を作り聊か離逢轉瞬の感を志し以て贈る歸去來兮東海春今朝還別舊知人豫思一路逐窓夢半到家鄉半到秦午下二時騎馬學院衙門を出づ高陵縣に向ふ諸生送つて東門の外に至る相約して曰く再會遠きに非らざるべしと涙を揮つて去る一望點青だもなき冬枯れの平地を東南に向つて横馳す北風凜冽馬毛縮んで蜩の如し五時縣城に着北門より入る公館に宿す大守彭氏盛宴を張つて一行を款待す

▲四日 晴 早起騎馬南門を出て少南東行行くこと十五里渭水を渡り蕭疎たる

古柳の岸に沿ふて又少東南行すること卅五里華清池上夕佳樓に夕佳殘る頃臨潼城に着西門より入り南門を穿け温泉宮に宿す此地に遊ぶこと既に數次何時もながら飽かぬ景致なる哉此夜浴後送者十數名と語り明かす。

▲五日 晴 前十時早飯を了へ騎馬出館西門を出て諸友と分携藍田に向け西行二十里斜口鎮を過ぐ折れて南行す折れずして少南西行すれば長安に抵る又二十里新街驛に抵る公館に投じ打尖驛丞酒席を送り來る未だ驛に至らざる數丁の處にて折れて東すれば道西安に通ず去ぬる夏西安より藍田に抵るとき取りたる道は即ち是れなり其の折は酷暑焼くが如く息も塞がるばかりなりしかば新街の公館に立ち寄り少時の晝寝に連日の草臥れを慰したりしが此次は之に異なり北山あるし遠慮もなく人の横面に吹き付け馬の耳たげフエーと鳴りも止まず瀾水の河風齒にシミて疼く鞭もつ手も凍りて得揚がらず一行寒哉と呼ばざるなし夕陽既に南山の端を下り冥然として樹色を失はんとする比出館微南東行天黒うして路迷はんと欲す葉湖鎮を過ぐる頃は空の色曙んと欲する時の如くほのと明らなりたれど月影は當前の山に遮ぎられて見えす夜八時藍田縣城に着北門より入り考院に宿す同行沈衡山藍田感作と題し一絶を作り示す琅々可唱駟車幾

度過藍田往事如麻開天一聲鶴孤甘寢死傷心手二百年前周子歸たるもの當りに地下に點頭すべきなり衡山は沈學臺の姪子甚だ學才に富む時は精餘の業に屬すれども佳作頗る少からず去年連騎三原城北なる東里の李子の廣園に遊ぶ一絶を作つて次韵を促せり類垣斷砌屋歌榭放目園亭亦黠然儘有好花能弄色春風無主爲誰憐手取り敢えずとて元韵に歩す若藤苦竹蔽頽榭亭榭無人晝寂然荒廢滿園何所見好花啼鳥只相憐衡山讀んで曰く音節蒼涼氣節雄厚と予曰く二句却つて高什を評すべしと。

藍田の人物唐には廉誥仲文を以て宋には忠宣兄弟を以て最と稱す令には則ち湛仙尉には即ち子厚斯立とす輞川山莊は南門外八里忠宣祠は縣北五里何れも夜なりしに因り往かざりしは甚だ心残りなりし。

此地郵便局有り去年の開設に係る。

▲六日 朝來少陰小風天雪ふらんと欲す 此より路車を通ぜず學臺及び其家眷は皆轎子にて予は驛を以て馬に易ゆ驛は驢と馬との合の子にて自己は決して産兒せず力甚だ多大にて如何なる險惡なる徑坂にても重量二百四十斤の物を背載して能く一日の走行に堪ゆ之を以て道の車馬を通ぜざる處は皆驛に由る長安よ

り蒙古境なる榆林に至るとき同官縣なる金鎖關以北の如き亦た然り(驛は二頭以上前後して行くの習慣有り一頭の時は人の之を拉くにあらでは如何に鞭撻を加ふるも動かず)前十時南門を出て小流を渉たり前望すれば千山横互疊嶂層巒半天に踳踖す蓋し終南なり終南西は鳳隴より起り商洛に抵り太華熊耳と連る故に天下の太阻たり是より南下十五里七盤山に登る十二緡を経歴す真綿の屑の如き雪がチラ／＼袖にたまる十二緡は唐の李西華開く安謀所之を關路と云ふ乾隆の初陳文勤公安謀陝に撫たり復た平治す險阪甚だし烏道螺旋流泉之を懐く俯視すれば深澗皆千仞煙の如し洞溝桃花砦尤も劇馬に策つて行くに心怍々然たり樂天初めて藍田を出づるの詩に停驂問前路路在秋雲裏蒼蒼縣南道去途從此始絕頂復盤上衆山皆下視下視千萬峰峰頭如浪起朝耕韓公廟夕次藍溪水潯陽路四千始行七十里人煩馬蹶踣勞苦已如此と縱令遠調の身にあらぬも之を踰ゆるものにして誰が樂天と感を同うせざらんや

想起す予重誓の比父に陪して函關を度り七折と畏途を徒走したりしことを而して往事茫茫煙霧を隔てて遠山を望むが如し七盤嶺の最高所に馬を立てて廻望すれば瀾水帯の如く萬山の蹠を流れて渭に朝す長安は蒼茫たる雪空の底に沈みて

家を見ず上ること三十五里乃ち又峻坂を下る六十度の傾斜をなす深澗に入りて西行更らに十里水に面むの村落百戸ばかり即ち藍橋驛なり藍水の出づる所天既に薄暮官店に宿す藍田を距る五十里此夜衡山懷張一胡九諸君子と題して二絶を作り示す藍橋天暗月星低欲望長安路已迷應隔青山千萬疊故人更在此山西前夕華清別尙歎三年蹤跡似驚濤得歸雖好懷人苦縱作神仙能脫離張氏胡氏共に安道大學堂の教習にて予等と友とし善かりし者衡山の此詩を讀んで胸臆冷然飯後石傳いに溪を渡り前岸峯下の湘子廟に詣て更に林間の徑に由つて上ること數百歩湘子洞口を訪ふ傳へ云ふ洞の深さ其幾里なるを知らず湘子遺蛻の處なりと恐くは後人の臆説ならん歟湘子は韓文公の從孫公の南遷せられて潮州に赴くや湘之に従行す其患難に相從ふを以て後人嘖々其考謹と稱す例の人口に會灸する一封朝奏九朝天夕貶潮州路八千欲爲聖朝除弊事敢將衰朽惜殘年雲橫秦嶺家何在雪擁藍關馬不前知爾遠來常有思好收吾骨骨津江邊の一律は公が藍關に至つて湘に示すもの今藍關なる地名亡びて其那兒の邊なるやを分かつたずと雖も推測るに此むたりなるべし湘子廟の裡に捍勇巴圖魯古蕭關吳雲伍の對有り曰く十載侍文公仁克盡孝克全八千里患難相從苦心可鑑潮州水氣常騰秦嶺雲一官膺大理威斯通叩斯應百二

關威靈久著正辭し去るに臨み道士わか袖を牽いて姓名を問ふ笑つて告げず。

▲七日 雪 前十時出店少西南行澗水に沿ひ溪流を渡り行くこと四十里午下牧
護關に到る公館に投じて打尖關下水有り郭家店より西北澗水の源と爲る豆腐餅
は此地の名物一寸角のもの一個四文味亦佳二時出館南行十里秦嶺を登る瘦驢屢
々蹶く滿天風雪嶺頭文公廟有り明の根柢なる人禪舎を撤して之を奉じたりと云
ふ廟額文雄八代と大書す又右に雲橫處と刻す嗚呼忠硬公の如きも亦た遠州に貶
せらる低徊當年を想ふては感慨多少七句を歌ふて鬼雄を用ふ病馬踟躕行且休滿
山風雪路悠悠千秋同是傷時客公貶吾歸亦自愁公能く享くるや否や肅拜門を出づ
四顧瀟漫これより五十度の傾斜をなせる峻極を下ること數千歩にして又瀨底と
なる竹山有り尤も陡峻將さに盡さんとする専水潺々然たり息邪水丹水と名く商
州の北なる家嶺山の南に出て流れて此に逕る溪水今までは皆北流したるを文公
廟を下りてよりは皆南流す亦た以て地勢の分るゝ所たるを推知すべし南行更に
三十里日暮黑龍峪に着公館に宿す。

黑龍峪は藍橋に比すれば甚だ繁昌の驛たり南北に亘つて一條の大街有り此日途
中驛寺を擔ふて北行するもの引きも切らず一人毎に大抵二百個入の太包十四づ
くを肩にす價は問ふに一包一兩と云ふ皆漢口より運入れて來れるものにて一と
して獅子標ならぬはなしこは漢口に製造所有り清人の所有に係る湖廣總督張之
洞の御用金を調達すること屢次なるの功徳に依り釐金稅免除の恩典を享受し居
るを以て南湖全省は勿論それより以西の地方に於ても殆んどモノポリイを掌握
するの盛況なり四川重慶に於て邦人宮川氏が製造する鴉標の如きは之に比すれ
ば遙かに遜色なき能はず。

黑龍峪は商山戰國策に謂ふ商坂の險にて又た地肺と名く途中說法洞石佛灣銅佛
有り明の隋元洪王邦俊の修めたる所なり懸崖一縷七盤よりも甚だし乾隆十九年
知州羅文思關いて之を寛うす羅公砦と易名すと云ふ。

▲八日 晴 前九時頃出館少西南行瘦驢連日の疲困にや蹄幾度か蹶く十五里大
商原又三十里麻澗打尖又二十里古仙娥驛を過ぐ岸對を仙娥峯と名け岸下を仙娥
溪と名く景致幽邃を極む懸崖絶壁の下水清く砂白く危崖千仞勢落ちんと欲す鞍
上マニタール中の佳句なと想ひ當ては口吟さみつく山の腰なる疊背を曲折し
て行くに道尤も險隘並ひ前むべからず急ぎ走るべからず聞説く仙娥溪の南に桃
花溪有り宋王元刺史が時に遊賞する所なりと旁は靡脂關桃花を以て名を得爾崖

稻田多し。東のかた西暉亭を距る十里、亦た元の時建つ。故に西暉亭下峯碧、南靜川中木葉紅の句有り。南靜は川の南三四里に在り、地平かにして掌の如し。居人百餘家。秋來一川紅葉し、又小桃細竹水を夾んで生ずる在り。昔州の勝地なりとぞ。これより少西南行、更に十五里溪流を失ふ。折れて東行五里、商州城に着、夕陽猶ほ牌樓の最高處に在り。西門より入り、考院に投宿す。

今日の道は概して平かなりしかど、石ころ甚だ多く、唯だ溪岸の砂原のみ馬を走らすべし。途中憐寸を擔ぶて北行する者愈々多し、又駱駝の兩湖地方の茶葉を滿載して北行する者十數群、騾子屢々駭く。商州城はなかくに商買繁盛の地にて、潼關以北には稀に見る所、稍南方舟楫の便に近きたれば、にか氣象も何となる。山西、甘肅地方の山郭とは趣の異なるを覺ゆ。一條の大街東西に横はる。駐屯兵十七營を備ふ。此地四方山をもて圍む。横峪川其西南を繞る。署理知州楊吟海の案内を受け、中學堂を訪ふ。校舍堂構の建造裝飾なかくに壯麗にて、少くとも外觀だけは陝西省隨一の中學堂たるを失はず。大講堂、分講堂、體操場、教習堂、號、寄習舍、遊息所、檢査所、庶務室の意應接所等諸般の設備相應に整ひたり。教場は四方皆ガラス窓にて、光線を取り、地圖、動物、礦物の標本等を備へて、學生の參考に供したり。大小となく、我學校に模倣

したるなりとぞ。蓋し總教習趙氏、分教習黃氏の盡力與つて、多きに居るなり。この兩氏共に湖北の人にて、同地の兩湖書院より招聘したる所に係る。左れば多少日本人、其他外國教習より間接直接に教育の新方法など見聞する所多かりつらむ。課程は地理、歴史、博物、體操等を専らにす。學生は五十人、毎月每一人一兩づゝの官費支給を受く。該學堂の創設者は此地方屈指の有錢家尹仲錫なるものなるが、金には出し北無き支那人中に斯く公共的國家的事業に數万兩を投ずる者有るは喜ぶべし。宜なり。此の人の令聞遠近に噴々たることや。該中學堂の附屬として蒙學堂、其程度我小學校の下幼稚園の上に在り有り。學生は毎日正午十二時より夜の十二時迄本の讀み續けを強いらるるにても自家撞着も甚しと謂ふべし。

▲九日 晴 前九時騎驛出院、東門を出て東行三里、東巖山を見る。聞く李太白常に此に寓したりと聞く。東巖秋夜獨坐の詩を讀むに風景想見すべし。爬樓山の麓を過ぐ。山旁蓮華池有り。二十七里張村舖を過ぐ。河を渡り、南行數里、又河を渡り、坡關を踰へ、白楊店に至り、少憩吃飯。商州城を去る四十里、白楊店より又河を渡りて土地嶺を踰ゆ。走行甚だ險仄。十里夜村舖に至り、官店に投ず。百戸に滿たぬ小驛なれども、街上の商賈雜問の様さながらわが綠日の如し。此地四面皆山、一水其南を繞る。坡を下り

て石原小石原に小石拾ふも又た好き旅の憂を晴らしなり。暮黒薄く前山を抹し、丸木橋のかたの空林の上より晚炊の煙細く緩く上る様誠にゆかしく得も云はれぬ風致なり。

夜村舗の北を燕籠と爲す。雕屋と相對す。摩詰燕子籠を畫く時有り。

▲十日 晴 前九時騎驛出發。少南東行二十里。桃花舗と云へる數十家の小驛に至り飯す。桃花山を以て名く、山に棟多し。又蘭艸を出だす。曇花の勝地有り。又た東陽洞羅漢洞有り。皆壁立數十丈。又た少南東行雞冠山を望む。天半雲霧の中に翹立す。聞く紫陽洞有り。昔悟慎子張伯端道を此に修めたりと。今祠して以て之を祀る。二十里商洛鎮を過ぐ。亦た小驛なり。又十五里龍駒寨に至る。官店に投ず。

丹水秦嶺より東南に行くこと三百里にして寨に至り始めて舟す可し。吳楚の商舶河南拆川巾子關より沂つて至る者皆集る。人煙叢雜。乾隆二十二年州同を設けて以て之を稽察す。駐防兵一小練二百名有り。電報局有り。釐金局有り。

寨の四周皆高山重峯。大街一條東西に亘つて。坡崖の上に横はる。明王宮下の水頭舟船數十隻を泊したり。

藍田より寨に至るに轎夫一輛五六人を要す。每人毎日四百文。騾駝每頭毎日六百文。

を要す

寨より荆紫關に至る三百六十里。水多ければ四日にて足り少ければ五六日を要す。老河口に到る七百二十里。早くて十七日運くて二十日餘を要すと云ふ。船費は每隻八千四百文なるが、別に毎日二百文づゝの酒錢を舟子に賞給せざる可らず。賞給せざれば萬事不便なりとす。上水の場合には漕手の外に四五人の挽手を要す。竹製の綱を帆檣に繋ぎ付けて岸上の人を挽き行くなり。老河口より通常三十日なれど、河水太少なるか太多なるときは四五十日を要す。

寨下の河幅十五米突許り。舟は古式の屋根船にて長さ八米突。中腹の幅三米突。前後なり。一行の漕ひたるは共に十三隻。

寨より陸路荆紫關に至るは二百七十里。其道理驛程左の如し。

龍駒寨	至桃花舗	三十里
桃花舗	至四里舗	三十里
四里舗	至武關	二十里
武關	至清油河	三十里
清油河	至大王店	四十里

大王店	至三角齒	二十里
三角齒	至清山	二十里
清山	至馬村	十五里
馬村	至三官廟	十五里
三官廟	至大嶺貫	二十里
大嶺貫	至荆紫關	三十里

▲十一日、晴。小住。宣教師ウアソス氏を福音堂に訪ふ。晩に至り氏又予を店に訪ふ。氏は諸威人にて藍田なるアンデルソン氏と同じく漢口本部の派遣する所なりとぞ。茶談數刻談。偶々時事に及ぶや、氏は日本と露西亞とは開戦の虞なきや、露西亞は先天的に日本の仇敵なり、東三省朝鮮に於ける現状に徴しても干戈相見ゆるは終に免れ得まじしなど、宣教師のガラにも無き大氣焰を吐きたり。當地には未だ一名の教民も無しと云ふ。

▲十二日、晴。早飯後街上に出て買物などす。獅子標燐寸一個四文、三原に比して安きこと一文。烙餅一斤三十六文、紅糖は當地の名物一斤十文、十二時上船。船中の生

活の窮屈不便不潔わが獄中生活よりも甚し。但し精神上何等の苦痛なければ又二種の妙味有り。舟夫は乗客飲食に關係せず、各自の自供に係る。大小便は多く舟端より河中に垂れ流しなり。但だ大官富商などは皆便器を携帯す。其仰山サ加減實に可笑の極みなり。學台が書信一通を認めたる爲め此日も晚れたれば開船せず。夜は宿船するが支那河航一般の列なりとぞ。由來支那人が字を書くことの遅き實に驚くに堪えたり。一通の手紙に一日はまたしも三四日を費やすも有り。イザ清書となるや一字の書き錯ね有るも數千字の多きも皆徒勞に歸せしむ。門生の老師に於けるが如く目下の者より目上の者に送る場合の如き殊に然りとす。此の如きは實に國家の進歩發達に貴重なる時間の利用に反すること少からず。タイム、イス、モネイなど云ふ觀念は清人の頭腦裡には毛ほども無し。誠に惜むべき哉。然し支那人が日本人の如く手紙を亂暴に走り書きする様になること有らばこは我に取りて由々しき一大事たるべし。英米兩國民は露獨佛の如き歐洲諸國の黃人患説に對して首肯せざるが其根本の理由は日本は一筆帶水を隔てたる大陸に一大強隣を作り出だすことを好まずと云ふの事實なりとす。

▲十三日、晴。天亮開船。船艙相銜んで南下。懸崖絕壁兩岸を壓し峭峯層巒愈出

てい急き奇急灘去つて奔瀾来る行くこと一百里水淺ふして舟幾度か膠す。老^た板^た屢^り顔色を失す。天は幽巖斷橋の下に至つて晩る。舟を繋ぐ。船底に通ふ水の音枕に近く琴を聴くが如し。想起す往年京都四條橋頭の旗亭に蟬娘と語り、夜深く月落ちて此音を聴きしことを。

舟河の氷行速率を量るに一時間約平均二里(日本里)なり。

▲十四日 晴 天灰色を呈するころ林を隔て、聲有り數聲囀々山合に村落有るを知る。食前開船竹林關に至つて停船。龍駒寨と去る一百二十里竹林關は數十戸の溪村なり。太根(一斤二文)豕肉(一斤八十文)燒餅四兩一個六文、鷄卵一個(四文)等向ふ十數日の糧食を準備す。宏道學堂用の化學物理器械を日本より買入れの爲め數ヶ月前上海に派遣されたる學院の專差歸途、此地にて學臺を待合はせ多少の要件を辨じたる爲め數時間を費し四時過ぐる頃漸く開船。漕ぐこと四十又餘里にして山間無人の境に至る。天無うして寸前を辨せず乃ち泊まる。

▲十五日 晴 少し寒過したるを舟は已に前行しつゝ有り。屢々急灘奔瀾に遭ふ。舟子頗る警戒す。六十里江西灣に至り停船。早飯^{さうはん}を吃し、坡に上り鑽石數點を拾ひ、藥心又六十里蒲油河驛下に至る。天既に薄暮。四山色を辨せず。關帝廟下の水濤々と

して私語するもの、如し。

蒲油河は數百家の小驛なり。商南縣を距ること四十里。縣の令藏瑜號芝蘭燈を掲げて迎ふ。家内のまゝ、厓上の公館に上れば酒席を設けて款待す。例の如く魚翅鯉魚等の佳肴卓上に滿つ。主人曰く商南の土地たる由來貧瘠米を産せず。人民皆包穀を常食とし居る程なり。今夕遠來の佳賓を待つに甚だ物の足らざるを遺憾とす。請ふ簡漫の罪を尤むる莫かれ。鯉魚は甚だ鮮ならざるを惜む。遠く湖北より取り寄せたればなると。客曰く何ぞ其鮮ならざることを患へん。惟だ主人の好情洞庭の水より深きを喜ぶのみと。酒は杯を重ねて愈美に。談は醉に隨つて愈多し。藏氏は浙江の人。氏嘗て北京に在りて日本人に就き邦語を學びたること有りとかにてアイウエオなど念じ出でたり。かゝる處にかゝる人の有らんとは夢にも想はぬ所なり。さるにても喜れしき事にこそ。

商南縣城の中學堂には學生二十名を有し、毎月每一人二吊文を支給す。教習は湖北より招聘したりとなり。

▲十六日 雪 枕邊の冷きによと夢を醒ませば舟子既に竿を操る掛聲なか／＼に勇まし。雪はチラ／＼河面に散る。時ならぬに何の花ぞ。四面の景致近きは漣網を

かつがせたらんが如く、遠きは光消玻璃を隔て、見るが如し。寒氣殊は甚し。蒲團引き被りて焼酒を酌み、聊か暖を取り得たり。燈後荆紫關に至る。河勢晶々たり。

▲十七日 雪益々大。早起坡に上り市街を觀覽す。商業殷盛を極む蓋し恩澤を丹河に受くるものなり。丹河此に至つて水量も較や多く、河巾も較や廣さを加ふたり。市街は崖上に上り南北に横はる一條の大街を中心として、數條の衢巷四通八達す。巨店大舖軒莖栴比す。釐金局、電報局、福音堂共に有り。此日盛んに蘭州甘肅産の葉煙艸を舟積みするを見たり。老河口に送くるものなりと云ふ。每一百四十斤運賃二百二十文。白米を購ふに一斗九百文。此地又た落花生を産すること夥多し。洋花生と云ひて通常支那の内地にて産するものよりは較や大なり。崖頭に立つて願望一番すれば、丹河を隔て、群山雄峙し、白雪其裾を没し、寒雲凍つて動かず。飢鴉數點、河神廟頭に匿々たり。

午後四時開船、行くこと二十里、牧家灣に泊す。衡山水亂一川石、雪没兩岸山なる一聯を作り示す。わたしの景致描し得て躍如たり。予も亦た賦作有り、賦歸今日、履蹠踏道、路艱難不易過、留得家山深夜話、滿船風雪下丹河、と衡山讀んで好と稱す。

▲十八日 朝來晴。寒日一出、雪水相映射、群山光輝を發し、皚々として人の目を刺

す。下行するに隨つて河流漸次に廣潤となり、山勢漸次に低矮となり、兩岸漸次に平曠となり、荆紫關わたりまでは山景の主となり、水之が客たりしを之より下方は水主となり、山之が客たり、前むごと六十里雪又來る。娘々洞下を過ぐ。河流の東岸巖壁高きこと數丈、其勢削成するが如く、危ふして船に墜ちんと欲す。正るに徑もなき高き邊に人造の洞二十又餘有り、洞裡に住居を構へたるの跡猶ほ尋ぬべし。傳へ云ふ、嘉慶年間天下大亂の時對岸の村民兵禍を此に避けたるものなりと、一將功成萬骨枯當年爭戰の苦想見すべきなり。又た下ること十餘里、白定鎮に至つて泊す。日漸々昏れて寒煙斷磯に横はる。

▲十九日 晴。日出て、前進、兩岸雪後の絶景收めて、蓬窓の中に在り。十里大石橋に至り、停船。飯後又行く五十里にして、泝川應となる。東岸に城有り、同知來つて刺を通ず。船上ながら酒席の覆應を受く。城中の學堂には英語の科を設け有りと云ふ。又た日本文の數學書を持來りて、其中の一節を自ら翻譯したりとて、訂正し呉れと云ふて出し示す。

食料品の補充を爲す。薩摩芋一斤三文、半白米一斗八百四十文、落花生一斤四十文、燒き黍一斤八十文。

このわたり河幅約二百米突、水深約一米突。

▲二十日 晴 天未明開船。南走二十里双合鎮を過ぐ。一水西北より來つて丹河に會す。四河口と云ふ。河口幅約四十米突。更らに七十里李關橋に至る。舟子麴を食はずやと問ふにぞ何ぞと詰るに此地の名物なればと云ふ。さらばとて試みに五十二文を投じ一斤を買ふ。味頗る佳。市街は河の南岸に在り。此地河南の浙川湖北の光化郎西三縣交界の所にて、三縣互に行政警察の責任を譲つて關知せざるの儀き有り。爲めに殆んど無政府の狀態勿論地方的に在るを以て行旅の人屢と強盜の難に遭ふとの事にて、一行非常に警戒を加へ、特に地方官に知照して兵勇四名を派出せしめて夜中の變に備へたり。然るに此等兵勇(?)の持てる銃は鏽朽して用に堪へず。且つ彈丸を携帶せず。亦た滑稽の沙汰ならずや。因に記す。支那には保鏢と云ふこと有り。一種の保險業なり。即ち盜難に對して人の生命財産を保護するなり。最も多く山東に行はる。中には數十万兩の資本を擁する者有り。平生周到なる注意を以て到處の賊類悪徒と結托して之を賣收し居るを以て彼等は其旗號を見れば敢て害を加へぬと云ふ芝居あり。飽くまで呑ん氣な遣り方なりと謂ふべし。此に至つて河幅愈々廣く二百米突許り、水深約平均二米突となれり。

荆紫關より以下兩岸樹木尠からず。

▲二十一日 晴 黎明より款乃の聲を聞く。前進二十里高岡。又四十里江口。一水西北より來る。湖北郎陽縣に通ず。郎陽江と云ふ。此日まで下り來りたる丹河此に會す。會流點に於て丹河の水色黃濁。郎陽河の水色清碧。畫然分つべし。河巾約二百米突。水深約三米突餘。此より舟子楫を以て竿に易え、蓆を掛けて帆に易え、舟路を東南に折つて下る。江口の河上划子にて魚を賣る者多し。魚の形わか、ボラに似たるもの、黑鯛に似たる者其類少からず。錢四十文を投ずれば潑刺たる物一斤を得。學臺の息子曰く予等父と共に陝に在ること三年、鯉を除くの外絶て魚を食ふを得ざりしと。三年ぶりの好下物其喜びや知るべきなり。前進五十里光化縣を左岸一里かなたに望む。又十里老河口に至り天黑。船を西岸淺沙の渚に泊す。大船巨舶の停繫する者百を以て數ふ可し。帆檣林立す。銅鑼爆竹の聲轟々然として水も裂けんばかりなり。南方の俗開船には銅鑼を鳴らし爆竹を放ち、着船には銅鑼のみを鳴らし划子に坐して聲を賣るもの、人の舟に來つて春を弔ぐもの其數を知らず。賤業者の多きを見れば既に其土地の殷富なるを知るに足る。對岸は即ち老河口市なり。人聲地に滿ち。燈光天を燃かんと欲す。

▲二十二日 晴 早起五文を投じて划子に乘じ上陸、街市を見物す。人煙雜沓、交易繁多を極む。電報局有り、郵便局有り、釐金局有り、茶館、戲樓、青樓に至るまで有らざる無し。錢店、兩換屋若くは銀行の多きは以て商業取引の盛んなるを推知すべし。要するに老河口は南方港市中の重鎮たるを失はず。

船隻の備ひ直ほし荷物の積み易へにて忙はしく、遂に此日も暮れつ。老河口より以下は河勢漸次に廣大なるを以て今までの小形の舟に易ゆるに較や大なる者を以てすること利便なりとす。備ふべき船の種類は概ね次の如し。

扒竿子 (長大概三十乃至二十二米突、幅大概四米突)

篋子 (長大概十八米突、幅大概三米突)

秋子、篙子 (篋子に比して較や小形なり)

最大なるを洪河船とし、最小なるを鴨稍花子とす。大官等の旅行には必ず洪河船若くは扒竿子を以て其坐乗に充つ。予の一行が備ひたるは扒竿子一隻、五十兩篋子十六吊文四隻なりし。

▲二十三日 晴 小住。晚景又た彼岸に上る。上るに落家巷の碼頭よりす。市街は大約井字形を成す。福音堂内地會と記し有りは巨然たる建物なり。街上に人力車の走

るを見る。街上七十歩毎に瓦斯燈を掛く。店舗は軒毎に點せざるなし。使用せらるる石油は皆米國産の物なり。

▲二十四日 晴 早飯後出帆。南下六十里。西岸に人群數十大籠にて何物をか浸漚する者の如し。舟夫に就て問へば砂金を採る者なりと云ふ。一人一日の所得僅かに三百文、多くとも三四百文に過ぎずと云ふ。以て其採取法の幼稚にして且つ不完全なるを知るに足る。このわたり兩岸一帶砂金頗る多し。採取に従事するもの亦た砂からず行くこと三十里。太平店に至り、日没して船を繋ぐ。蕭索たる寒村なれども福音堂一棟有り。洋人の熱心なるに非らずんば則ち此地の將來に向つて何かの望みを屬する者ならん歟。

▲二十五日 晴 黎明開船。南走九十里。午後三時襄陽に着。襄陽は烈士羊叔子の古戰場として有名なり。長八丁許りの城郭水に臨んで立つ。その北背に百米突高の群山透迤たり。城内に中學堂有り。陝西商州のにも勝れる程に規模宏大なり。襄陽は停船の不便なるより商業貿易の盛は皆對岸なる樊城に取らる。例の外人が福音堂を樊城には三個を立て居るにも拘はらず、襄陽には只だ一個を有するのみなるを以て、もその富其他の程度に於て如何ばかり懸隔の存するやを知るに難からじ。

樊城の跨鶴樓に上る、祠有り呂祖を祀る、最高層に上つて放目一番すれば樊城市街を瞰下し、水を隔て、府城を望む、勢指呼すべし、遠くは府城の西北に距る數里の岡丘の一角に羊叔子の碑石を望むべし。

樊城は東西に長く十六丁許り、南北に短く五百三十歩、市街の景況遙かに老河口の下に在るも亦た繁昌殷富と謂ふを得べし、雜貨店に往き大阪製の燐寸一箱(十ダース)を購ふ、價六十文廉なりと謂ふ可からず、賣れ口餘りに好からずとか、左も有りなむ、郵便局あり、電報局は襄陽に在り、元來清國に於て郵便局と電報局と分置せらるゝ所以のものは前者は英人之を支配し居るも、後者は猶ほ支那人自身の經營に係り居るを以てなり。

此に至る水深平均約一米突半。

▲二十六日 晴 南下一百三十里、官莊に至り泊す、官莊は地名たるに過ぎず、兩岸絶つて居人の家を見ず、河巾愈、濶さを加へ、水深愈、淺く、平均約一米突にも不足。

▲二十七日 晴 南下一百四十里、襄家集に至り泊す、船を東岸の下に繋ぐ、岩上簾叢の中より燈火漏れ來る兩三點、襄家集に至らぬ前三十里の處に雷河口と云ふ地有り、其上流十五里の處の東岸に

又た、砂金を採取するもの數組を見たり、今日の一路兩岸概して山なしたま、有るも甚だ遠し。

▲二十八日 朝來陰寒甚だし、南下五十里、安陸府を過ぐ、府城は東北岸を距る八里の處に在り、往くに及ばざりき、又十里、逆風雪を吹いて至る、船前進すべからずとて、繫泊す、舟子に問ふに地の名を以てす、知らずと云ふ、兩岸人の住まざる荒崖なり、夜來風雲益、大波浪猛惡舟を抛覆せんと欲す、衡山又古一絶を賦し示す、春彌東海夢無痕、昨日長風過鹿門、一事願君須記取、扁舟穩載太和魂、予一讀再唱佳哉を呼ぶ、蓋し呈端に非らず、予も亦た歌作を得たり、飄零書劍走天涯、最憶綺陽第一花、斷臥不知風浪大、夢爲胡蝶到君家、衡山一唱哈々然として大笑す。

此夜陽明子が海上遭難の一節を讀んで豁然大悟。
▲二十九日 夜來の風雪全く收つて一天拂拭するが如し、南下八十里、馬良、又三十里、舊口、共に河の西岸端なる數十戸の小村なり、又四十里、沙陽に至り泊す、橋頭の苦月旅懷を照らし、雁聲酸烈聽くに勝えず。

沙陽は微たる小鎮のみ、但し店舗皆洋燈を點ずを見ては何となく陝西の山郭溪村の曠野時代を脱却して南方文明の新天地に入りたるを感ぜらる、電報局、郵便局共

に在り市街は西岸端に在り。
 ▲三十日 天明開船十五里多寶灣を過ぐ又十五里水流甚だ急迅奔湍岸坡を拍ち土塊の墜落して河中に洲を作成するもの數ヶ所舟夫皆淺深に通せず小艇を備ふて郷導たらしむ傳て云ふこのわたり昔時水取有り官軍敵を抵禦する爲め鐵柵を河中に植てゝ流を遮ざりたる跡にて今も猶ほ水底に鐵柵を存すと未だ其眞偽を知らず。

安陸府より兩岸一帶土坡となる水益濁す三十里長樂園を過ぐ又數里水淺うして船洲に膠す長樂園は南岸坡上に在り數百家の小鎮のみ又卅里上市江二十里下市江日は既に天際に没して河面兩岸に連つて濁く冥々望迷はんと欲す又十五里黃家莊に至つて停船。

學台頗る前途に急ぐ舟に命ずるに連夜進行の事を以てす舟子聽かず遂に毎一人に數百文を賞給すべしとの鶴の一聲掛かるや忽ちにして勇ましき掛け聲と共に楫は搖き始めぬ此夜月影を見ざるも薄雲を漏れ來る明かりに舟路を辨ずべし此より上流は淺砂亂石の危險多くて夜中は如何にしても舟行し得ざりしも此より以下は此の如き防害なし。

此日兩岸絶えて山を見ず上市江下市江黃家莊何れも樹林の間なる蕭條たる小村落のみ特に記するに足らず十五里柴口卅里張子港又卅里黑牛渡皆夜中に過ぎつ。
 ▲三十一日 少陰 舟子昨夜來一睡せず續いて前進す四十五里岳口未明の中に過ぐ十五里鳳口に至つて天全く明く五十五里白水河河水土坡を淘汰し勢殆んど街道に逼らんとす築防の不完全なる誠に痛むべし卅里馬元台共に西岸に在る三百家ばかりの小市街なり十五里杜家河漁耕を業とする人家數十戸有るのみ十五里仙桃鎮河の南北共に仙桃鎮と呼ぶ沙陽にも勝る市街地なり電報局郵政局福音堂皆南岸に在り市中の橋頭夜中洋燈を點ず此地盛んに絹糸を産す。
 晩食後開船三十里六嘴又三十里毛々嘴又三十里分水嘴皆半農半商の小村なり更らに行くこと十里月落ちて水先き分明ならずとて暫く停る。

▲二月一日 朝陰午雨晚晴 東方微白の比滿帆風を孕んで走る二十里羊子口林間の寒村たり三十里濟馬口又三十里漢川東岸に在る可なりの商業地なり縣城を東に距る一里襄陽より兩岸絶えて山を見ざりしが此に到つて前望して天際に立の山影を認む又三十里石炭洋汀渚水牛數群を見る皆耕地に使用せらる三十里雲口に至つて日暮る亦た熱鬧の商業地なり三十里廟河又三十里蔡甸に着時に夜

十一時此より小蒸流の引船有れども夜中は開船せざれば止むなく備はず
▲二日 朝陰暮晴 三十里千米集天猶ほ暗き中に過ぐ明くれば秋頭に漢陽鐵製
局の流笛の聲を聞く漢口に至つて商招局派船江永號に乗り移る領事館に友人を
訪ふ久ぶりの面語話頭なか／＼に盡さず晩に郊外の旗亭に小酌す一燈話し來る
十年の心事

▲三日 少陰 晴川閣に遊ぶ前遊を願回して低徊去る能はず詩有り津迷煙樹漢
江邊黃鶴樓高欲晚天山態水容依舊好茫然回憶四年前午後五時開船下江航走二千
百四十里にして瀘に出づ

二月六日なり滞ること旬日俄方に干戈を交え警報仁川旅順の捷を賣らす倉皇
として英船インディア號に乘じ歸朝す先づ第二の故郷たる長崎に上る此間の
紀行は特に記するの要なし何となれば從來内外人の之が研究に従事するもの
殊に多く今更ら事新しく吹聴するの事る徒勞の嫌なき能はざればなり
右の如く老河口より漢口に下るに約十日を要したるが上水の場合には約二十三
日を要す
按ずるに龍駒寨より漢口に至る兩岸の地利甚大ならずとせず而して人戸稀少各

縣府并びに龍駒寨荆紫關老河口樊城沙陽仙桃鎮菱甸を除けば平均約三十里に數
十戸の寒村荒驛有るに過ぎず是れ皆國家經濟未だ發達せざるに因ると雖も抑も
地方官の稅政亦た與つて力有り嘆ずべき哉

襄河水師

老河口より以下漢口まで襄河水師所屬の兵船寬六尺長五丈二隻護衛として一行
を送る來る船首に砲砲口徑三寸二分長四尺七寸を据えたれども銃柄用を爲さず
ホンの虚勢たるに過ぎず管轄區署左の如し

後營 總統帶在老河口 共二十七艘

上 陝西白河縣屬夾河關に至り

下 老河口に至つて止む

中營 統帶在沙陽 共二十六艘

上 鍾祥縣屬流水溝に至り

下 荊門州屬多寶灣に至つて止む

右營 統帶在襄陽 共二十艘

征塵錄

上老河口に至り
 下宜城縣屬茅草關に至つて止む
 左營 統帶在漢川縣 共二十七艘

上長老院に至り
 下新溝に至つて止む
 前營 統帶在漢口 共二十艘

水夫は每艘十三四人皆屈強の壯漢なり
 下漢口に至つて止む

西安漢口間道理

左に予が這回通過し來りたる旅途の驛程里數を掲ぐ聊か後の旅行者に便するを得ば願足る
 十自の... 葉湖... 藍橋... 八〇... 三十五里

藍橋	黑龍峪	八〇	黑龍峪	商州	九〇
商州	棣花	八〇	棣花	龍駒寨	四〇
共四百二十里陸路驛に騎するも橋に坐するも皆可なり					
龍駒寨	竹林關	一二〇	竹林關	江西灣	六〇
江西灣	瀋油河	六〇	瀋油河	荆紫關	一二〇
共三百六十里水路					
荆紫關	吳林	二〇	吳林	孫家舖	二〇
孫家舖	亂石灘	一五	亂石灘	娘々洞	十五
娘々洞	大石橋	二〇	大石橋	關爺廟	三〇
關爺廟	西川廳	二〇	西川廳	双合鎮	三〇
双合鎮	巡路	四〇	巡路	李關橋	三〇
李關橋	高岡	二〇	高岡	江口	四〇
江口	老河口	六〇			
共三百六十里水路					
老河口	竹小坡	六〇	竹小坡	太平店	九〇

征塵錄

太平店	樊城	三〇	樊城	洞庭灣	三〇
洞庭灣	劉家集	三〇	劉家集	小河	三〇
小河	驛城	三〇	驛城	官莊	一〇
官莊	鴨口	二〇	鴨口	風落河	三〇
風落河	周家嘴	三〇	周家嘴	雷河口	三〇
雷河口	杜家集	三〇	杜家集	二壩廟	三〇
二壩廟	安陸府	二〇	安陸府	唐口	四〇
唐口	石碑	三〇	石碑	馬良	三〇
馬良	舊口	三〇	舊口	沙陽	四〇
沙陽	多寶灣	一五	多寶灣	唐津口	一五
唐津口	長樂園	三〇	長樂園	上市江	三〇
上市江	下市江	二〇	下市江	黃家莊	一五
黃家莊	柴口	一五	柴口	張子港	三〇
張子港	黑牛渡	三〇	黑牛渡	岳口	六〇
岳口	白水河	五五	白水河	馬元臺	三〇

一一六

馬元臺	仙桃鎮	三五	仙桃鎮	六嘴	三〇
六嘴	毛々嘴	三〇	毛々嘴	分水嘴	三〇
分水嘴	洋子口	三〇	洋子口	濟馬口	三〇
濟馬口	漢川縣	三〇	漢川縣	石炭洋	三〇
石炭洋	雲口	三〇	雲口	廟河	三〇
廟河	葵甸	三〇	葵甸	千米集	三〇
千米集	漢口	三〇			

共一千五百里水路

一道の釐金局

漢口より龍駒寨に至る間の釐金稅徵所を擧ぐれば次の如し。
 漢口、葵甸、漢川、沙陽、唐津灣、樊城、老河口、汴川、龍駒寨、
 右の中に就て漢口老河口及び龍駒寨を除くの外は皆看票若くは過釐金なる名義
 の下に徵課する三種の通過稅なりとす。筆墨紙及び書籍を除くの外一切の商品に
 は極めて嚴重に漏れなく賦課せられ、脱納するもの有るときは嚴罰に處せらる。

に支那商人の最も畏懼する所の者は、奉旨抽釐と大書せる旗なりとす。然るに外國人若くは外國宣教師などに對しては極めて寛大にして間ま多大の商品を携帶するも、釐金局員は却つて外人を恐れて誰呵せざるの例なるを以て支那商人の狡猾なる、常に此等の外人と結托して官憲の目を偷むこと稀ならず、支那の富商中に心ならずも教民となるもの多きは皆此等利害上の考より打算し來れるの結果なりとす。

殉難六烈士

彼のゾアールの國暴戾にして肆慾頑冥にして不靈人の國を亡ぼし、人の地を奪ひ、人の妻を姦し、人の親を殺し、人の子を孤にす、兇の元罪の丕、列邦の擧つて憤る所、况んや近者異心を挾んで清韓の孤弱に乗ず、我が東方の俠國は俱に天を戴かず、前に還遑の一事既に恨骨に刻す、今又た暴力猾智を弄してわが利權を無視す、同胞四千餘萬一人の義憤を發せざるなし、縱令身干戈の戰に在らぬも平生隣邦の撥亂反正を以て自ら任ずるの人士は皆忼慨腕を扼して怒り、必ずや一矢以て王愾に報ぜ

んことを期す、日夜風雲の際會を瞻望して息まず、沖、横川、松崎、田村、脇、中山諸子の如き即ち其人なり、
 日露兩國の交誼全く斷絶するや、天子劍を按じて赫怒し給ひ、韜畧の將師廣徴の軍を提つて海を渡る、當時燕山に在つて龍臥虎伏したる諸子、蹶然手に唾して起ち、各雄圖を懷にして深く豺狼の窟に入る、或は支那人に拵し、或は蒙古服を被り、身を樓つじ心を碎き、經營慘憺、備さに苦楚を嘗め、鐵道を破壊せんとしては果さず、中道にして事志と違ひ、誤つて敵手に落ち、千古の恨を呑んで遠き異域に不葬の鬼となる、予諸子と友とし、好し、壯烈の行、風流の遊を共にしたること一再にして止まらず、沖君の如きは同窓の友にして且つ貧時の交殊に温かなりしもの、而して今や一たび把臂笑晤せんとするも得べからず、予が斷腸の情何ぞ骨肉に異らんや、何ぞ父母に異らんや、傷い哉、慨い哉、噫、
 吾人は四月二十二日露都發電ク、ロバトキン大將の奏上と題して關東報に載せられたる一記事を讀み、呆然自失したり、記事に曰く

ソルチク驛附近にて捕へたる、日本將校イウコカセイソウ(横川省三)及びオキタイス(沖介)は、導火藥發道路被破、發火藥一ブート半及び蒙古滿州北韓の善瓦なる地圖を携

帝せり四月二十日臨時陸軍裁判所に於て審理を遂げたる所右兩人は對露軍の日本軍人に屬し且つ其軍の成功を補助する爲め露國の鉄道及び電線を破壊又は損害する目的を以て結火薬を散布し之に依りて上記の交通を損害せんとせり其國籍且つ日本軍に屬する事を隠蔽せんが爲めに蒙古服に變装して密かに滿州境域に侵入せしが東清鉄道の上ルチヤク驛より南西三十里處に於て發覺したる犯人なることを探知せり右の犯罪行為は陸軍刑法第一章第二百八十二條に依りイカコカ及びオキを銃利に處するものとす(臣クロボトキ)は此判決を承認せしも兩人の將校たるにより(著者曰く兩君共に軍人に非ず)之を酌量し銃利に變ゆるに銃殺を以てし四月二十一日午後六時刑を執行したり審判の時彼等は神色自若として我は日本の武官なりと答へ何の爲めにして來れるかと問に對し毅然と露國の鐵道電線を破壊する爲めに來れるなり既に武官たる以上は何處より來れるかと云ふか如きは汝輩の尋問すべき限りに非ず又吾輩の答ふべき所に非ず正當の處刑を望むのみと大音聲にて答へ又幾何の日本武官同様の目的にて何處に在るやと糾せしに知らず然れども無數にして置り難しといひ進も動する色なし

天晴れ日本男兒死地に立つての立派な剛氣さよ敵ながらクロボトキを始め感歎せりとは敵國新聞の記する所さも有りなむ誠に男兒國中の男兒たるに恥ぢずと譯つべし

捕縛又捕縛日本人の逮捕せらるる者相繼ぎ今日は又チ、ハルの邊にて將さに鐵道を破壊せんとする其時脱くもコサツクの爲めに取押へられたる日本の大佐と大尉とがハル兵軍法會議の法廷に引出されぬ

牛成の二棟屋根下になき處に栗木の机を前にして椅子と云ふ名ばかりの臺に腰掛けたる三人の露國士官是れぞ當日の判官にして尙右と左に控へたる士官二人の中一人は檢察官一人は被告の辯護人なり

見渡す限り法廷に傍聽する者唯だ二人即ち獨逸新聞記者一人と予とのみ

此時被告を喚出すべし程かにして少しく離頷れたる聲にて裁判長たる大佐は命令を下せり

聽かて現れたる二人の日本士官未だ支那人の扮装を改めず本名は更に名乗らず唯だ其階級を告げ次いで一事實の審問に答へたり

彼等は隠すことなく凡ての事實を自白せり彼等は東京より來れる四人の學生と共に北京を立出てたり其目的はゲイナマイトにて鐵道線路を破壊するに在り徒歩にて蒙古の野を横ぎり漸くにしてチ、ハルに達しぬ去れど其企を實行する能はざりき間もなくコサツクの爲めに取押へられたればなり四人の學生は其時逃延びたり二人の小柄なる黃色人は彼等の勇氣を誇ることなく語り了りぬ被告大佐は正しく前を見て一に鐵道を裁判長に注ぎたれども聊か尊大の風なく大尉は俯して足下を眺め居たり二人共に如何にも一座の同情を惹き一瞬間の後軍法會議に附せらる士官等はクロボトキ大尉に被告を願出づるまでに至れり

檢察官は最早語を断ちて言はず辯護の任に當れる士官は法廷の仁道に訴へて二人の士

官を戦争の捕虜として取扱はんことを請へり裁判長は語を繼ぎ申開きの爲め更に言ふ處なきかと問ひ別に無しとの答へと共に法廷は合議の爲めに休憩せり五分間の後再び開廷豫期の如く共に死刑に處する旨を宣告せり二人の日本人は少しも戦慄すまなく此宣告を諒し而も聊か其辱頭に微笑を浮ぶるを見たり

裁判長軍服に著替んと欲せらるゝかと問へば二人其れに及ばずと答ふ吾は背に冷水を浴びたらん如くに感す此莊嚴なる數分間に於ける詳細なる問答を聞く吾をして氷の如く寒からしめぬ

宣告文及び被告の爲めに特赦を請ふの電文は遠隔なるコロバトキン大將に宛て發せられ一時問を経て返電は來れり曰く宣告文の如く處刑すべしと

二十餘人の歩兵の間に圍まれつゝ日本人は尤も大膽に歩を運び出しぬ郊外に出て行くこと一露里二本の立木の傍らに到りて露國士官は止まれと命すぬ日本士官は彼等自ら進んで死地に就けり目録の布を見るや彼等は手應にて之を拒みぬ彼等は其小なき軀幹を伸ばして正しく直立し頭を擧げ法廷に於けると同様と言ふべからざる微笑を堪へつゝ此時打出す執行小隊の十二の銃彈を各其胸の真唯中に受けて了りぬア、哀れの人よ遂き彼方の東京には二人の士官のなき後に遺せる夫なき妻と父なき子とあらんを

諸子の經歷と爲人とを併せて紹介すること如次

● 脇光三君 君は東京麹町區準町六番地に住する華族女學校幹事福島縣士族淺岡一氏(舊二本松藩士)の第三郎なり淺岡家明治十三年頃一番町なる井伊邸内に住す當時邸内に同住したる滋賀縣犬上郡彦根町の士族協他三郎氏の養子となる死

するとき年才かに二十五白哲長身風采都雅實に紅顔の美少年なり性質温厚にして聰明善く長輩に事へ頗る義理を辨ず麹町小學校を経て日本中學校に入る此頃既に東方の事に志有り轉じて臺灣協會學校に入り又清國人の本邦に留學する者と訂交し兀々として支那語の研究に従事し一昨年五月二十八日北京に到り沖禎介君等と交遊し沖君の文明學校を創設するや田村三君等と共に沖君を助けて教鞭を執り昨年十月より北支那毎日新聞社に入りしが本年二月二十日驟然として行く所を知らず知友皆怪みしが是れを諸子と共に壯圖を企てたるにて沖、横川兩君は四月中旬不幸にして敵の爲めに捕はれたるも臨中山兩君は虎口を脱して計畫を續け清國商人に變裝して出沒中遂に事露はれて共に哈爾濱に致たされ五月二十五日士官の禮を以て銃殺せられたり判問の際余は日本の武士なり速かに法に處せよと言へるのみ復た他を言はず從容として死に就けり戊辰の役祖父利確氏叔父靜翁氏母家の祖父設樂彌兵衛氏共に陣亡し父一氏も敵彈を蒙つて右腕を傷く此家門既に忠武の風有り其の此聲譽兒を出だす偶然に非ざるなり

● 中山熊吉君 熊城の人士多くは豪邁卓落不羈獨立の氣象に富む弱冠にして四方の志有り君も亦た其人なり實に郷黨の名を傷けずと謂ふべし君は熊本縣録町

の人民、本年二十五歳矣、明治三十四年中學卒業の後海を渡つて北清に之を歸かに時事に慨ずる所有り、同志の士天津に北支那毎日新聞を發刊するや、社に入つて雄健の筆を揮ふ、爾後戰雲漠々日露の國交斷絶するや、君曰く嗚矣大夫起つべしと、慨然筆を投じて遠征の途に上りしが、畫策齟齬事破れて、臨君と死所を同うせり、左は君が出發に臨み家郷に寄せたる手翰の一節なるが以て平生抱負の一端を知るべし。

交渉不和と共に敵地に侵入致度戰爭と相成り候得ば此狀が無事に於ける最後
の音信には無之候哉直熊頑健蠻勇以てロスマヤを憚すの日何れの時にか來る
只管腕を練りて蠻勇を鼓しつゝ有之申候云々

●松崎保一君 君は宮崎縣延岡の人、本年三十一歳、其宮崎中學校を卒業するや進んで陸軍士官學校に入らんとし、熊本に赴きしも不幸にして中試せず、快々として樂まず、決然海を渡つて燕に赴く、清國の扶植の大任を以て己が任となし、先づ心を清語の研究に潜め、後聘せられて直隸定州の中學堂教習の任に當り、子弟を教ゆること懇切至らざるなし、君が家道甚だ豊かならず、毎月得る所の報酬の内二十金を割いて母親壽々子の許に送り居たりしが、日露の事變急遽を告ぐるや早く已に滿

州潜行の壯舉を企て、二月二十一日北京より母親に宛て

一筆申上候歸らぬ事に決し候間二ヶ月分御送附申上ます所と其任務は申上ま
せんが○○を受けて出發致します必ずタツシヤて待つて下さい金は月々五十
圓づゝ送ります残り有れば兵隊の家族に遣つて下さい多くは申上ません喜ん
て下さい堀部さんは行かれぬとて腹を切つて死なれました誠に惜いことをし
ました

といふ書狀を送れり、誠に花も實も有る大和武士の模範たるに恥ぢずと謂ふべし。
尙ほ其後大連灣方面に在りし藤原秀實、小生は此度頗る重大なる○○を負ひ
て哈爾濱に趣く覺悟に御座候との簡明なる書を寄せたり、君の遺族は母親壽々子
のみ(實父保定氏は去三十五年六月死去)にて目下延岡町に居住せるが、保定氏の
妻にて君の爲めには繼母なるも、孝謹克く全く清國渡航の後は送金を續けし外片
假名に三日に上げず懇切の書を寄せし老の心を慰めたり、君爲入温柔忠厚一見
婦人の如し、然れども一旦事に當るときは果敢勇斷寸鉄人を斬るの概有り、友誼殊
に厚く、令聞同輩の間に噴々たり、沖君と情交最も切なりし。

●田村三君 松崎君と同じく宮崎の入宮崎郡大淀村字中村町に生る、去三十三

後君は熊本移民會社に關係し、社用を帯びて布哇及び米國に渡航し三年を経て歸る。内田清國公使の任を受けて北京に赴くや、君は專心支那語を研究すること二年半、夫は伊東博士と共に山西方面を漫遊し得る所少からず、次て明治三十五年蒙古地方は滿州一帶の實況を觀察せんとして某士官と共に北征の途に就き、辛酸其に嘗め盡して同年十月十七日蒙古より東清鐵道に出づる途中なる海拉爾に於て捕へらる。夫れより露國士官附添ひて哈爾濱に護送せられ、必ず日本の將校ならんとして私問を受けしも學術の研究の爲めにして來れるものなりと言ひ張りて其實を吐かざりしが遂に十月二十四日を以て哈爾濱の日本人俱樂部に賣付の身となり、十一月六日無事放免せられ、其月の十五日北京に歸着す。日露開戦の以前に當り露兵龍巖浦附近に出沒して密かに防備の計畫を立しつゝ有りとなり、再び此方面の敵狀觀察に赴き幾度か虎口に入りて偵察を遂ぐ、其隱微の間に國家に貢獻したる所擧げて數ふ可らず、昨年十月北京を發せんとするに當り一書を載して一知己に送る。

拜啓時局の急、切迫致檢快千萬に存じ候斯くまでには急速に相運びしは少しく、意外の感を生じ申し候意、自分等の主張致し來りたる目的に相近づき國家

の爲め慶賀至極に存候開戦の場合に到らば此れこそ一世一代の働きを致す者にて御座候間無論北京には留り居り不申候左様御承知被下度先は右迄勿々

省 三 拜

かく暗に知己に對する訣別の意を示したるより推せば、其の最初より深く決心する所ありしや疑を容れず、嗚呼奪ふ可らざるは丈夫の本志なる哉。可謂壯哉。

●冲禎介君 其襟度や豁達、其操守や堅固、威武も屈すべからず、富貴も移すべからず、而して其心事や遠大にして測るべからず。此の如くにして始めて眞個の大丈夫と謂つべし。冲禎介君の如きは即ち其人歟。君江湖に落托するもの多年、一寒洗ふが如し、人有り娶妻を勸む笑つて答えず、善財を勸む笑つて答えず、其志す所を問ふ笑つて答えず。明治三十七年二月日露の事端危急且夕に逼るや、飄然起つて燕京を去る。其往く所を問ふ笑つて答えず、其捕はれて刑場に送らるゝや、從容逼らず笑つて死地に就く。醜虜心膽を寒らし鬼神壯烈に泣く。嗚呼君の如きは古來無數の英雄豪傑の間に一席を占むるも何を遜色有らんや。

君は平戸の藩士冲莊藏氏(現任冲繩縣地方裁判所判事の嫡長、年三十四歳、身材長大、相貌魁梧、眼光人を射る、毅然として犯すべからざるの風有り、若冠にして志を立て

熊本に遊び濟々爰に入り後轉じて熊本中學校に學ぶ俊秀の名風に高く嶄然として儕輩を抜く頗る武術を修め擊劍柔道の奥義を極む。一校の人君を目するに今西郷を以てす。其東京に遊ぶや人勸むるに大學に入るの順序を問むべきを以てす。君肯んぜず曰く官學の病弊疾むべきなりと。乃ち早稻田專門學校に入り英語政治科を修む。君か支那經營の素志當時既に其萌芽を成せり。其讀む所の書交る所の友一として支那趣味を帶る者に非らざるなし。明治三十三年の頃君の北京に赴くや、中島裁之なる者の懇請を容れて其學堂に教鞭を執り子弟を訓董すると諄々として倦まず。子弟皆君に父事す。

君の滿洲壯行の途に上ぼるの半年前中島氏と意見合はず。中島氏遂に君を容るゝ能はず。君乃ち平生君に心服する所の同志田村、島上野の諸士と謀り別に文明學校なる者を創立し以て益々支那人の教育に勉勵し苦心慘愴の結果諸般の設備將さに成備せんとして時局は遂に廢校せざるの止むを得ざるに至らしめたり。君政治經濟法律の學識少からず支那語に精熟し兼ねて英語に通じ水彩畫を好くす。沈毅寡黙苟くも笑語せず。平生父君に事ふると孝謹至らざるなし。父君古錢愛好の癖有り。君の支那に在るや蒐集尤も力む。友に語つて曰く是れも老父へ孝道の一

つだつて而して松崎君の如き予の如きも古錢蒐集助力者の一人なりき。予の陝西に在るや君遠く送くるに日本刀一口を以てし寄言して曰く以て非常に備へよと。又た屢々乾鰯、錫、海苔等を送り寄言して曰く老父の贈る所故郷の味割いて兄に送くる以て客居の無聊を遣るを得は至幸なりと。何を其好意の深さや。而して予や一度び面謝せんと欲するも得べからず。悲し哉。

支那労働者の境遇

有名なる埃及メンフィス河畔に屹立せる三角塔は埃及人が其征服したる外人を隸役して立てたるものにして其建築の宏大なる一基を作るに二千人三年間の勞役に服せざる可らざりしと云ふ。然らば則ち彼の萬里の長城の如きは數十萬の人民を勞役したるや明かなり。諺に曰く

“Building the Great Wall spoiled one Generation, but saved a thousand.”

吾人は寧ろ其の無用の長城と云ふの當れるを信ず。凡そ支那に於ては多數の勞役

を費やしたりと断定せらるゝ而かも無益にして馬鹿氣たる大建築、大工、車、屢次行はれたり、是れ蓋し往古より人口非常に過多なりしが故なりとす。人口過多に伴ふ當然の原則は賃金の低廉、労働者生活の困難なりとす。世の中に支那の労働者程憐むべき者は有らじ、彼等は得る所僅かに其口を糊するに足るのみ、これとても仕事有るときの話なり。一朝世間の不景氣、其他の結果より労働の途を失ふ時は懼々焉として人の門に一飯の哀を乞ふもの比々皆然り。支那の労働者と乞食と甚だ近く其境界を接するを見ても労働者の如何に困難なるかを想見するに餘り有らん。何となれば是れ共に經濟發達の程度に比し人口過剰なるより生ずる不免の現象なればなり。英人アルフレッド・ステット氏曾て説有り曰く「支那に於て農民の次に位するものは工手（メカニックス）なるが、こは農民と同じく勤勉なれども貧窮更らに甚しく、營々として長時間の業務に従事すれども、其使用する所の器具一切舊式にして勞力を節約すべき新器械を採用するを疾惡すること甚し。工手の大部分は街市に出て、其生業を爲し、裁縫屋、理髮師、鍛冶屋等街市に彷徨して華客を渉るもの少からず」とこれ實に真相を穿ち得て切實なるものなり。労働者は大概朝より晩まで汗を流して働き、僅かに一百四十個錢位（一百個錢は晝飯我十錢に相當す）を得、手

に相當の技能有る者と雖も其工錢之に準じて低廉なるを免れず、試みに二三の例を擧げんか。

- | | |
|----------|--------------|
| 職名 | 一日勞銀 |
| 木匠(大工) | 三百個錢 |
| 小木匠(建具師) | 全前 |
| 瓦匠(屋根職) | 二百五個錢 |
| 裁縫的(仕立屋) | 四百個錢 |
| 趕車的(御者) | 八百個錢(乘車賃を含む) |
| 拉車的(車夫) | 三百五十個錢(全前) |
| 種地的(小作人) | 七十個錢 |
| 使喚的(下人) | 全前 |

右の中御者、車夫は自ら車馬を具へざる可らず、故に此等の元資を控除するときは其勞力に對する純粹の報酬として餘る所幾何もなし。大工、建具師、屋根職の如きは我國と同じく請負師を介して職を求むることなるが、其請負師は一種の労働者監督人に過ぎずして、從て其の取る所もこの監督に對す

る報酬にして殆んど其の使用する所の労働者の賃金と差異なし。右は普通の技能を有する者の賃金なれども、其過半は技能その物に對する報酬にして、労働其物に對する報酬たる極めて小部分を占むるのみ。故に手に何等の覺えなき輩の得る所は殆んど己一人を支ふるにも足らず、病めども藥の購ふべきなき者有り、饑ゆれども食の求むべきなきもの有り、嚴寒肌をつん裂くの日と雖も、着るに破れたる單衣を以てする有り、一家の生齒を増加し、或は職途を失ふが爲め、骨肉離散し道途に臥死するもの擧げて數ふ可らず、其淺間ましく憫むべき様は牛馬にも劣れり。

支那に於ては罪人が最も殘酷なる刑罰と取扱とを受くるにも拘はらず、竊盜、強盜、殺人の極めて多きは畢竟労働者の生活極難なるより生ずるの結果たらずんば非らず、夫れ飢えて死するも人の物を奪ひて死するも恒心なき者より見るときは死は一なるに非らずや、又た支那の労働者が海外に於て、百方排斥侮辱とを受くるにも拘はらず、其出稼に出づるもの年一年と増加するは畢竟其本國に於ける困難と不幸とに比すれば此排斥も此の侮辱も遂に蚊虻の一咬ほどにも感ぜざればなり。

又た彼等が概して非常に勤勉にして有ゆる勞苦に堪ゆるは競争に力むるの結果なりとす。前に米領比律賓に於て支那労働者驅逐法案の令行せられんとしたるにも拘はらず、明治二十五年十一月に至り、遂に此禁を解かざる可らずとの輿論は生じたり、其理由とする所は一週六日の勞役に堪え得べき勤勉なる労働者は支那人の外には求む可らずと云ふに在り、此結果四千萬の支那労働者此島に於て生活の道を得るに至れるは支那の爲めに大賀せざるを得ず。

わが見たる支那の風俗

其一

先づ服装に就いて申さう、服装は四季の變化に連れて一様で無いが、此處には概通概通て申し述べよう、第一に何んな物を着るかと云ふのが問題である。
小衫子コサシ又は汗褌アハヒ兒

これは即ち我が下襟ヒタカの類である。四季共に衣る袖口平均三四寸位の筒袖であつて、

長さは腰まで来る。極く傲澤の大官豪商などは絹物を用ゐる者も有るが、多くは木綿物である。支那人は外面丈けは非常に綺麗を張るが、人に見えない所は少つとも願慮ぬ、中以上の者でも其小衫子を見ると屹度虱が五六匹位は割據して居る。臭虫は勿論の話。

袍子、襖兒、大衫子、開又袍、女袍子、皆小衫子の上に衣るので、大同小異て有る。何れも筒袖で袖口平四五寸位、長さは足の跟に及ぶ。但し女袍子は婦人の着るもので少し短い。即ち膝の所までしか無い。小襖兒は袍子の下腹迄のものを云ふのである。袍子の事を大襖兒とも云ふ。大衫子は夏の袍子と云ふても宜しい。開又袍は禮服て有つて他と異なる點は他は皆裾の左右に割れ目が付いて居るのに、これは前裾の前部の真ん中に割れ目が有る。大衫子は上中流は絹紗、麻紗、湖縹、湖南て出来る紋縹子で寧波て出来る者即ち寧縹に比べる。と地が非常に薄くて較や我が羽二重に似て居る。並幅一尺平均四五寸、紗縹は大幅一尺平均八九十錢、麻紗にも段々種類が多いが大抵湖縹位と見て可なりだ。中流以下は皆んな群青色の洋布て有る。袍子其他は上流は寧縹て拵ぬる。寧縹の最上等は大幅一尺平均八九十錢て有る。縹子湖縹も用ゐる。近來は日本製若くは自國製

の藍色若くは灰色等の無地の絨を用ゐるのも間々見受ける。裏は大抵ペロ／＼の絹布て有る。冬は毛皮を用ゐる。羊、蒙古鼠、狐、猫等が普通で、貂皮となると一枚が數十兩するので、一千兩も投じて袍子の裏などにする者は餘程の金持だと知つて宜しい。開又袍は役人の上等な奴は大抵錦で拵ぬる。誠に立派て有るが、小役人のヒ／＼は皆んなペロ／＼物てやつてるのが多い。而かも一着を一生涯一代を通して着ると云ふ筆法で、觸れば破れ相なのがある。

馬褂兒、大褂子、臥龍代、外褂、女褂、砍肩兒、斗篷、馬褂兒は丁度わが羽織を着べき場合に用ゐられる。馬褂兒無くて面會するは友人親戚等極く無禮講的の間柄ならては爲ぬことなり。四季共に用ゆ。大褂子は馬褂兒の袖と丈けとの長さも、即ち馬褂兒は大抵袖口の長さが腕首の所までしか無く、幅が袍子より廣きこと三四寸位であるが、大褂子は指先より長さこと一二尺も有る。又馬褂兒は丈け下胴のわたりまで有るが、大褂子は膝の邊に達するのが普通。通じや、臥龍代は南方では長袖子、馬褂兒と云ふて、即ち馬褂兒の袖の長いのである。但しこれは大褂子と同じく略服の中に算へられて居る。外褂は開又袍の上に着るべき羽織である。此二件は丁度わが大禮服に相當する。外褂の長さは脛の中程に達

する。裾は前後左右に割目があつて、其割目から下の開又袍の模様が見ゆるのであつて、なか／＼立派な物だ。袖の具合は馬褂兒と差不多だ。背中の部と胸部とに補子と云ふ者が有るのは五品以上の官人て無ければ付けることの出来ぬ國法だ。これは六寸平方位の錦地に仙鶴、鷄、孔雀等を金銀の線て落ひ出して有るので有る。仙鶴は一品官である。鷄は二品官、孔雀は三四官といふやうに一定の規定が有る。而して文官はかく禽類を用ゐるが、武官は獸類を用ゐる。即ち武官の一品官は麒麟である。皇帝陛下は龍である。外褂の切れ地は夏は多く紺色の薄絹織であるが、他の三季は皆同じ色の緞子を用ゆる様だ。女褂は女の馬褂兒である。馬褂兒と異なる點は領子、合せ目、肩と脇の間、袖口に縷を付け邊を取る。これは一種の裝飾であるが、可成奇麗な切れを用ゐてある。將來はこれに用ゐるさす目的で、リボンを特別に製造して輸出するなども随分見込の有ることと思はれる。秋肩兒はわがチャン／＼袖無し、胴衣の様な形式で、馬褂兒の下に着ることも有る。着ないことも有る。それは人々の隨便だ。斗篷は冬に限る。即ちわが二重廻はしの役目をする。極上等のは緞織等の外面に貂、狐、鼠等の毛皮が付いて居る。中には一千兩以上のものも有る。馬褂兒大褂子は外面に貂若くは黒狐腿の毛皮を付けたのが殊に珍重されて居る。羊、普通

の狐、蒙古鼠等の毛皮なら裏に着けるのが通常である。切れなら上等は模様付きの縲織を用ゐる。時適には羅紗などでやつてるものも有る。秋肩兒には殊に羅紗を使うのが多い。メンフランネルなどでやつてるものも有る。支那人は最も外部に綺羅を張る。表面はステキな物で作つて有つても裏は木綿物で出来てるが多い。日本人の氣質とは大反對だ。

右等の衣服の合せ目は皆んなボタンで止めるので有るが、其の合せ目は胸部の真ん中であるのと咽喉から右の側胸へ掛けて合はせるのと、兩様有るが、後者が正式で有つて前者は畧服の場合である。但し外褂に限り真中で合せて有る。これはツマラ事の様で有るが支那人に取つては肝甚なのである。即ち左りに合はせるのは左衽と云つて野蠻人のすべきこととして大に輕蔑視して居るからである。秋肩兒斗篷は男女共に用ゐるが、大褂子、臥龍代は女は着ぬ様である。褲子、套褲、襪子、鞋靴子、

褲子はわが股引の臀部のあたりの少しダブ付いたもので、裸足に直接に穿く。この下に緊褲子と云ふ様な物は穿かない。然るに支那人は一着の褲子を一季穿通しにする奴が一般である。爲に非常に不潔である。これは極く下に穿くので外から見ぬ

ぬから切れは極く粗末な物を使ふ。女の褲子には金銀の線若くは其他の切れて縋を付けて有る。套褲は其形稍々洋服の半ズボンに似て居る。但し穿き方が上下反對である。即ち半ズボンは腰から膝までだが套褲は膝から足首迄で、それを紐で褲子を緊める帯に吊るして褲子の上に穿くのである。切れ地は上等はヤハリ寧織が多い。冬は金持は上等の毛皮を裏にしたりして随分ツマラヌ傲澤をやる。女は適には穿いてゐるものも有るが概して穿かぬ様である。襪子は即ち足袋である。支那人はこの脚を出すのを尤も輕蔑して嫌がる。最下等の勞働者でも襪子丈けは穿いてゐる。日本のと差不多だ。但だ「コハデ」で止めない。紐で繫括る。切れ地は普通粗綿布で上等になると「キヤラコ」カチギンを外面にする。冬は綿を入れる。又毛皮を裏にする。北方では殊にそうで有る。これは寒氣が嚴列で有るからである。餘の三季は夾合である。女は錦などで裝飾をする。楊貴妃の錦襪は後人が數萬金を投じて求めた。女は又白布で例の腐れ足を巻く。丁度燒傷の上を繃帯した様な具合だ。而して其上に腿套（又は脚籠）と云ふものを捲き付ける。これは一種の裝飾で花の模様などが描いて有る。鞋は即ち短靴である。これは通常穿くので靴子即ち長靴は大禮服を着たときに限ぎつて穿く。黒網子で出来てゐる。但し雨天に穿く長靴は革製である。又陝西地にな

ると雨天には短靴に木製の足（わが日寄下駄に似たり）を纏り付けて穿くものも有る。草鞋は鼻緒を足の親指と次の指との間に挟まない點が日本のと異つて居る。
 腰帶（腰帶） 褲帶（褲帶） 腿帶（腿帶）

腰帶は袍子、開又袍を緊めるのである。女袍子には帶は入らぬのである。袍子も切れ地の柔らかい物で出来てゐる時は用ゐぬ。寧織の様なゴツ／＼した物の時は必ず緊めることに成つて居る。長さは普通一丈少し出る。但し半幅だ。物質は上等だと湖縞が多い。二寸幅の絹の平ら打ち紐の兩端に房の垂れたのなどは頗る奢つたものだ。皆んな後で挟むのである。結ばない開又袍のは即ち束帶で有つて、これはわが洋服のズボン緊めの様な具合で長く垂らして居ない。わが國の女帶止めの様な風に前て合はせる様に成つて居る。其合はせる物には非常に奢つたのが有る。玉、壁璽、翠玉、金、銀などで半ば否な全然裝飾の爲めてあると云つて差支えない。褲帶は褲子を緊めるので、これも前で結ぶ例の通り人に見えぬ所だから極く粗末な物質で作えたのが多い。最上でも大抵はベロ／＼絹である。女は結つた兩端の餘りを膝あたりまで垂して居る。これは人にも見える所だから色々な花や何かの箔がして有るのが有る。七寸幅の六尺長である。襪帶子は足の首の所を緊める。即ち先づ褲子の口を次

に襷子の口を其次に套褲の口を縫まぬ様に折り、其の上から三匠り程引き括めるのである。五分幅二尺五寸長位の平打の紐で、善いのは絹地である。女は套褲を穿かずに襷子ばかりでそれを襪帯で括りもせず、フツ付かして居るが有る。丁度洋服のズボンの様な具合だ。衣服には大に流行が有る。近來は可成袖の狭く總体に餘りフツ付かぬのを以て好しとして居る。即ち此點に於て舊式の裁縫屋は南方のハイカラ連の注文に應ずることが出来ぬのである。又極く通人になると餘り仰山な色合やゴテテした模様の有る物質を避けて、可成淡調なのを擇ぶ。又た袍子には近來多く領子の付いたのを用ゐる。領子の付かない而かも袖の寛く長いダブテシた袍子を衣て居るのは陝西若くは甘肅の奥の方の郷下人に多い。

喪中に在る人は粗服で、色は皆な黒いものを用ゐる。これから少々戴る物に就いて御話し致さう。

小帽官帽風帽包帽

小帽は支那人が一般に戴る奴で、これは諸君の御承知の通り、秋末から冬を通して春初まで戴る。屋内でも戴つて居る。人に面會する時も戴つて居る。春秋に戴るのは紗帽と云つて黒の紗で出来てるのが有る。これは頭が逆上せなくて大變具合が宜

い上に一寸とポツチが付いてる。これは通常は紅色の木綿糸で組んで有るが、上等になると珊瑚の小玉わが所謂南京玉位の大サと糸に珠子貫しにして、それを恰かも牛の糞の様に捻つて有る。然し偽珊瑚が多い。喪中に在る者は皆黒色のポツチを付けて居る。官帽には段々區別が有る。即ち暖帽涼帽纏帽圓帽で有る。暖帽涼帽は役人が大禮服着用の際に戴用するので、暖帽の方は冬及び冬の前後一ヶ月位の間に使用する。これは大抵早瀬と云ふ毛皮で縁が出来てる。其縁は下から上へと折り返して有る。外側の真中から縁へ掛けて紅色の絹の太然の糸が房に成つて下がつて居る。價は大抵四五兩位だ。涼帽の方はわが昔の陣笠に少しも異ならぬ形式で、幾方方は今の饅頭笠若しくは昔の盞に折り笠の様に極く細く劈いた竹を編んだのを心にして其上を白の絹糸で蔽ふて有る。やはり外側の真中から紅色の絹房が下つて居る。喪中に在るものは暖帽のでも涼帽のでも房の色が黒い。暖帽涼帽の外側の真中に付ける頂子と云ふものがナカ／＼八ヶ間敷いので、殆んど親指位の大サの楕圓形の物で有る。其色が官の大小に依つて區別が設けて有る。紅色紅頂子は一二品官、藍色藍頂子は三四品官、水晶水晶頂子は五品官、白色白頂子は六七品官、金色金頂子は八品官及び秀才進士が使用することに成つて居る。而して物質は人

の隨意で例へば紅頂子は珊瑚でやり、藍頂子は翠玉でやると云ふ様な風である。金頂子に純金を用ゐてるのなどは未だ見たことが無い。皆んな銅に鍍金したものだ。それだから一名銅頂子とも云ふのぢや。又た五品以上の役人になると花翎と云つて頂子の所から後の方へ一尺五寸位の長サの鳥の翎(重もに孔雀の翎で出来てる)を尾の様に垂らして居る。頂子に結び付けて有る翎管子と云ふて筆の鞘の様の物に翎を挟むので其翎を挟む穴の三個有るのは一品で、二個有るのは二三品官で、以下は一個しかない。翎管子翠玉などで出来た物は一個一千兩位のも有る。多くは玉、漢玉水晶などで有る。花翎は五品官以下でも賞戴と云つて特に天子の思召で戴ることを許されてるのも有る。これは金持に多い。所謂金で買ふので有る。又涼帽の前方には眞珠が付いて居る。然し秀才舉人などのは大抵假定的である。これは皆んな付いて居るが何んの爲めであるか未だ研究しない。然し大方裝飾の爲めだらうと思はれる。纏帽と圍帽とは官衙の小使役人讀書人の家の子郎等などが主人若くは官衙に事有る場合に戴るので、マリア奴郎の禮帽である。形は纏帽は暖帽と同じで同じ時季に用ゐ、圍帽は涼帽と同じで、又た同じ時季に用ゐられる。紅色の房が水牛の尾で出来て居て、白の絹紐で蔽ふて無い物質は筆を編んだ物である。

風帽は嚴冬に戴るもので、丁度わが消防夫の蓋る頭巾の様な格格をして居て、頰や耳や頸の周圍に風の襲はぬ様に出来て居る。物質は普通には紅色の羅紗、フレンネル、メンネル等の表面に藍色の木綿の裏を使つて居るが上等になると鼠の毛皮などを裏にするのもある。

右の外に尙ほ給巾として例の孔明の蓋つた奴が有る。四川で尤も行はれてゐる。切れの袂の様な物の口に給の通して有るのを穿つて其給をへるのである。喇嘛の坊主や道士の蓋ぶる帽子は一寸説明が仕にくいから止める。

包帽は女の蓋る物である。これ名は帽子であるが帽子と云ふより寧ろ頭にゆる帯と云ふ方が好からう。普通黒緞子で出来て居る。若い者のは金銀の糸や何かで花の模様などが箔ひ出して有る。

次には裝飾品并に日常の携帶品の御話して有る。先づ男の裝飾から申し上げ様なら

朝珠(チヤウジュ) 朝珠(チヤウジュ)

朝珠は珠數の長い様な物で、大禮服を着た時に首から胸へと掛ける。大抵下朋迄達する珠は珊瑚琥珀、白檀などで所々に翡翠や水晶や、鑲嵌の玉が交ぜて賣じて有る。大

臣宰相のになると数千兩に値するものがある。随分馬鹿氣で居る。五品以上でなければ掛けられぬ國例で有るが中には僭越でやつてるものも有る。搬子は畢竟親指に穿める指環である。元來は滿洲の旗人が拉弓の時に用いたものだがそれが世が太平情弱となるに連れて遂に裝飾品と變化したのである。玉、漢玉で出來てるのが尤も多い。翠玉の一個千兩もするのを穿めてるのは餘程の金持か大官でなければ滅多に無い。尙ほ小帽の前頭部に壁爾の珠を付けるのも一種の飾りてこれは殊にハイカラ紳士がやる。女は例の

簪子及頭花

を頭に飾る。簪子はわが甲屏である。通常四五分幅二寸五分長だが、滿洲婦人のは一寸幅一尺長位のをやつて居る。これは後頭部のあたりに横に据えて、それに髪を左右から互ひ差ひに捲き付けるのである。頭花は即ち日本の花髪挾である。支那人は四五十の老媽でも紅い色や何かのゴラクした花髪挾をやつて居る。甲屏に髪を巻き付けると餛飩の様な形になる。其周圍に挾す。兩側に一本づゝ挾すのも有れば一本しか挾さぬのも有る。多いのは四五本挾して居る。包帽の兩側に挾んで兩鬢の所に花の來る様にするのも有る。奴等の盛裝した時は軍艦の滿艦飾をした様に立

派である。否、シッコイ程仰山である。若い者は未だしもシッコクチャ老婆が頭の滿艦飾をやつて、顔に濃厚に白粉を塗り、清少納言の悪口では無いが庭の雪解けした様な所へ以て來て、眼のまわりを紅く描いたのは日本の色狂と些つとも異わらない。支那の婦人は老幼ともに顔に紅白の粉を搥くが、北京を中心として其附近では殊に厚く塗る。長安などになると稍淡裝になる。額の髮毛を抜いて眉毛を削り、更らに墨に書くのは殊に上海其他南方に多い。又包帽の下側に珠を連貫したものも挾んで額を飾るのも殊に南方に多い。又男女共に通じて玉、翡翠、瑪瑙、水晶、下等は臘石、古錢等を左りに前額のポタンの所から紐で吊るして居るのが有る。小供や若い者に尤も多い。夏は香串子と云つて伽楠木と云ふ香木を珠の形にしたのを八寸長位の紐に連貫して環に作ったのを下げて居るものも有る。なかゝ高尙な臭いがする。

耳環子、手釧、鐲子

耳環子は耳タボに通して有る小さい環である。大抵金、銀、白銅で出來て居る。環から花や何か形に出來てる金屬の飾りが下がつて居る。手釧は即ち指環である。金の指環などやつてるのは滅多に無い。大抵玉か銀ので有る。鐲子即腕環もやはり同じ物質のが多い。近來北京前門外や上海四馬樓の粗々達の中には西洋製の十四金のや

一四八
鍍金のを穿めてるのが少くない。西國製の時計も、懐中時計の十四金のを、それから携帯品の御話に取り掛らう。時計は、懐中時計、腕時計、水煙台、鼻煙壺、煙管、パイプ、扇子、幅幅傘、支那にも洋眼鏡、懐中時計、パイプ、水煙台、鼻煙壺、煙管、パイプ、扇子、幅幅傘、支那にも洋眼鏡を掛ける氣取り屋連が少くない。然し實際近眼者が多いのである。それは、云々譯である。現在鐵道や汽船の通つてゐるのは、尨大なる支那全肺から見ると、極く僅少な部分に止つてゐる。此僅少な部分の外は交通が不便であるから、石油を使用することが出来ぬ。電氣燈などは夢に思ひ寄らぬので、今日でも伏魔神農の遠き昔と同じ様に、種油や燭燭の薄暗いのでやつてゐるから、目には非常に悪い。讀書人中、近眼で無い物は殆んど無いと云つても過言ではない。殊に内地になると盛んに唐辛を食ふ。これも阿片と同じく視力を害する一原因に成るだらうと僕は信ずる。そこで支那人の眼鏡は大きい直徑大抵一寸五分位ある。これ塵の澤山な大陸の事である。から半は塵防の爲めである。縁は大抵白銅である。上等になると本藍甲で出来てゐる。近來は小形の金縁(勿論鍍金が多い)のを掛けるものもある。勿論歐化者流のキザ達と知り玉へ支那人がこの眼鏡を携帯するには何うするかと云ふと眼鏡壺子と云ふ物に入れる。この眼鏡入れは相變らず金ピカの物が多し。それに絹糸の房が下が

つて居て、玉や何かの緒が付いて居る。紐で腰帯に吊るすのである。懐中時計は、鍍金のを尤も多く使用する。日本製のも大分需要がある。時計も表套(時計袋)に入れて腰に下げる。近來は袍子や馬掛兒の裏に口袋(ポケット)を付け、それに入れ、鍵りを領子のボタンに付けてゐるのが流行つてゐる。ハンカチーフも使用者が少くない。日本製のもの尤も多い。藝者などは絹地で縁に立派な箔のして有るのを大變好むてゐる。此は日本の商人の参考迄に申し上げて置く。水煙台は御承知の通り、煙艸の煙を水に通して吸ふと云ふ組織の物である。大抵白銅で出来てゐる。善いのは七寶などが有る。漢口の名産である。價は大抵一二兩から三四五兩である。これに使用する煙艸は二種ある。一は其色紅褐、他は茶色で前者より強い。共に甘肅の名産である。この水煙台を左手に火紙として、麥葉で拵へた紙の燃つたのに火を付けて、右手に持つて吸ふて居る様は、誠に呑氣である。

征塵錄終

明治卅七年十一月二十三日印刷
明治卅七年十一月二十七日發行

征塵錄與付
定價金四十錢

著者 小山田 淑助

發行人 中野 良吉

印刷人 白土 幸力

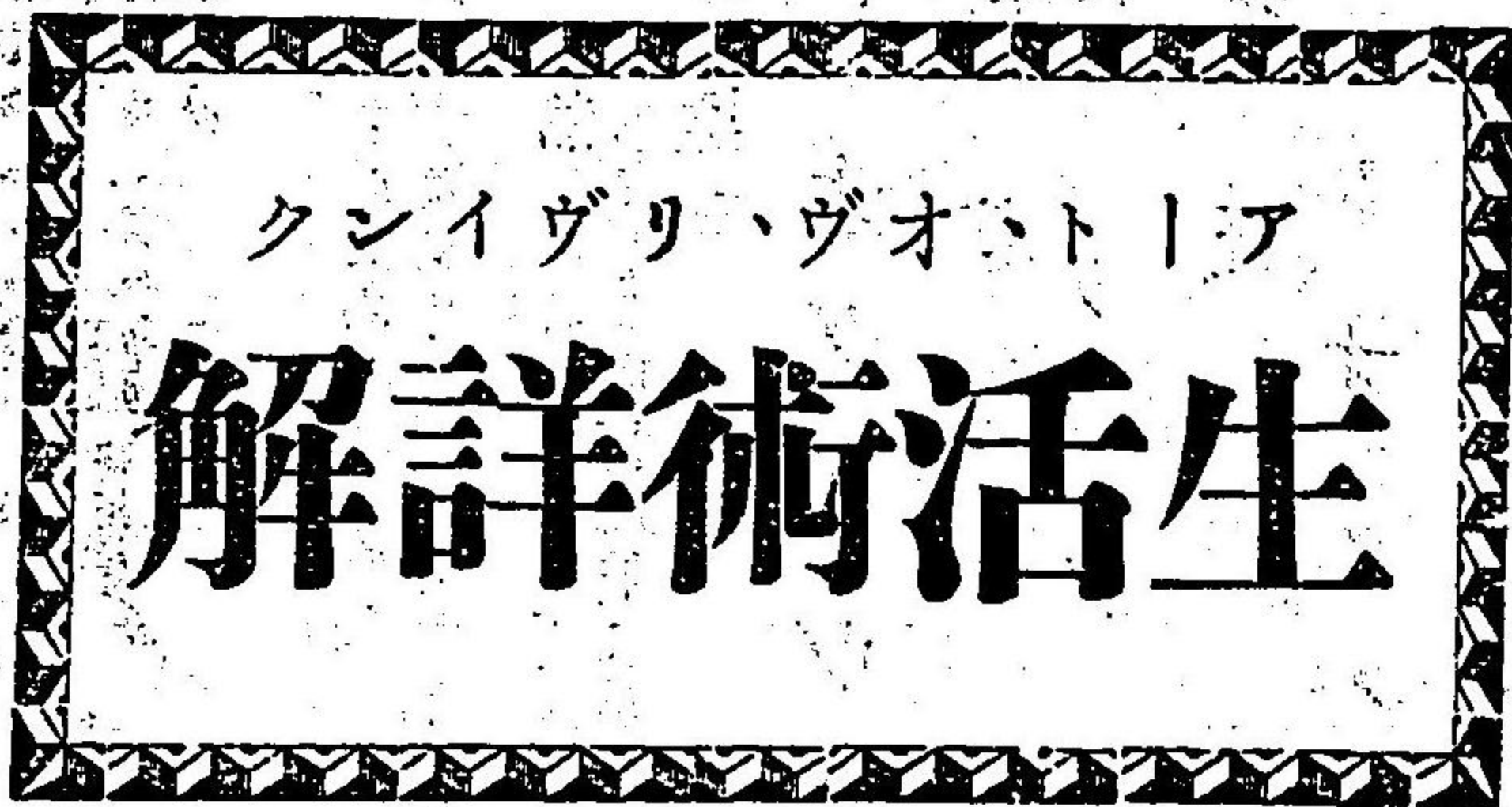
印刷所 三光 堂



發行所 東京市牛込區矢來町十七番地
大賣捌 東京堂 ○前川 ○修學堂 ○林平
中野書店

スミス イスラ原 著 喜安 大校訂
英語學研究會譯述

美
本



洋
装

正 價 三 十 三 錢 郵 稅 四 錢

○本書は英學新誌社發行のスマイルス氏著アト、オウ、リウインクを同社主増田先生の許諾を得て譯述したる者にして其特色は解釋正確にして且つ注意周到なるのみならず辭書に於て知り得へからざる所も説明して遺すところなく恰も囊中に物を探ぐるが如し乞ふ本書研究者は勿論一般人士と雖も一本を供へて座右の友とせられんことを切望す

秋 田
雨 雀 著

新 集 黎 明

洋 裝 美 本
定 價 二 十 錢
郵 稅 四 錢

自序に曰く
黎明に血痕多しと人の笑はど
吾は答へん然り戦争と共に生れたりと
黎明の調は餘りに拙しと人の笑はど
吾は答へん然り吾は處女なればと

吾が唇は小雀の咽喉の如し
朝の空氣に觸れて動く
歌ふを責むるは餘りに酷し
わたるを免せ庭の篠竹

(うじやく)

ユング原著 英學新誌社纂譯

英和 熟語大字彙

(全一册)

洋裝菊判大本紙數凡六百頁語數凡六千餘
定價金壹圓四十錢
郵税十錢六

本書は彼の有名なるユング氏の熟語大字彙に適當なる和譯を附したるものにして其眞價は世既に定評あり敢て喋々の辯を待たず英文學に志ある諸君は座右に欠くべからざる最上無比の良書なり請ふ一本を供へられんことを
(中外英字新聞評) 熟語字書中の白眉と稱すべき者にして研究考索汎く群書に涉り解釋明晰にて語數最も多く毫も遺漏の憾なし印刷鮮明眞に英學者の師友となすに足る (餘は略す)
スマイルス氏原著 文部省檢定済

アートオヴリヴィング

正價二十八錢
郵税四錢

同 氏 原 著

キヤラクター

正價二十八錢
郵税四錢

同 氏 原 著

クエストオフハピネス

正價二十八錢
郵税四錢

津輕純夫譯述

品性論譯解

洋裝美本全一册
金四十錢郵税不要

○本書は世既に定評あり敢て喋々の辯を述へず

試験とは如何なる者なるかを解釋したる者は本書なり

◎二十七年新刊◎

池田眞穂 編纂

及第者答案集

○洋裝大本 全二册

●高等文官之部 價廿二錢 郵税四錢 ●判檢事辯護士之部 價廿二錢 郵税四錢

(注意) 本書は世間一二類似の書ありと雖、只試験科目中の、一二を抜抄したる者、試験とは如何なる者なる哉、を知ることを得る答案集なし、故に編者茲に見る處ありて、本書を成せり

(特色) 本書は前述の欠を補はん爲に、出たる者にして、三十六年度文官高等試験及び司法官辯護士試験及第者の内、優等者諸君の、論文、迅速作文、筆記、口述に

迄る一貫したる者と主とし猶模範とすべき、答案を添へ又附するに最近試験問題及び試験規則を以てす

世間類書あり御求の節は中野書店發行と御指名を乞ふ

斯法研究の好伴

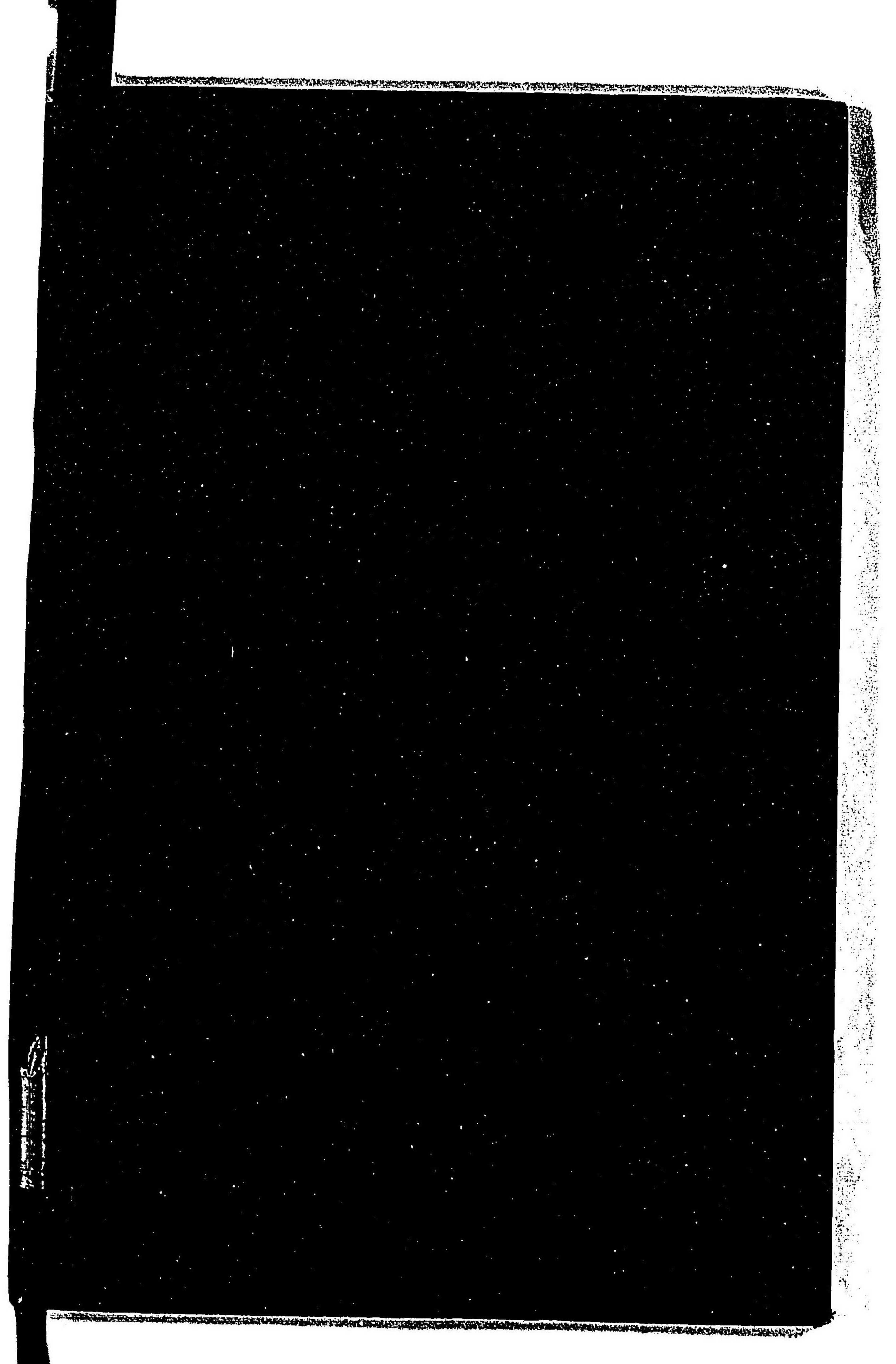
著生先造廉賀古 士學律法

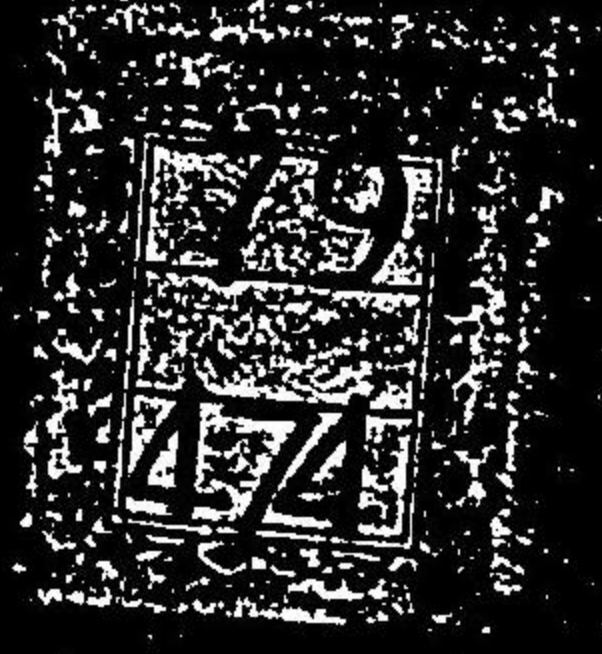
版 改
論 新 法 刑

洋裝美本 紙數七十六頁 總論之部) 正郵稅 金十 二六 圓錢

○本書ハ五版發行以來久シク品切レ
ノ處今回著者ガ多年熟練ノ思考ト豊
富ノ學識トナ以テ現行刑法ト改正刑
法案トナ比較論斷シ以テ刑法ノ真相
ヲ闡明セラレ加フルニ靈妙ノ筆ヲ振
フテ其繁縟ヲ削去シ爾後新研發明セ
ラレタル所ヲ増補シ舊來ノ面目ナ一
新セラレ恰モ錦上花ヲ添ユル者ト云
フヘク學者實際家ニアリテハ好參考
書タルヘク斯法研究者ニハ唯一ノ良
教科書タルヲ保證スルモノナリ

79
777





026576-000-9

79-474

征塵録

小山田 淑助/著

M37

ADD-0255



